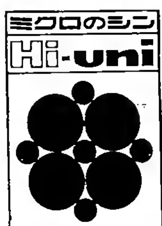
ハイ-ユニ

黒く・濃く・きれいに書ける理想のシン
そのヒミツは
理想の粒度配合



9H 6B・17硬度
1ダース1200円 1本100円



三菱鉛筆
三菱鉛筆株式会社

日本ハンドボール協会30周年記念を祝す

財団法人 日本体育協会
会長 石井光次郎



日本ハンドボール協会が、昭和13年2月に日本送球協会として創立されて以来、こゝに30周年を迎えられたことを心からお祝いし、ハンドボール競技界の今日の隆盛を築かれた輝やかしい30星霜の足跡に深甚な敬意を表します。

ハンドボール競技は走る、跳び、投げるなど、身体の基本的な運動を同時に行なうオールラウンドな極めて親しみ易い競技であります。現代社会は、スポーツによる健全な身心の持ち主をますます喝望しておりますが、ハンドボール競技はこのために、まことに格恰なスポーツであると考えられ、今後の躍進が期待されるのであります。

日本ハンドボール協会におかれては、この30周年を契機にわが国におけるハンドボール競技の、この上の普及向上のため一層一致結束され、スポーツ界の期待にこたえることを切望してお祝いの言葉といたします。

ハンドボール第50号目次

昭和43年1・2月号

日本ハンドボール協会30周年を祝す　日本体育協会会長　石井光次郎…（1）
日本ハンドボール協会の進むべき道　荒川　清美…（3）
実業団球界の将来図………古賀和佐雄…（5）
現役学生諸君に望む…西　敏郎…（5）
高校ハンドボールの今日と明日………児玉　九十…（6）
当面する課題への対策………………（7）
日本ハンドボール界の足跡…………（14）
日本ハンドボール協会の歩んだ道…（18）
日本を訪れた外国チーム……………（30）
全国大会略史…………………………（34）
高体連・学連・実連の沿革と課題…（36）
日本ハンドボール協会創始期の想い出（第2回）……松本良三…（38）
30周年を迎えた協会に望む（7）………地方協会理事長特集（上）…（40）
ＩＨＦ・日本女子の参加を認める…（47）
第8回全日本実業団選手権組み合せ予想……（48）
第14回全日本選抜選手権大会………（49）
第7回世界男子7人制ハンドボール選手権大会に28ケ国申しこむ…（57）
ヨーロッパカップ幕開く……………（57）
球界パトロール………………………（58）
各地の記録……………………………（60）
機関誌に望む…………………………（62）
機関誌を考える………………………（62）
編集後記………………………………（62）

（表紙写真）

左上，女子世界選手権初参加の日本チーム，（昭和37年，ルーマニア）．

左下，第2回東西対抗，（昭和14年，東京）在日ドイツ人が参加している．＝越智氏提供

右上，東亜大会（昭和15年東京）日独対抗第1戦　日体対在日ドイツ人選抜軍

右下，日本世界選手権で初勝利（昭和39年．チェコ）対ノールウェー戦

日本ハンドボール協会
創立30年を迎う

昭和13年2月2日に日本ハンドボール協会（当時は日本送球協会）が設立されてから30年が過ぎた。

ハンドボールが日本に紹介されたのは、大正時代であるが、スポーツとして、競技として確立されたのは日本ハンドボール協会が誕生して以後である日本ハンドボール協会の歩んだこの30年はまさに苦難の道であった。

しかし、それを乗りこえ、踏みこえて、今日沖縄をふくむ全国47都道府県に支部を有し、学生連盟、高校体育連盟、実業団連盟の3組織を傘下におさめるまでに発展したのは、日本スポーツ界諸賢の厚い友情と、全国ハンドボール関係者のなみなみならぬ情熱とひたむきな努力にほかならない。

今、日本ハンドボール界は大きな希望に燃えている。一九七二年、ミュンヘンで開かれる第20回オリンピックでハンドボールが36年ぶりに行われるのである。

ハンドボール実施が決まっていた一九四〇年（昭15）のオリンピック東京大会が返上され、一九六四年（昭39）の東京大会ではいったん採用が伝えられながら、消滅の悲運に泣いた日本ハンドボール界であれば、ミュンヘンへの希望と期待が大きいことは他と比べものにならぬものがある。

過去30年、未熟なるが故に招いた混乱がなかったとはいえない。30年の伝統を築いたからには、一歩の後退があってもならないと思う。

前進、飛躍あるのみだ。関係者各位の自覚をあえて喚起するとともに、力強く躍進への第一歩を今、踏み出すことを誓いあおうではないか。



初代会長　平沼亮三（故人）



二代会長　永井松三（故人）



三代会長　式場隆三郎（故人）



四代会長　鈴木達夫

日本協会の進むべき道

日本協会理事長　荒川清美

　昭和十五年の東京オリンピック大会を契機として、日本ハンドボール協会が設立され、日本代表権が陸連より譲渡され、独立自尊の道を歩んでから、早三十周年を迎えたことは斯界の皆さんと共に慶賀いたすところであります。

　われわれ人間におきましても三十才と言えば円熟した境地に達する時機であり、一人前であることは自他共に許されることである。私はこの事実を回顧し、その事実の成果を賞揚することのできる時機を得ましたことは、真に意義深く、光栄であると共に、その責任たるや重大であることを痛感せざるを得ないのであります。

　かかる見地に立ち協会が将来進む道についての一端を許される範囲で述べることといたします。

　スポーツの持つ意義は今さら論ずるまでもなく多くの領域に亘り広いものである。社会的、教育的倫理的、精神的価値を一般的に理解することでなければならない。

　それは均整調和であり、肉体的心的および精神的発達に対する苦労であるわけである。これらを満足すべきものなるがために指導者も選手も常に努力を傾倒すべきものでなければならないことであろう。

　ために指導者層は常に勇気を持ち、誤まれる道を避け、正しい知識と体験の中で協調して前進すべきである。それがためには先づ土台の確立が何よりも先にしなければならないことである。

(1)　組織の確立

　広く人材をもとめ、長期総合計画がなされ、その施策が全国津々浦々に通じる組織を確立することである。それがために日本協会も各地方協会にあっても指導者層の養成が急務であろう。

　選手の養成があっても、指導者層の養成がなされないならば片手落ちであり、正常な発展が遂げられないのである。そこに立派な計画がなされても、その案が末端まで通じないならばその計画も水泡に帰することは論をまつまでもないことである。

　かかる組織のもとにはじめて長期総合計画が打ちたてられその施策を徹底的に完了することができる状態になるであろう。

(2)　普及と強化

　普及と強化も平行して推し進めるべきである。

　この両面を推進するためには、その能率を高める方法を構じなければならない。

　それには合理性を尊び合法的でなければならない。この合理性及合法的なものが慣習や既得権の主張の前に、おおいかぶされ、うすれてしまってはいけないことである。要するに教育活動を最大限に活用でき得る状態でなければならないことである。教育は論ずるまでもなく遺産を現在に受けつぎ、更に未来を開く役割をになっているものである、常に知的好奇心、創意工夫とを進歩の源泉として積極的な教育活動に努力を傾ける姿勢が両者を平行して発展させ、未来の社会へと展開させることになる。

(3)　財源の確保

　現在の財源は登録と公認業者の審査料だけがその基盤をなしている状態である。

　斯くの如き状態であっては如何なる計画であろうと、わくの中で、もがきつづけているのが精一杯で将来の夢などあろう筈がないのである。

　前述した如く根本的に改組をなし、長期総合計画のもとに総べてを系統的に組みかえなければならないのである。

　例えば行事等も系統的に統合整理し、価値ある施策のもとに選手権を行ない、その入場料の収益を見越し、協会団体で財源確保に積極的に努力する状態でなければならな。

　斯くの如く重点的施策を徹底的に施行することはひいては競技の強化にも普及にもその実を挙げ得ることであろう。

(4)　施設の達成

　各種目団体は、オリンピック、ユニバシアード大会を機にして各ホーム競技場が整備され統一された見解のもとに円滑に運営されているがハンドボールにおいては固定された競技場がとれないのが現

日本ハンドボール協会役員名簿

会長代行	保坂周助
副会長	馬場太郎
〃	小杉仁造
〃	西　敏郎
〃	児玉九十
〃	渡辺和美
理事長	荒川清美
常務理事	的場益雄
〃	若崎重富
〃	岡村昭二
〃	中沢重夫
〃	安藤純光
〃	徳永陸繁
〃	浜田猪三郎
〃	数原洋二
〃	藤本　強
〃	増田一郎
〃	入江暢一
〃	山田　計
〃	栗脇　嶷
理事	石切山稔治
〃	佐藤　敦
〃	天野耕兵衛
〃	森田正英
〃	藤田信義
〃	越智　武
〃	藤田八郎
〃	平仲孝栄
〃	古賀健一郎
〃	清水　正
〃	久保義雄
監事	山田　稔
〃	青木近衛
顧問	栗本義彦
〃	川崎秀二
〃	浅野均一
〃	米本卯吉
〃	河島武四郎
〃	塩沢　幹
参与	内藤誉三郎
〃	松本良三
〃	常松　喬
〃	岩野次郎
〃	森　松雄
〃	浜田義明
〃	池上金治
〃	外山准二
〃	阿部二郎
〃	植村　顧
評議員	50名（本誌4頁参照）

（本誌4頁参照）

（昭42. 2. 1 現在）

況である。それがために発展を阻害されていることも事実である。

特に都市において固定された施設がないことは総べての点で統一を欠く大きな原因となったことも理解できることである。長期計画のもとに是非ホーム競技場を持つべく努力いたしたいものである。

(5) 指導者の養成

スポーツとしての面だけでなく、ハンドボールの持つ特徴を生かし、即生活にも役立つスポーツとしてのハンドボールにしていきたい。

近代スポーツの活用は広く、その技術の進歩も目指ましいスピードで押し寄せている。

この機にあっての指導者はその前進する、方向づけをしていかなければならない。方向づけをなすには追いかけられる状態では方向づけはできないのである。

常に前後、左右から観察をし、前向きの姿勢で積極的に、研究に努力する姿勢を持つべきである。

年間機関を通じ定期的に指導者養成をなし、指導層と厚く広くなすべきである。

(6) 研究機関の設置

前述の如くハンドボールがスポーツとして生活の一要素になることを系統的に体系付け社会生活に欠くべからざるものであることを実証すべきである。

それがあっての底辺の拡充でありその上に高き山を築き上げることであろう。

又各大会の記録にしても保存するだけでなく、記録から、正しい評価をなし、体験と評価を基礎とした科学的なトレーニングの方向づけをするとか、トレーニングがそれだけでなく、生活や戦術に結びつけ効果的な身体活動ができる如く研究すべきことであろう。その研究資料が協会で整理され、一般の要望に広く活用されてこそ斯界の指導的責任を果すことができこの態度こそ協会の取るべきことであろう。

ぜひともミュンヘンオリンピックに

かかる草稿中、国際連盟並にソ連ハンドボール協会より朗報が入り本年（六八年度）ソ連における第四回女子世界選手権大会に日本の参加が認められた電報に接し一入感激と両連盟の努力に感謝いたしているところである。

又国際連盟の公報が入り、一九七〇年フランスにおける男子世界選手大会の参加申し込国数が判ったのである。参加申しこみ数二十八ケ国と発表、予選が六八年～六九年に実施される。

足もとに火とはこのことであろう例えば予選が六八年度中に実施されるとすれば是が非でも予選だけは通過しなければならないことである。若しこの予選に敗れたとするならば七〇年の世界選手権大会もおろか、七二年度のミュン・ヘンオリンピック大会をも絶望となる、わけである。

協会創立以来初のオリンピックの種目に決定され、斯界挙げての念願が一つにこの予選会にかかっているのである。

この機に臨み斯界一丸となり、多年の宿願に応えようではありませんか。いずれこの件につきまして詳細の報告をいたすことにします。

おわりに表題の日本協会の進むべき道について一端を述べたいのでありますが、前述の如く、日本のスポーツ界は、オリンピック、ユニバシァード大会を開催し幾多の教訓を持ち日進月歩、躍進に躍進を続けているのであります。

かかるスポーツ界を見る時、斯界の現況は一沫の淋しさを禁じ得ないのであります。

しかしだからと云って永年にわたって築き上げた歴史を一挙に造りかえるわけにはいかないことであります。

これら諸先輩各種団体とそれぞれの立場で情報を交換し、反省をくり返しながら、そして協力しながら競争して永遠の斯界の基礎を築くべく最大の努力を費す覚悟であります。

最後に年若き協会にあって幾多の諸先輩が今日まで守り続け発展に尽くされたことに満口の敬意と感謝をささげ各位の御健康と発展を祈りながら今後共、陰に陽に御支援御鞭韃の程を御願いいたしましておわりといたします。

評議員名簿

北海道	徳中康満
東北	
青森	鹿内一胤
秋田	武田兼治
岩手	菊地慶一郎
山形	市村利兵衛
宮城	松川金七
福島	三瓶勝治
関東	
茨城	染谷秋之助
栃木	長竹寅治
群馬	保坂梅雄
埼玉	藤間英一
東京	渡辺和美
神奈川	保坂周助
千葉	安田敬一
山梨	米山泉
北信越	
新潟	近藤禄郎
長野	鈴木俊
富山	高田義一
石川	油谷外郷
福井	伊藤仁和
東海	
静岡	斉藤敏之
愛知	小杉仁造
三重	田村正衛
岐阜	山内清次
近畿	
滋賀	白崎重幸
京都	木下弥三郎
大阪	野原博彦
和歌山	中村常夫
奈良	堀内俊夫
兵庫	郷田兼宏
中国	
岡山	村山寛
広島	川上正幸
山口	近間忠一
島根	青山善平
鳥取	安田光昭
四国	
香川	森住雄
高知	河淵正実
徳島	久木武夫
愛媛	松浦暲一
九州	
福岡	岡野正実
長崎	桑原信一
佐賀	渡辺保
大分	中尾節次
宮崎	野瀬良胤
熊本	佐々木克己
鹿児島	増田静
沖縄	仲田豊順
全日本実業団体連盟	古賀和佐雄
全日本学生連盟	西敏郎
全国高体連ハンドボール部	児玉九十（部長）

実業団球界の将来図

全日本実業団連盟会長　古　賀　和　佐　雄

ここ数年の日本ハンドボール界の発展ぶりは、めざましいものがあり、実業団球界においてもシーズン毎に加盟チームが増え、前途に多大な希望を寄せることが出来るのは誠に慶ばしいかぎりである。

発展、拡充にともなって、実業団の今後には克服すべき問題が待ちうけていようが、いかなる時点においても、『よき選手はよき社員であれ』という主義を忘れないで欲しい。

いかにその技術が秀れた選手であっても〃社員〃としての本分は守らなければいけない。社員として優秀でなければ、実業団の選手としては優秀といえないのである。

そうしたことがおろそかにされれば実業団チームがプロ化するという、間違った方向に進むことになり、仕事もしないで、練習や試合ばかりしていることになる。

「ハンドボールの力が落ちたから退社します」などという考えかたはつつしまねばいけない。

実業団スポーツは一歩道を違えれば、アマチュアの本分から逸脱してしまう危険にさらされている。選手をはじめ実業団チームのあらゆる関係者の良識ある行動をこの機に切望しておきたい。

ところで、全日本実業団連盟は、高体連、学連のように、まず下部が固められ、順々に上部の組織が出来あがったのと異り、まず頂上が出来、それから地域連盟、県単位の実業団連盟が全国に設けられつつあるといった特異な過程を踏んでいる。

つまり下部の意向をまとめて実業団球界を運行するというのではなく、まず全日本実業団連盟が一つの構想をたて、下の組織を育成指導していかなければならないのである。幸に各地に実業団による組織が生まれ、活溌な動きを示しはじめているので、本部としても課題の一つ一つを柔軟性のある態度で解決し名実ともに備った実業団球界の確立に進んでいきたい。

日本ハンドボール界全般の発展のために、学連会長、高体連会長とともに私はこれからも力をつくす所存だが、これら三者の代表による「協議会」あるいは「こん談会」式の機関があってもよいと私個人は考えている。30周年を迎え、前途洋々たる日本ハンドボール界のいっそうの伸展を信じて待つものである。

現役選手君望む

全日本学生連盟会長　西　敏　郎

本年二月で日本ハンドボール協会創立三十周年を迎えると云う。つくづく年の経つのは早いものだと思う。其れは即ち私がハンドボールを始めてから三十年経った事になるからだ。新しいスポーツとして我が国に芽生えて三十年其の普及、発展は途中戦争と云う大きな障害があったにも不拘見方に依れば極めて順調だったと云えるかも知れない。然し一方考え方に依れば選手層の増加と云う事以外戦前の域を余り脱して居ない様な気がしてならない。否寧ろ或る面に於ては足踏みして居る様な気がするのは私だけだろうか、其れには色々なファクターがあると思うが矢張り協会首脳部の責任に帰する所が一番大きいと思う。然し今更三十周年の御祝の誌上で其の責任の所在を云々する意図は無く四年後のミュンヘンオリンピックに初参加する事を当面の最大の目標として今後の発展の為に私の感ずる所を述べ又現役選手諸君も心に銘じて大いに頑張って貰い度いと思うのである。現在全日本学連の会長と云う立場にある私の発言としては聊か不穏当と思われるかも知れないが私はスポーツはやる以上勝ちに徹せよと云い度い。審判と云う絶対者の下で行われる試合は勝った者が勝者なのである。今更云う迄もなく勝つ事は大変な事なのである。勝つ為の努力は凡そ無限に要求されよう。そして其の無限の努力に依ってのみ強健な体力、不屈の精神力、果断な判断力、旺盛な責任感等とを体得し必勝の信念が生じ勝利の栄光に輝く事が出来るのである。学生が其の本分である学問を極むべき時間をスポーツに割く以上スポーツを通じて将来の人生にプラスになるべき何かを体得すべきである。其の為にこそ徹底的に勝ちに徹すべきなのだ。クーベルタンの「参加する事に意義がある」との名言も勝利者の努力の前には及ばない事を知るべきである。

私は昨年会長を引受けて一年間相当数の試合を観戦したが其の大半は唯ハンドボール部員としてスケジュールに合わせて試合をしてると云った内容のものであった。

大変失礼だが其処には勝とうと云う意欲すら感ぜられないものもあった。余りの極言と思う人も居るかも知れない。然し夫々の大会或は学連のリーグで優勝して居る選手諸君なら私の言う事は判ると思う。戦後精神力云々はスポーツ界に於ても軽ぜられスパルタ教育は御法度となりスポーツは楽しむもの、好きな時好きなだけやれば良いと云う様な考が主流をなし、先輩連も後輩に遠慮し甘かす結果になって済った。戦後のオリンピックに参加した日本選手の大半が自己の国内記録をも出せず破れ去って居る事実は如何に精神的に弱いかをはっきり証明して居ると思う。其等の選手には天分はあるが勝ちに徹した努力に依る必勝の信念はないのである。学連の現役選手諸君よ戦う以上勝とうと思うのは皆同じである。今年こそは、今大会こそは優勝をと願う心は皆同じである。然し夫々の優勝チームの一人一人を、そしてチームの試合運びを良く観察し給え、其処には永い苦しい平素の練習の総力を結集して各人が責任を以って一球一球を慎重に投げ、そして走り「必ず勝つぞ」との気力に溢れ、然も時間の経過を常に頭に入れて本当に息づまる戦を演じて居る筈である。それでも必ず敗者はあるのだ。勝つ事の難しさ、敗れる事の空しさ、然し其の空しさを知って心に泣ける者こそ次の勝者の資格があるのだ。

戦前は良く試合に勝てば泣き敗けては泣いたものだ、最近はそんな風景には女子チームでも滅多に御目に掛らない。戦後スポーツを本当にやった事もない報道関係者が「日本選手は敗けると泣く、スポーツはそんな悲愴なものではない」とか何とか書き

立てたので泣く者も居なくなったのだろう。結構な事である。然し私達本当にスポーツに打込んだ者の涙は敗けたから口惜しいので泣くのとは違うのだ。「噫噫もう少し合宿中練習して置けば良かった。もっとこうすれば良かった」と云う自分自身の努力の及ばなかった事が口惜しくて涙が出るのだ。本当に勝とうと努力して居ない者には唯女々しい敗者の涙と思われるのだろうが、又私は試合が終って敗けたチームが体操をしたり、コートを一周したりするのを良く見るが人に依っては悪びれず好感を以って見るのだろうが敗者の恥を知れと云い度い。何故体操したりコートを一周したり出来る余裕を残して敗けたのかと、真に最後迄勝たんとして敢闘した者にそんな余裕は無い筈である。

最後に日本ハンドボール界待望のオリンピック初参加も四年後に迫り然も二年後の参加資格決定の大会になるとも聞く。其の選手団の中心となるのは現在の学連の選手諸君だと思う。極言すれば、オリンピック参加迄に二ケ年しかないのだ。戦いには勝者と敗者しかないのだ。如何なる努力をしても試合終了時に敗けて居る者は敗者なのだ。此の冷厳なる事実を胆に銘じ今日今からでも勝つ為の努力をしようではないか。そして学生らしく意地と誇りを持ったスポーツマンとして日本ハンドボール界に君臨して貰い度いと思うのである。

高校ハンドボルの今日と明日

全国高体連ハンドボール部長　児玉九十

表記の如き題で執筆いたす様にとのことですが、昭和四十二年三月号の『ハンドボール』四十一号の巻頭に「私のことば」として記しました如く、昭和三十九年六月高体連ハンドボール部長に就任する様に交渉を受けたのでありますが、私の学校で昭和二十三年、新制高校の発足の時、体育の先生で原田というハンドボールの熱心家が居り、ハンドボール部を置きたいと熱望しますので、希望を容れて奨励はいたしておりましたものの、私自身はハンドボールに対し、何の知識もないし、生従の練習を見学する時間もない様な事情にあり、昭和三十九年四月に、明星大学は発足したばかりで、極めて多忙で、色々の校外の役員等は次々と辞任させていただいている際中でありましたから、強くお断りをしましたが、校内の体育主任は明星ハンドボール部の奨励にもなるし日本ハンドボール界の為にもなるから、名をつらねてもらうだけでいいからとのおすすめに、断り切れずに、一切の実務は徳永陸繁先生が引き受けて下さるというお約束で部長をお引き受けした様な次第ですから、高校ハンドボールの今日及び明日という様な大問題で筆を執る資格は、全くないのであります。

「ハンドボール」誌四十二号の「球界パトロール」欄をみると八十一パーセントが高校生となって居りますから高校のハンドボール人口の現在数は二万八千五百人、即ち三万弱と見てよいのではないでしょうか。そこに出ている高校バレーボール人口五十七万に比較する十九分の一ですから、残念ながらハンドボールが非常に低位にある事は数字の示す通りであります。

日本ハンドボール協会普及部の報告によると、四十一年度全国中学校で五十四枚のチームが出来たという事でありますから高校に於ても年々五十校位は増加していると見てもよかろうかと思います。果して然りとすれば一チーム二十人位と見て、高校に於ては人数として千人位（高校ハンドボール人口の三パーセント）増加していると見て、過当推定ではないでありましょう。校数にして全高校の三分の一、千校ないし千二・三百校ではないかと思います。

高校でハンドボールが盛んになったのは終戦後と思われます。二十年間で千校、三万人という数は非常にいい伸び率とはいえないでしょうが、指導者も多くない時代ですし、ハンドボールとか送球といってもその名称すら知らない人が多い時代でありましたから、普及率の低いのは当然だったと言ってよろしいと思います。寧ろ、その様な環境下にあって、これだけに育て上げた先輩諸氏の苦心は並大抵のものではなかったであろうと心から感謝致す次第であります。

高体連大会には年々参加校も増加し、盛になりつつあります。此の辺で、高体連ハンドボール部だけの単独大会でも開いて結束を固くし、県内、隣組組織でもつくって試合回数をふやして行けばこれが刺激となって、どこの学校でもチーム組織の機運が高まって来ると思われます。殊に中学校での正課体育となる事も間近かとなって来ている此のチャンスはのがしてはならない事に信じます。

普及と急増のためにはマスコミを利用することの必要のあることはいう迄もない事であります。これは今迄も大いに努力されている事とは思いますが、私の四年間の寡聞のためか、少しく乏しい様に感じております。中央紙も開催地の地方紙も他の競技に比し、書き方が小さいし、明瞭でもない場合が多い様です。ラジオ、テレビも同様です。恐らく、マスコミが乗って来ないのかも知れませんが、此の方面に働いているハンドボール関係者もある事でありましょうから、協会を始めとして関係各位の御一考を煩わしたいと存じます。

要は校長や全職員が理解し、積極的に応援し、父兄に迄及んでくれば高校のハンドボール人口は必ず急増するものと信じます。それにはそれだけの努力を払う必要があると思いますから、皆様の御協力を切望する次第であります。

1月28日に記念行事

協会は創立30周年を記念し1月28日0時30分から東京体育館で記念行事を行う。

記念行事は3部に分かれ第1部は0時30分から協会創立以後の功労者に対する表彰状、感謝状の授与式など、第2部は1時30分から記念試合として『全日本社会人・学生選抜対抗戦』（男女）が行れる。第3部は会場を東京・赤坂プリンスホルに移し、来賓を主にした祝賀会が開かテぐる。

当面する課題への対策

30年という年月は決して長いものではない。それだけに日本ハンドボール界の急速な発展は大いに自負してよいものがあろう。しかし、当面する課題の多いことも事実である。

その一つ、一つをいかにして解決し、克服していくかこそ、日本ハンドボール界の真価を問うことになるであろう。

世界への飛躍のために国際問題と国内問題にわけ、いくつくかのテーマを、各担当役員にそのビジョンとともに論じてもらった。

1. 世界への飛躍のために

当面する課題の中で、大きなものの一つに、世界へ飛躍することがある。トップレベルを強化し、世界に通用するものにすることは、競技の普及・発展をも意味する。しかし現実の〝世界の壁〟は厚い。それをいかにして突破するか。

技術指導のリーダー三氏に、その眼で見、肌で感じた体験を通して〝世界〟への対策を論じてもらった。

総評　中沢重夫

最初の世界選手権参加の時の印象は始めて国際舞台をふんだという条件を割引きしても、選手層の厚さ、強化指導体制、ハンドボール界の協力姿勢、ハンドボール競技の認識、選手の体格差などあらゆる面でとても勝つことは覚つかないというのが正直なところであった。これには、日本が7人制のハンドボールの認識において、大いに欠けるところがあり、ヨーロッパ諸国の情勢を知らなかったところに大きな原因があった。

この第一回遠征、つづいて行なわれた数度の遠征を通じて、国内に紹介された技術、戦術もようやく、消化され、技術・戦術もヨーロッパ諸国のレベルに近づき、諸国の技術・戦術に対する対策もとれるようになり、ようやく最近になり上位進出可能のメドがついたというのが、現在の日本ハンドボール界の現状であろう。

しかしながら、〝世界の壁〟は厚い。そのためには、どのような対策が必要であろうか。

最初の世界選手権での印象では勝敗は体力でつくという感じを受けたが、現在ではやはりテクニックが大きくものをいうと考えている。しかし身長のない選手は国際競技には適しない。

男子は得点はとれるようになった。この点は大きな進歩といえるが、防御面の強化が一番の問題であろう。まず身長の高いこと、フットワークの速いこと、ヨーロッパ諸国と日本がもっとも違っている点である出足、試合時間フルに走り廻れる体力が必要となってくる。現在の日本チームは攻めの足はきわめて早いが、守りの面ではヨーロッパ諸国に比べると格段の差がある。またチーム全員の防禦範囲を拡げることも重要なことである。

攻撃面では、男女とも日本の特徴となっている早い攻撃、これをより伸ばし、ブロックプレーを織りまぜることによって、ムダのない攻撃をする必要がある。これは特に女子について云える。身長の高い相手の一線防禦に対する道はブロックプレーである。

また国際試合の不足による経験の足りなさ、これも克服しなければならない問題である。

ハンドボール界に望むことは、まず外国コーチを招き、その細かい技術を完全に消化すること、国際試合の不足を補うため、選手・役員を早急に固定し、一たん決ったならば全員一致協力すること、国際試合を多くすることがあげられよう。選手については、基本技をおそかにしないこと、（ルーマニア・ナショナルチームの合宿を見たときに彼等はコーチの命ずる基本技を、自らかってで、黙々とやっていた。学びたい点である。）スポーツの厳しさをわきまえること、たんに選手としてでなく人間としても豊かで立派であること、苦難に打ちかち、強気の選手になることなどがあげられよう。

オリンピックでも、世界選手権でも臆することなく、力いっぱいのプレーをすれば、上位進出することは疑いない（筆者は日本協会技術部長）。

世界選手権における日本の成績

～男　子～

▼第4回7人制（昭36.3西ドイツ）
- ●10—38　チェコ（準決勝リーグ）
- ●11—29　ルーマニア（準決勝リーグ）

▼第1回世界学生（昭38,1スウェーデン）
- ●15—26　スウェーデン
- ●11—34　デンマーク
- ●9—31　スペイン

▼第5回7人制（昭39.3チェコ）
- ○18—14　ノルウェー（準決勝リーグ）
- ●10—40　ソビエト（準決勝リーグ）
- ●12—36　ルーマニア（準決勝リーグ）

▼第6回7人制（昭42,1 スウェーデン）
- ●25—30　ハンガリー（準決勝リーグ）
- ●27—38　西ドイツ（準決勝リーグ）
- ○21—16　ノルウェー（準決勝リーグ）

～女　子～

▼第2回7人制（昭37,7 ルーマニア）
- ●8—17　ハンガリー
- ●7—12　デンマーク
- ●10—16　ポーランド
- ●6—15　西ドイツ

▼第3回7人制（昭40.10 チェコ及西ドイツ）
- ●9—17　チェコ（予選）
- ●5—17　チェエ（予選）
- ●7—15　西ドイツ（本大会）
- ●9—10　デンマーク（本大会）
- ●5—9　ユーゴ（本大会）
- ○6—5　ポーランド（本大会）

男子　　村田弘

日本のハンドボールも30才を迎えた。男子でいえば一番油ののりきった働き盛りである。その意味からも、ハンドボール界はいつまでも井の中の蛙であってはいけない。

大いに世界に飛躍しなければならない。

先づ協会は底辺の拡大を心がけそして中学からの一貫した指導体勢を整えること。現在コーチの人材が少ない。コーチに目を光らせること、又コーチが集ってすべてのもっているものを論じ合う必要がある。現在対話の場が全然ない。

又計画中と聞くが外国コーチを招へいして大いに学ぶべきものを学びたい。日木協会、地方協会、実業団、大学、高校とお互の立場を理解しあい、わだかまりをなくすること、そして一丸となって強力体勢をひき30年を一つの基盤として過去のマンネリ化から脱皮しフレッシュな協会へと躍り出なければならない。

世界への飛躍のための一番大きい問題は各国のナショナルチームに勝つことが先決問題だ。世界に追いつき追い越す力をそなえること、それには組織と方法を造らねばならない。

国際試合はいろいろの条件が悪く回数が少ないが各国のナショナルチームに勝ったのは世界選手権で2回（ノールウェーだけ）と実に淋しい限りである。その敗因を追究すると選手強化に大きな問題が残る。ドロナワ式は何もつかめない。無計画は選手達を中途半端な立場におき、実力を発揮することができない。

その点協会内部にも選手強化のてぬるさが感じられる。いち早く実行に移さねばならない問題がそのままにされている。

日本の男子も先進国のように選手層を厚くしハンドボールに徹した精神力を強め、選手個人の卓越した技術と、老練とスケールの大きさ、強靱な体力を基礎とした爆発的な底力〝スピードと体力〟を身につけなければならない。体力的に優位に立つよう、即ち一時間フルに走りまくれるスタミナの養成だ。そして最後は個人のレベルアップということになる。現在日本の男子はというと残念ながら国際的にまだまだ劣る。どの点についても一朝一夕に改善することはむずかしいが除々に進歩し近づきつつあることは事実である。今後も国際試合にのぞむには苦しさを覚悟しなければならない。

すでにヨーロッパでは第6回世界選手権が終った直後ミュンヘンにそなえて第1回世界ジュニアー選手権を開き次代を背負うジュニアーの強化に乗りだし各国とも競い合っている。

日本もあんかんとしておれない出来るだけ国際交流を多くし強豪と対戦していろいろの経験をつみ、その中で日本独自のものをつくらねばならない。すでに第7回世界選手権ミュンヘンオリンピックと的がはっきりしているのだから強化方針は立てやすい筈だ。

ナショナルチームの重点方策を打ちだす時機がやってきている。そして立ち遅れないようにしたい。そして選手強化には金と時間のかかることを覚悟しなければならない。

最後にハンドボールマンは自覚を持って猛練習に励まれることを切望して止まない。（筆者は日本協会技術委員、第6回世界男子選手権日本選手団監督）

女子　　北川浩

日本ハンドボール界は、無いものだらけの創始期、より今日まで三十年多くの人々のハンドボール愛好心に支えられ、日夜の努力によって今日の発展を遂げて来た。その努力の一つは、「世界の壁」にとりついている。この固く厚い壁の一端でもこわすことが出来たら、ハンドボールは脚光を浴びて、サッカーの様に、バレーに見る様な大きなブームを呼び起し普及にも、行きづまった面の打解にも大きなプラスを得るものと思う。勝利の栄光もさることながら、その反響よりひろがる底辺拡充の偉大な収穫も見逃すことはできるだろう。その好機は五年後のミュンヘン五輪に来る。

東京オリンピックで他競技に一歩遅れをとったが、今度こそハンドボールの興隆をかけて、ミュンヘンへの努力を惜しんではならない。

IHFの首脳は男・女各16ヵ国出場を西ドイツと交渉中らしく、数は減っても男女開催を理想としている。この情報でヨーロッパ各国はオリンピックに向ってハードトレーニングに入ったものと思われる。

多くの国際試合も行なわれ、なじみのチームの活躍の記事を見るたびに早くしなければおくれてしまう不安がつのってくる、

我々は早く国際的な目をもっと開かなければならない。そのためには多くの外国チームを肌で感じ、文献を消化し、日本と外国ハンドボールの違いを発見し、ここに勝利へつながる利点を探り出し、一致した強化方針を確立し、外人に強いタイプの選手からなるナショナルチームの編成を急がねばならない。

日本女子チームはヨーロッパに二回遠征し、昨年は西ドイツチームが初の日本来征チームとして各地を転戦した。これによって外国女子チームの空気がわかったと思う。

外国チームに対して月本国内の試合成績とちがった強さを発揮したチームや、選手がいたし、その反対のことも発見できたことも今後の参考になることである。

二度のヨーロッパ遠征から私は日本ナショナルチームの力を次の様に判断している。ヨーロッパの一流クラブチームには苦戦しても勝てるが、ナショナルチームには五点位の差をつけられて負、共産圏にはかなりの開きがある。速攻だけに頼る日本の攻撃を外人記者はこう書いている「勇ましい日本チームは敏速で虚をつくといった一種の気まぐれな競技態度で対抗した。日本の威力のあるシュートは非常に注目された」。日本コーチングスタッフはこの日本評を充分に研究し、今まで苦労して集めたデーターによって外国戦の構想を練らねばならない。

最後になったが日本女子選手諸嬢に一言したい。世界女王の座に一歩でも進み給え、栄光の座についたルーマニヤもかっては最下位であったし、体格も日本人と変りない東欧人である。（筆者は日本協会技術委員、第2回世界女子7人制選手権日本選手団コーチ）

2. 国際問題

世界に遅れるな ヨーロッパに目を向けよ

渡辺和美

編集子から「国際情勢」について、なにか書いてほしいという注文である。私は昨年十月に社用でスイスに出張し、余暇を利用してバーゼルにあるIHF（国際ハンドボール連盟）を訪問、バウマン会長と会って世界ハンドボールの趨勢について語り合いました。IHFを直接訪れたのは、私にとって二度目であり、それだけに意義深いものがありました。それで私は、なにかの機会に本誌を通じて全国のハンドボール愛好者に世界の動き、私の抱負などを発表してみたいと思っていた矢先に編集子からの注文があったわけです。

私は別にむずかしいことを言おうとは思っていません。日本協会が新しいスタッフでスタートしてちょうど一年になるので、この時機をとらえて日本協会が自らの姿勢を正し、そして前向きの姿勢で国際情勢と取り組んで行きたいそれが、すなわち1972年のミュンヘン・オリンピックへの道に通じるものと思っています。

自分の力で消化を

アジアのハンドボール。それは日本、韓国のほかに非加盟の中国の計三カ国があります。大陸続きの欧州に比べて立地条件が悪く、すべての面でマイナスといっていいでしょう。欧州のチームは①自動車、汽車で外国遠征が出来る②したがって国際試合が多い③レベルアップになる④費用が少なく、気軽に参加できる⑤国際感覚が鋭い⑥各国の実力検討が出来る—など、日本では想像も出来ない好材料がそろっています。これだけのハンディキャップを背負った日本が、欧州の強豪に対して肩を並べていこうというのですから、私たち日本協会の役職にあるものはそれ相当の覚悟が必要なのです。一人一人が責任をもって事に対処していかないと遅れをとります。ですから、その一人一人が欧州各国の動きを注視し、その一つ一つを自分の力で完全に消化して行く気概があってほしい。IHF広報、西ドイツ、ルーマニアその他のハンドボールマガジンに目を通し、全員がこれを分析することをぜひ実行してもらいたい。そしてこれを一日も早く全国の愛好者に知らせ、がっちりスクラムを組んで行きたい。日本国内の大会さえ大過なく運営していけばよいとか、自分の所属しているチームが強くなって全日本のタイトルをとればいいとか、そんな狭い考えでは日本は取り残されてしまいます。

規則改正は早く

たとえば、昨年十月に西ドイツチームが来日し、一般女子の試合時間が25分ハーフとなっていることを知りました。十月に私がIHFを訪問したときにも、欧州ではすでに25分ハーフで試合をやっていることを確認しました。それなのに日本は、四十一年度の競技規則をそのまま四十二年度に準用して20分ハーフで運営しているのです。これは考えものです。西ドイツの関係者から「25分ハーフ」と聞いた直後に、IHFの広報を調べて、もしそれが事実なら十月の国体、あるいは十二月の全日本選抜選手権からでも実行するような頭の切り替え、つまり〝英断〟が必要なのです。東京都協会はいち早く十一月の東京都選手権から、一般女子準決勝から25分ハーフを採用し好評を博しました。日本協会は二月の全日本実業団選手権から25分ハーフ採用を決めましたが、欧州各国に遅れをとらないためには、もっと早くこの制度を採用すべきだったと思います。

禍を福に転じよ

ことし十一月にソ連国内で女子世界選手権大会が開かれますが、どういう手違いか日本はエントリーしていませんでした。私はバーゼルでバウマンIHF会長に会って、日本の組み合わせを問い合わせたときに始めてわかったことです。バウマン会長は多くの書類を調べてくれましたが、残念なことに日本のエントリーはなかったのです。私はハンドボール界に首を突っ込んでいらい、こんな悲しい思いをしたことはありませんでした。プレーヤーが世界選手権を、そしてミュンヘン・オリンピックを目ざしている重要なときに、このようなミスを侵したことは断じて許せません。人間にはミスがあるものですが、これは未然に防げたはずです。この事実が欧州各国にわかったら、それこそ日本の恥です。この禍（わざわい）を福に転じてほしい。私はIHFに対し「なんとか日本が参助出来るよう」手紙を出して再考を促し、もし望みがあれば、私はさっそくバーゼルへ飛んで行きたいとも伝えました。

この結果が、去る1月16日付のIHFからの電報となって表れたのです。

電報だけですので、詳細は判りませんが、IHFが日本の申し出を好意的に扱って、ソ連協会と交渉してくれたのが、このような朗報となって現れたのです。

このことからも、連絡を密にして、機会あるごとにIHFの関係者と会合をもち、文通していくことが必要と考えます。

欧州を追い越せ

欧州各国のチームは来日を熱望し、日本チームとの交流を望んでいます。私は国際交流はどんどんやるべきであると思います。

これに要する費用は日本協会があらゆる手段を講じて用意し、チームへの負担を軽減させる方向付けをすることが日本のレベルアップにつながると思います。欧州各国を追い抜き、追い越すことが大目標です。女子世界選手権大会への参加は大きな朗報であり、これに対処すべき方途を考えなければなりません。オリンピックに間に合うように、四十三年度は全員が気を引き締めて……。

編集子の注文である「国際情勢について」という題から少し脱線しましたが、私が言いたいことは「世界に遅れをとるな」「国際感覚を身につけよ」「世界の動きを全国の愛好者に伝えよ」—ということです。

（筆者は日本協会副会長、東京協会会長、全日本実業団連盟理事長）

3. 国内問題

日体協との関係

保坂周助

体協は加盟三五競技団体と府県体協で組織されているが我がハンドボール協会も加盟競技団体の主要な一つであることはいうまでもない。体協の議決機関である評議員会には本協会からも評議員を派遣して重要事項の審議に参画している。それに古くからある日本オリンピック委員会と国民体育委員会へ、又最近出来た競技力向上委員会へも夫々有能な委員を送っている。これ等の委員会に於ける委員の発言は委員個人の力もさることながら、委員が所属する協会自体の実力の強弱が大きくものを云うことは自明の理である。歴史が古く世帯が大きい、国の内外によく普及している、すぐれた先輩が多く協会がよくまとまっている、国際試合でよく活躍する競技力を持っている、等々が体協内で重きをなす原因である。我が協会も長期に亘る関係者の御骨折りで相当の力を持っている団体ではあるが、四十一年暮れに起きた協会内部の一事件が大きく信用をおとした感がある。この際は役員特に執行部が一致協力して我が協会の実力の向上をはかり信用の回復に努めなければならないと思う。

ハンドボールは最も普及奨励すべきすぐれた球技であり、その前途は洋々たるものがあるスポーツと思う。協会発足三十年を迎え国内に於ける普及強化に、又国際舞台への進出に一層の努力を傾けることが肝要と思う。ミュンヘンのオリンピックへは是非共参加させたいものである。その計画も立て実行に移す時期は寧ろおそきに失する感がないでもない。

日体協では現在国内関係、国際関係、共に大事な問題を沢山かかえている。国内問題では、①学校体育の授業時数増加の運動、②国体を国民のスポーツの祭典に一層ふさわしいものに改善する仕事、③青少年スポーツマンを受入れ指導していく社会体育団体の組織作りの問題、④体育指導者の養成、⑤体育研究所の設置促進の仕事、スポーツ施設用具の増設増加の問題等々である。これはとりもなおさず我が協会の問題でもある。国際関係も①アジア、スポーツ振興対策、②ソ連や中国への対策、ＩＯＣ対策、④国際スポーツ行事の進め方、⑤メキシコオリンピックへの選手強化等の問題をかかえ、国内スポーツの振興同様、国際関係の改善に研究努力を続けている。日体協の努力もさることながら、最も肝要なのは日体協を造っている各協会の強化充実である。加盟団体の活躍があってこそ日本のスポーツ振興の実が上るというものである。若い人々のハンドボールへの情熱、愛情に大いに期待している。又年輩者の貴重な体験の活用にも期待をよせて筆をおく。(筆者は日本協会副会長、神奈川協会長)

審判上の諸問題

安藤純光

日本ハンドボール協会は、記念すべき三十周年を迎え、さらに大きく前進すべくスタートをする機会を迎えた。この間、とくに戦後における日本ハンドボール界の発展は、めざましいものがある。外国チームを招いての国際試合、世界選手権大会参加その他の海外遠征によって、日本のハンドボール技術もいちぢるしい発達をとげてきた。一九七二年のミュンヘンオリンピックではハンドボールも競技種目として登場することに決定している今日、日本ハンドボールは、さらに世界に向って一大飛躍をとげなければならないときにある。

この技術の発達に影響を与えるものには、いろいろな要因があるであろう。たとえばプレイヤーが充分に思う存分に活動できるような環境が必要であろう。とりわけプレイヤーの技術に大きな影響を与えるものはレフェリーの審判技術であろう。このことは、本誌にもまた機会あるごとに私のみならず多くの人によって説かれているところであるにもかかわらずレフェリーに対する要求はまだ非常に多く聞かされるのが現状である。おそらくこれらの要求は皆無になることはないかもしれない。しかしレフェリーはできるだけ完全なものを目指して努力すべきであろう。プレイヤーは常に高度な技術を求めて絶えずはげしいトレイニングを続けている。そして、その技術を発揮する場は試合である。もしレフェリーの技術が未熟であれば、築きあげられた技術が阻止されることも起り得ることになる。技術の発揮にもっとも強い影響を与えるレフェリーも、このプレイヤーの技術にともなった審判が可能なように絶えず研究してゆかなければならないであろう。もしプレイヤーだけが技術の追求を行なっても、レフェリーが旧態依然の審判技術でレフェリーをしたら技術の進歩を阻止することになる。この意味から技術は、レフェリーとプレイヤーの協力によって築きあげられるものであるということができる。

これ以前にレフェリーとしての基礎的に必要な要件について、二・三考えてみると、

――自信をもち信頼感を得ること

この自信はもちろんレフェリー自身の独善的な過信であってはならないであろう。その判定が競技規則にしたがったものであることは当然のことである。レフェリーが笛を大きく(笛の音が小さくてはいけない)吹き確信に満ちた動作をすることによって、プレイヤーや観衆の信頼を得ることになる。このためには、そのプレイが行なわれた瞬間に判断をして判定すべきである。その時期を失したり、ずれたりすることがあったりすると、その判定が誤りでなくても、プレイヤーや観衆から不信の念をもたれることになり、これがかさなるとその回復がむずかしくなる。この自信(確信)をあらわすものは、笛であり態度である。

――確固たる判定基準をもつこと(一貫性をもつこと)

Ａレフェリーも、Ｂレフェリーも全く同じ笛を吹くこと(判定の統一)が理想である。レフェリーはこれを目標に研究、努力をつづけなければならないのであるが、所詮レフェリーが人間であれば機械のようにはいかないであろう。そこでこれと同様に大切なこと

は、確固たる判定の基準をもつことであろう。試合において同じ場面または同じような場面に対して同じ判定がなされなければならないであろう。この判定が、そのときどきによって、まちまちであってはプレイヤーを混乱させることになり、競技は支離滅裂となり収拾のつかないものになってしまうであろう。

――レフェリーはプレイヤーを罰するためにいるのではない

レフェリーは、競技を円滑に運行するための進行係であり、演出者である。競技はプレイヤーとレフェリーの協力によってつくりあげられるものである。競技規則が守られプレイそのものが渋滞なく展開されるようにプレイを観察し、判定するのがレフェリーであろう。プレイヤーと、レフェリーが相反発するような雰囲気につつまれてしまっては殺伐たる競技となり、よい競技が展開されることは期待できない。レフェリーは、ある意味では孤独であるが、プレイヤーとかけはなれたところにいてはいけない。

――常に冷静に厳正公平な態度でなければならない

競技がエキサイトし、プレイヤーや観衆が興奮状態にあっても、レフェリーは決してその雰囲気にのまれてしまってはならない。正確な正しい判定をするためには、どんな事態に遭遇しても決して冷静さを失なってはならないのである。

などまだまだレフェリーとしての必要な基礎的な要件はあるであろうが、私は、これらを獲得する方法として、経験を重ねること以外にないと考える。よくレフェリーとしての適性はという質問を受ける。適性もあるであろうが、これにも増して必要なことは経験をつむことであると考える。協会発足三十年の記念すべきこのときに三十年の基礎を土台に、技術の進歩とこれを助成する審判技術の向上と統一をはかりたいものである。(筆者は日本協会常務理事)

財務の現状

浜田猪三郎

私が初めて全日本学連選出理事として昭和三十八年四月に協会執行部の一員になった時、年度決算が赤字額一五〇万円であった事は忘れ得ない想い出の一つです。

当時協会に対して何か金銭的に不明朗なムードがあり地方の先輩理事もその点を批判して居り、アマチュアスポーツ団体だからと云ってこれで良いのかと当時の担当理事とは意見の対立も致しました。協会の決算が赤字であるならば当然加盟金及び登録金は値上げをし健全なる運営を行なわなければなりません。従って理事会及び評議員会で現行の収入予算が決定致しました。その後加藤氏が財務担当になり氏の誠実な考え方と努力に依って協会も黒字決算になり昭和四十一年度決算に於いては六五一万円余の繰越金を計上するという全く三年前の赤字決算から考えれば驚く様な喜ばしい転換を致しました。又協会は複式簿記で伝票制にし誰が財務担当者になっても、その儘引継ぎの出来る様になりました。又私は部生活を関西と関東両学連で経験したので東西を問わず選手の遠征費等は自費で賄なう事を知りました。故に選手の身になって協会運営に当たらなければならないと思って居ります。従って協会経費も出来るだけ節約しなければなりません。

現在協会の運営は加盟金と登録金及び公認料で、普及、強化、講習会等は体協の補助金（八〇％）で賄われて居ります。これ以外の収入の道を協会として考えなくてはなりません。従ってサッカー協会の様に入場料収入をあげる必要があります。

普及度に関する事ですがそのためには日本リーグに匹敵する様な試合を日本各地で行なう企画と世界選手権を日本に於いて開催する努力をせねばなりません。世界選手権を開催する事に依って人々にハンドボールを認識させれば普及に大いに役立つ事は自明の理であります。

それ迄の間、地方協会の皆様には非常に負担と思われます現行の加盟金及び登録金制度を据置いて下さる様にお願いする次第です。

資金を蓄積し世界選手権開催に努力しサッカーに追いつこうではありませんか。

ハンドボール関係者が一致協力してハンドボールの為に努力すれば可能な事だと信じて居ります。

(筆者は日本協会常務理事)

中学校指導要領改訂に期待する

的場益雄

サッカーの人気は大変なものだ。なぜサッカーが最近プロ野球並みに人気をえるに至ったのか不思議である。それにはいろいろ理由があろう。その大きな理由の一つは、小・中学校体育指導要領にサッカーが主要種目として認められていたということを見逃してはならない。すなわち学校体育の中にサッカーは小学校で種が撒かれ中・高校で芽を出し育ったわけである。この約十ケ年の間にわがハンドはサッカーに大きく水を空けられてしまった気がする。

一、中学校指導要領対策委員会の誕生とその任務

そこで今回の学校教育課程の改訂には「なにがなんでもハンドを中学校の必修に」という声が心ある体育指導者やハンド愛好者に深く叫ばれた。協会では数年前から、協会に「中学校指導要領対策」の特別委員会を設けその対策を検討するとともに関係方面に対し強力に働きかけることとした。いわばこの委員会は審議と執行の両面の任務を委任されたわけである。この委員会で最初問題になった点は大要次の通りであった。

1、前回中学校の要目から除外された理由をはっきり知ること。
2、改訂に至るまでの審議過程を察知すること。
3、改訂に関係ある委員等を知ること。
4、スポーツとしての中学校向ハンドを研究すること。
5、学校体育（特に中学生）としてのハンドを実験的に研究すること。
6、都道府県ハンドボール協会を通じ、当該主管課長に働きかけ、与論を換起すること。

二、文部省教育課程審議と協会の対策

早速本部協会では普及部を中心にスポーツとしての中学校向ハンドと学校体育としてのハンドの研究に着手した。

文部省での審議の経過は次の三つの段階になったようである。

第一は、教育課程全般に関する

審議であった。（初等教育審議委員が二十四名、中等教育審議委員二十六名）。

第二は、学校教育における「保健体育」の基本的な問題なり方向づけなどが審議された。（委員五名）

第三は、第一・第二に審議された基本的方向にそいつつ小・中・高と関連をもつよう小学校・中学校の教科毎に、具体的調査研究され、それを順次答申することになる模様である。中学校保体調査研究（協力委員二十名（中学校関係者六名、大学教官十名、その他四名））

これ等の保体要目改訂委員ならびにその関係者の方々には、スポーツとしてのハンドボールを十分認識してもらうこと、すなわちハンドボール大会を観てもらうことが先決であると考えた。

このように協会本部の対策委員会としては、どんな時期に何をすることが最も適切であるかを検討し、的を外さぬよう終始一貫努めたと信じている。しかし、初期の通りに事が総べて運んだのではない。ことに普及部の研究は二ヶ年に及んだが予算の都合で満足するところまで至らなかった。

なお、文部省へ各地各層から提示された山なす要望書、請願書の中に、東北地区主管課長会議から「ハンドは女子の好適教材…」という要望書は、ハンドにとって極めて貴重なものであったし、本部協会からの要望書は十分成果があったと思う。しかしその最終的成果は総べて中学校指導要領改訂後に期待したい。

三、現在の状況と将来の見とおし

(イ) 昨秋小学校教育課程の中間報告があった。これによって改訂の基本的態度が明かになったが、保体について云えば、目新しいものはなかった。すなわち授業時数の増は認められなかった。唯地方の実情により教育委員会、あるいは学校の自主制が尊重されることになり、若干の弾力的取扱いができることになった程度であった。小学校の今後の作業は、各教科毎に指導要領の細部が現在調査研究中で、新春早々答申されるのであろう。

(ロ) 中学校に関する審議会の中間報告は、予定より遅れているが年が明ける頃答申されるとのこと。保体について詳しいことはわからないが、中学校の保体目標とその内容についてその基本的方向だけが示される程度で、具体的な教材やカリキュラムはその後の調査研究をまつことになる模様である。

今少し内容について推測すれば体力づくりの立場から現行の指導要領が再検討され、若干教材（種目）を巾広くするということと、反面教材を精選するという相反する両面とがあり、それ等の種目を評準として指導要領で示し、運用面で弾力的に取扱うことが認められることはほぼ間違いない。

(ハ) 中学校の保体の種目を巾広くといっても結局は、施設、用具等の関係もあり、その精選された種目の中にハンドが含まれるか、どうかである。うわさによると精選された中学校での球技は、数種目だときく。幸いハンドもその中に含まれているらしい。これ等の種目は、学校体育の立場から十分調査研究され、それが答申されるに今後数ヶ月はかかるであろう。

（筆者は日本協会常務理事）

PR対策

増田一郎

戦後、各種スポーツが復興するとともに、競技人口も急速にふえ中でも野球は、一億総評論家といわれるほどにまで盛んになりました。また戦後最大のスポーツの祭典、東京オリンピックが開かれたことによって、それまで一般に、あまり馴染がなかったサッカー、バレー、バスケットなども関心がもたれるようになってきています。この中にあってハンドボールも関係者の努力がようやく実り、最近では新聞、放送に大きく、とり上げられるようになりました。

しかしまだ一般的スポーツとは云えません。例えばメムバーが新聞に出ても、野球ならば、1、2、3と並べば、1は投手、2は捕手と云ったように誰でもが理解できます。これは、プロ野球で川上、青田の赤バット、青バットという名バッターがあらわれ、競技の面白さと相俟って大いに野球を売り出したからです。また、最近、プロ野球よりも次はサッカーだといわれていますが、これも、杉山、釜本といったスピード、技術ともにすぐれた名プレーヤーが出現し、国際試合に好成績をあげたからです。ハンドボールでも、底辺を拡大するとともに、好試合を展開すれば、一般の興味をひくに十分魅力あるスポーツです。そこで今後はまず、いつもゲームを一般に紹介してくれる新聞、放送記者に、ハンドボールをよく理解してもらうよう関係者がつとめることにあると思います、例えば、国際試合のメムバー・スコアなどは一見して誰にでも理解できる形に整える。試合終了後、直ちにスコアを出すなど、記事を早く、わかり易く書けるよう協力する。このことは他の競技団体とくらべ、まだ十分とは云えないようです。次にゲームがテレビを通じて、家庭に入りこむ機会が多くなりましたが、このような時にスピード、高度な技術、そして白熱した試合内容となれば視聴者をひきつけ、ハンドボール競技を知ってもらうばかりでなく、若い世代に大いに興味をもたせ、競技の印象をつよくします。これがひいては、底辺拡大にも、つながるわけで、その意味でも、選手は勿論のこと解説者も重要な役割りを果すよう心がけてほしいものです。一九七二年のミュンヘンオリンピックではハンドボールが戦後初めて、正式種目として、とりあげられます。正式決定となれば、マスコミをはじめ、一般の関心は一段と高まり、ハンドボールが一大飛躍をとげる契機となります。これからの国際試合で、好試合が多ければ多いほど、マスコミも一般も注目するわけですから、その実現に努力したいものです。（筆者は日本協会常務理事）

底辺の拡大（ハンドボール少年団）

若崎重富

スポーツ組織団体の目的と社会的責任は、おのずから明白である。一つは、スポーツ人口の拡大であり、一つは、国際最高水準に到達する競技力の向上である。

「スポーツ人口の拡大」は、各組織団体で、いろいろな手段や方法を持って対処している。ある種目団体では、最高の技術を大衆に

見せて、その魅力で引き付ける方法、あるいは、商業的方法をとっているなどがある。いずれにせよ目的は同じなのであるが、問題はその種目団体の持っている歴史的背景によって、その方法が違ってくるのではないか。そこで、ハンドボール協会としては、どのような方法を選ぶかであった。

昭和三十七年に、中学校の保健体育の教材からハンドボールが外されたことは、大きな打撃であった。最も、最短で確実な普及の方法の道が閉ざされてしまったからである。その対策として、ハンドボール少年団の育成によって、少年達との絆を結んでおくことを構想として持ち、各地方協会の協力を求めた。熊本県ではいち早く、実行に移されて全国にさきがけハンドボール少年団が誕生した。

しかし、全国的に見て、初期に期待した程の効果を得られなかった。そこで、昭和四十年に再度、この重要性を認識し、深い関心を持って、ハンドボール少年団の結成に努力をしたのである。次代を担う少年を対照として、長期的な観点に立った計画と実践は、ハンドボールの発展と、社会的要求の二つの意義を担うものとして、強力な活動を展開して行ったのである。現在、社会の要請しているものは、体育（スポーツ）が学校教育の場から、次第に、地域社会へと移行していくことだろう。このときにあたって、日本ハンドボール協会は、ハンドボール競技のもつ、ティームゲームの特性を充分に生かして、少年達の心身の発達段階に応じて、少年達の育成に効果的なものとなるように、少年の生活の中にスポーツを融合させなければならない。このような確信のもとに、その発足準備のための会合を昭和四十一年五月に、横浜の東急ホテルで、各県の代表者連絡会議を持った。この会合では、ハンドボール少年団の結成と全国交歓会について話合ったが、賛否両論、ついに、結成するとの参集者全員一致の決意を得られず散会となった。その最大の問題点は、日本体協の組織下にあるスポーツ少年団との関係であった。そこで六月中旬に、スポーツ少年団の幹部との話し合いを日本体協で持った。大筋では一致点を見い出したが、全べてを解決するに至らず、時間切れとなった。やむなく、ハンドボール協会独自のもので、それも規模を縮少した企画をたててその実行に移った。その内容は、第1部、各種少年団体がハンドボールを中心に生活を共にし、友好を深める交歓会とした。第2部は、全国的規模で団旗を全国リレーの方法で頒布し、ハンドボール少年団意識による団結と友情を深めるのを目的とした。第3部は、各地の代表が、一堂に会し、生活、交歓、見学等によりハンドボールを中心にした友情を深め、全国組織が結成されスポーツ精神の高揚を期し、今後の発展の契機とすることにあった。

さて、近い将来に中学校保健体育の教材にハンドボールが入ったとしても、これをもって底辺の拡大の方策は解決したと考えることは危険である。将来、学校体育の場におけるスポーツの普及の門戸は極めて狭くなってくることと、前述したように、社会の要求はスポーツの大衆化である。この二点を考慮して今後、さらに、地域社会の奉仕をおろそかにしてはハンドボールの普及発展はあり得ないのではないだろうか。（筆者は日本協会常務理事）

底辺拡大を思う

徳永陸繁

今年は明治改元百年を記念して、いろいろな催しが行われるようですが、わがハンドボール協会にあっても、創立三十周年を迎えたことは、誠に喜ばしい限りであります。

われわれは、いつもスポーツの本質から逸脱しないよう、またハンドボール競技が、未来の青少年にとっての「人間造り」に役立てるべきことを念願しながら、今まで数々の活動を続けてまいりました。こういう努力がようやく実を結んで、ハンドボール人口の目覚ましい増加を見たわけですが、これを更に伸長させるためには、これから益々発展してやまない当協会の組織を立派に生かさなければなりません。そして、みんなが融和しながら、しかも積極的に取り組んでゆくことです。

現在わがハンドボール協会は、ミュンヘンオリンピックを最大の目標にしています。それには、世界を通じての日本ハンドボールの、レベルそのものから考え直す必要があります。今まで数回にわたって国際交流の機会を持って、外国チームと対戦できたことは、何と言っても収獲でした。しかし、まだまだ試合経験の面では、浅いと言っても過言ではありません。並居る世界の強豪を相手にして、真に満足すべき結果を得るためには、すべてこれからの方法如何にかかっています。

そこで、私はその手始めとして、何よりも「底辺拡大」ということ、つまり少年プレイヤーを大事に育てて、これを世界の線にまでもって行くということを考えたいのです。

幸い、私どもが長い間念願にしていた「中学校指導要領」問題も、明るい見通しと共に、近い将来には正科として全面的に採り上げられる段階にあるのは、このことの大きな原動力となるに違いありません。

とかく、今までは財政的な面での不均衡な消費もからんで、この少年ハンドボールの育成を中途半端にしていたことは、この際大いに反省をして、ただちに先へ先へとステップを踏んでゆくべきでしょう。ともあれ、各所で徐々に少年チームが産声をあげていることは、われわれの意をいっそう強くさせます。

ミュンヘンオリンピックへの道、それは単に選手強化や競技力だけにかかるものではありません。ハンドボール人口に幅広い層を持つことは何ものにも替えがたい力となるものです。「底辺拡大」はとりもなおさずミュンヘンに続く道でもあります。

それには、都道府県各地域を通じて、おたがいが努力を惜しまないで、なおいっそうの普及、指導を深めて行きたいものです。ハイレベルの競技者による精鋭チームを造り出すために、

一、国際交流の拡大。

二、コーチ陣容、指導者の拡充強化。

三、少年ハンドボールの育成。

をあげて、決意の一端としたいと思います。（筆者は日本協会常務理事）

日本ハンドボール界の足跡

日本協会発足以前

▽大谷武一氏、日本体育学会夏期講習会で「ハンドボール」を紹介（大正11年8月）

▽改正学校体操教授要目（中学、男子実業学校、男女師範）に加えられる（大正15年5月）

▽国際アマチュア・ハンドボール連盟がアムステルダムで創立され日本陸上競技連盟の名称で日本も加盟。（昭和3年）

▽昭和6年1月、東京市会は「オリンピック東京招致案」を可決。ただちに招致運動にはいる。ハンドボールの実施も考りよされることになり、昭和9年日本陸上競技連盟内に日本送球協会創立準備委員会（委員長・平沼亮三）が設けられた。（昭和6〜9年）

▽日本最初の本格的ハンドボール講習会がドイツ・ライプチヒ体育大のパムペル氏を主任講師として東京代々木西原の体育研究所で行われた（昭和10年7月22、23、24日）

▽高等女学校、高等小学校女子実業学校教材要目に採用される（昭和11年）

▽日本オリンピック委員会（JOC）は東京オリンピックでハンドボールを実施するか否かを再三にわたって協議。第9回JOC委員会（昭和11年4月20日）席上「ハンドボールは東京大会競技種目として希望せざることに決定。但し一、二年中に国内で著しく発達し、且つ参加国多数となる見込みを得れば改めて議題とすること」（大日本体育協会史補遺上巻41頁）を申しあわせた。（昭和11年）

▽ワルシャワで開かれた国際オリンピック（IOC）委員会では昭和15年の東京オリンピックでハンドボールをふくむ22競技実施、会期は9月21日から16日間と決めた（昭和12年6月）

▽日本初のハンドボールチームとして慶大ハンドボールクラブ誕生、つづいて文理大（現・東京教育大）青山師範、日体などにチーム発足（昭和12年4月〜11月）

▽初の公式大会として第1回関東選手権開く（昭和12年10月23日・文部省体育研究所グランド）

▽第9回明治神宮体育大会に陸上競技の一部として参加。この大会を第1回全日本ハンドボール選手権とした（昭和12年11月11・12日・文部省体育研究所グランド）

▽全国体育指導者伝達及び養成講習会開く（昭和12年12月25、26、27日・文部省体育研究所グランド）

▽日本陸連総会において送球委員会を独立団体することに決定（昭和12年12月）

▽初の地方協会（当時は支部と呼称）として岡山県送球連盟発足（1月）

昭和13年

▽日本送球協会正式発足

国際アマチュアハンドボール連盟への日本代表権も日本陸連から譲渡された（2月2日・赤坂幸楽にて発会式）

▽初代会長に平沼亮三氏（2月2日）

▽日本体育協会はオリンピック選手強化費としてハンドボールに一二五〇円の交付を決定（3月）

▽第1回オリンピック・ハンドボール代表候補選手合宿練習会開く（3月15日〜19日・慶大日吉グランド）

▽国際ハンドボール競技規則を完訳、全国頒布（4月）

▽関東学生送球連盟が発足し、第1回リーグ戦開く（5月）

▽日本体育協会に加盟を認められる（5月）

▽日支事変など国際情勢の変化から昭和15年の東京オリンピック返上が決められ、聖火の下でハンドボールをという夢がたたれた（7月）

▽初の国際試合として来日中のヒットラー・ユーゲント選抜チームと日体が対戦（9月16日・神宮）

▽第1回東西対抗開く（11月21日・南甲子園運動場）

昭和14年

▽傷兵慰問体育大会種目として関東学生選抜紅白戦を行う（3月19日・陸軍戸山運動場）

▽大阪府中等学校体育連盟が送球部の新設を承認（4月）

▽初の実業団・倉敷絹織岡山、早大と招待試合（7月、岡山）

昭和15年

▽第2代会長に永井松三氏（4月）

▽紀元二千六百年奉祝東亜競技大会種目として日体対在日ドイツ人選抜軍の対抗戦を行う（6月9日神宮、6月16日橿原）

▽慶大、早大滞同して韓国に遠征咸興、元山、平壌などを転戦（7月）

▽明治神宮体育大会初の独立種目として参加、第3回全日本選手権を兼ねて開く。なお女子部門も新設され5チームが出場。これは女子の最初の全国大会である（10月27日～29日神宮ほか）

▽第1回全日本中等学校選手権（男子のみ）開く。関東州からはるばる参加した新京商業など7校が出場（10月27日～29日神宮）

昭和16年

▽初のラジオ中継としてNHKが第3回東西対抗をとりあげる（1月19日、南甲子園運動場）

▽明治神宮体育大会種目からはずされる。

▽第1回関西選手権開く（12月）

昭和17年

▽すべての競技団体は大日本体育会に統括。「大日本体育会送球部会」となる。

▽訪日ドイツ艦隊と全日本学生選抜軍対戦（11月29日・神宮）

昭和18年

▽学徒送球規則が制定され、男子のリーグ戦は休止。学徒体育振興会の主催で女子専門学校送球選手権開く。

▽枢軸国交歓球技大会として在日ドイツ人選抜と全日本社会人選抜（関東大学OB）が対戦（12月5日・神宮）

昭和19年

▽戦火はげしくなり、ハンドボールは女子球技の普及奨励種目として残る。

昭和20年

▽戦後初の試合として一高対日体及び関東学生・OB懇親試合行われる（12月2日・日産球技場）

昭和21年

▽戦後初の公式試合として復活第1回（通算第5回）東西対抗開く（1月20日・西宮）

▽日本送球協会復活準備委員会結成（2月）。

▽日本送球協会復活（4月）

▽学生界復活記念試合（関東学生OB対現役）を日本送球協会、学徒体育振興会共催で開く（5月12日・女高師グランド）

▽関東学生リーグ復活（6月）

▽第3代会長に式場隆三郎氏（9月）

▽すべての公式呼称を送球からハンドボールに変えた（10月）

▽第1回国体が開かれ、ハンドボールも正式種目として参加（11月・西宮）

▽初の東西大学期戦として早大対関学定期戦はじまる（11月）

昭和22年

▽国際アマチュアハンドボール連盟は国際ハンドボール連盟（IHF）と改称して新体制で発足（1月）

▽初の女子東西対抗開く（1月・西宮）

▽初の高校（旧制）全国大会開く（7月・京都）

▽第2回国体で一般男女、高校男女の4部門が確立された（10月）

昭和23年

▽関西学生連盟が発足し、第1回リーグ戦開く（1月、5月）

▽初の高校男女東西対抗開く（1月・ナイルキニック・スタジアム＝神宮）

▽東北選手権はじまる（9月）

▽第3回国体が開かれ天皇杯、皇后杯得点順位争いはじまる。中学男女は高校男女に変わる（10月・久留米）

▽全日本学生連盟結成。その事業として東西学生王座（現・全日本学生王座）、全日本学生選抜東西対抗をはじめる（11・12月）

昭和24年

▽関東選手権復活（7月）

▽全国高体連ハンドボール部発足

▽東海選手権はじまる（9月）

昭和25年

▽女子東西対抗3年ぶりで復活（1月・丸亀）

▽全日本選手権が復活され、第1回として新発足（1月・一宮＝昭和24年度事業）

▽渡欧する東竜太郎IOC委員にIHFへの連絡依頼（5月）

▽第2次大戦後、IHFからはじ

めての通信をうける（6月）
▽初の全日本高校（新制）選手権開く（8月・藤井寺）
▽IHFから送られた「一九四七年版国際ルール」を完訳、第5回国体から適用（8月〜10月）

昭和26年

▽初の地方大学大会として西部大学選手権開く（6月・山口）
▽パリで開かれたIHF総会で日本仮加盟決まる（10月）
▽高校男女東西対抗、一般女子東西対抗終会となる（11月・今治）

昭和27年

▽式場会長と外山理事長をヨーロッパ球界視察に派遣（6月）
▽ザールブリュッケンで開かれたIHF総会で日本の正式加盟承認（9月）
▽初の室内公式試合として大阪クン対大阪学生選抜が対戦（12月3日・大阪府立体育館記念シリーズ）

昭和28年

▽初のナイトゲームとして第8回早大対関学定期戦行う（6月25日・西宮）
▽全日本選手権を全日本総合選手権に改称（8月）
▽東海学連、同リーグ発足（9月）
▽西ドイツチーム招へいを計画するも実現せず。

昭和29年

▽関東学連から6校が脱退、東京6大学リーグを結成（4月）
▽関東選手権新体制で再開（7月）
▽初の全日本総合室内選手権開く（12月・大阪府立体育会館）

昭和30年

▽関東学連、東京6大学リーグ合併（9月）
▽自衛隊にチーム結成がみられるようになる。

昭和31年

▽中国選手権はじまる（5月）
▽西ドイツ選抜軍が来日、日本側8戦8敗（9月、全国各地）
▽IHFバウマン会長来日（9月東京）
▽関東学連から4校脱退（32年4月さらに1校脱退）し、東京都学連結成（10月）
▽東北・北海道学生選手権はじまる（11月）
▽ハンドボール初のテレビ中継としてNHKが第3回全日本総合室内選手権をとりあげる（12月28日、大阪）

昭和32年

▽ルール改正（11人制）が行われ35メートル・ライン新設（4月）
▽女子の公式試合すべて7人制となる（4月）
▽東西学生王座を全日本学生王座に改称（12月、東京）

昭和33年

▽日本ハンドボール協会創設20周年記念行事開く（2月2日・東京体育館ほか）
▽一般男子東西対抗終会となる（2月、東京）
▽関東学連へ東京都学連復帰（6月）
▽全日本学生選手権はじまる（7月、東京）
▽全日本教職員選手権はじまる（8月、東京）

昭和34年

▽第5回世界男子11人制選手権（6月、ウイーン）に初参加を決め、遠征メンバー発表（2月）
▽ミュンヘンで行われた第55回IOC総会で昭和38年に東京都でオリンピックが開かれることが決まり、ハンドボールの実施有望となる（5月）
▽第5回世界男子11人制選手権出場とりやめ。（5月）
▽東京オリンピック小委員会は、ハンドボールなどの削減を決めた（12月）

昭和35年

▽本誌創刊（5月）
▽ルーマニア選抜軍が来日、日本側10戦10敗（6月、全国各地）
▽中四国学生選手権はじまる（10月）
▽全日本実業団選手権はじまる（12月、広島）

昭和36年

▽初の海外遠征として全日本男子が第4回世界男子7人制選手権（3月・西ドイツ）に参加。西ドイツ、チェコ、フランス、イスラエルなどを転戦（3〜4月）
▽IOC総会、東京オリンピックにおけるハンドボール除外を正式決定（6月、アテネ）
▽日体大（男子）韓国に遠征6戦6勝（10月）
▽関東学生リーグに女子部復活（10月）

昭和37年

▽北海道総合室内はじまる（1月）
▽東海室内はじまる（2月）
▽全日本女子が第2回世界女子7人制選手権（7月・ルーマニア）に参加。西ドイツ、ルーマニ

ア、フランスなどを転戦（6月～7月）

▽北信越選手権はじまる。

▽全日本高校男子選抜が韓国に遠征、6戦5勝1分（8月）

▽全日本総合選手権男子で地区予選制を採用（8月）

昭和38年

▽全日本学生が第1回世界学生選手権（1月・スウェーデン）に参加、スウェーデン、西ドイツ、デンマーク、フランスなどを転戦（37年12月～1月）制を採用（12月）

▽韓国高校選抜が来日、日本側1勝5敗（12月）

昭和39年

▽全日本男子が第5回世界男子7人制選手権（3月・チェコ）に参加。ノルウェーに18－14で勝ち世界選手権で初の1勝をあげる。フランス、チェコ、イスラエルなど転戦（2～3月）

▽フランス・ステラクラブが来日日本側4勝6敗。予定された女子は来日せず（6月）

▽北信越学生リーグはじまる（11月）

▽東北総合室内はじまる（11月）

▽全日本総合室内男子、推せん制採用（12月）

昭和40年

▽西独練習艦ドイッチェランド号チームと親善試合（3月、東京のみ）

▽全日本男子が中共に遠征（4月）

▽九州選手権はじまる（5月）

▽沖縄協会発足（7月）

▽全日本学生女子選手権はじまる（7月）

▽IOC総会、一九七二年（昭47）のオリンピック大会でハンドボールを行うことに決定（10月マドリード）

▽全日本実業団連盟発足（10月）

▽全日本女子が第3回世界女子7人制選手権（11月・西ドイツ）に参加。ポーランドに6－5で勝ち世界選手権女子で初の1勝をあげる。チェコ、西ドイツ、フランスなどの諸国を転戦（10～11月）

▽全日本総合室内を全日本選抜と改称。出場チームは日本協会の厳選による推せんチームに限定（12月）

昭和41年

▽沖縄をふくむ47都道府県協会出そろう（4月）

▽IOC総会、一九七二年オリンピック開催地をミュンヘン（西ドイツ）に決める（4月、ローマン）

△ミュンヘンオリンピック第一次強化候補選手男子28人を発表（9月）

▽中共ナショナルチーム来日。日本側1勝8敗（9月）

▽ハンドボール少年団全国結成、交歓会開く（9月、横浜）

昭和42年

▽全日本男子が第6回世界男子7人制選手権（1月・スエーデン）に参加。ノルウェーにまたも勝ち、一勝をあげるも悲願の決勝リーグ進出ならず。ルーマニア、フィンランド、スウェーデン、スペイン、フランスなどを転戦（1月）

▽第4代会長に鈴木達雄氏（2月）

▽全国スポーツ少年団大会の教科目に参加（8月、本栖湖）

▽初の公認コーチ講習会開く（9月、東京）

▽西ドイツ男女ナショナルチーム来日。外国女子チームの来日は初めて。日本側男子3勝10敗、女子5勝6敗

昭和43年

▽30周年記念行事「全日本社会人・学生選抜対抗戦」など行う（1月28日）

▽協会創立30周年（2月2日）



歴史とは、思い出の蓄積でもある。日本ハンドボール協会の歩んだ30年の歳月には、苦も楽も、波乱に富んだ出来ごとが深く刻みこまれている。

30周年にあたって、球史をひもどき、ゆかりのかたがたに当時を想い出していただいた。

執筆者各位の回想は、そのまま興味深い〝史実〟であり、貴重な資料として得がたいものである。（カット写真は第5回世界選手権開会式で入場行進する日本選手団）

第一回全日本選手権大会

入江暢一

ハンドボール協会創設三十周年の記念号に執筆をと、先日原稿依頼を受けたとき、実は「そうか、もう三十年になったか」と、おどろいた次第。

あの頃は、ベルリンのオリンピック大会もあった、紀元二千六百年記念日本万国博覧会の記念塔も思い出される。而し何んと云っても日支事変だった。私もどうせ出るなら志願して入隊をと検査をしたが、目が乱視で見事に落されたが、同窓生の中から二十名近いものが、祝入営ののぼり旗と全学生の歓呼に送られ入隊していたのは今も忘れられない。とにかくにぎわしい世情であったことだ。

ところで第一回全日本選手権大会の様子をと云われたのだが、はてと戸惑ってしまった。

ハンドボール協会が初めて事務局をもったのは、駿河台の明大隣りの生活会館の地下だったと思う。私が卒業して神田のYMCAに勤めた年だったからだ。思い出して当時のアルバムと協会の記録をたどって見たら第九回明治神宮体育大会の試合だった。

私がハンドボールをはじめた動機は同窓の林朝権のすすめだったのを思い出す。彼は台湾出身。当時すでに妻帯者だったが、とても器用で熱心な男だった。当時彼に教えてもらった手品は私の特技の一つになっている。「今度ハンドボールと云う球技が出来て大会がある。出場しよう」と熱心にくどかれたのがそもそもの初めだった。

しかしハンドボールは体育教材として、欧州から帰られた故大谷武一先生の土産として紹介されていたが、当時は殆んどまだ普及されていなかったので、大会開催も出来なかったようだった。一時陸上競技連盟の一部に加えられており、第九回神宮体育大会として開かれたのが最初だったわけである。

会場は体育研究所のグランド、参加チームも四チームだった。

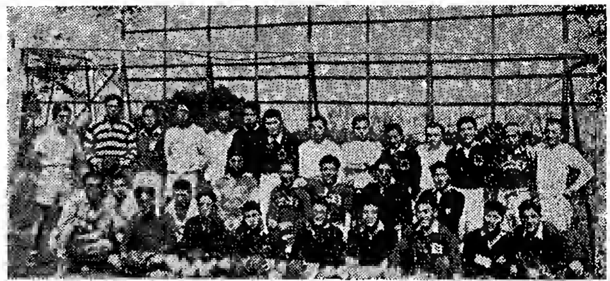
我がチームは外人部隊の感があった。蹴球の林朝権が主将で、あとはバスケットが中心、現在韓国慶熙大学の金光善氏は当時バスケットでは有名なポイントゲッターと知られていた男だった。彼がセンター。それに六尺豊かな白氏（白系露人）も居た。現在協会理事の徳永氏は最初キーパーをやったおぼえがあるがさだかではない。他チームの、高等師範（現教育大）も同様混成チームで、ラグビー、陸上の選手のようだった。現協会の的場氏も、それに現文部省の高橋体育官もFBで活躍されていたと聞く。慶応には現東京ハンドボール協会副会長の外山氏が主将をしていた。それに青山師範（現学芸大）が参加した。のちに明大、早大が加わり、盛んになって来た。

審判員には珍らしい方が居た。現日本体育協会の事務局長である塩沢先生が最初の審判員だったことを思い出した。それに慶応の酒井将先生（戦後農大におられた）、高等師範の阿部二郎先生が居た。阿部監督は非常な熱心な方だった。今日の日本ハンドボール協会の創設、特にルールブックの作成については、忘れてはならない功績者だった。

余談だが、当時次回オリンピックが東京で開催されることが決定していた時だった。ハンドボールもオリンピック種目となり是非合宿をということで各チームから選抜され日吉台の慶応合宿所で合同合宿をした。日体、高師、慶応、早稲田、明治等各大学から選抜された選手二十七名、監督コーチ三名計三十名の合宿だった。実は何か記録でもないかとさがしていたときに、偶々ほこりになったアルバムから出て来たのが次の写真で

30年の歴史にみる重大ポイント

▽協会発足に先立ち全日本選手権開く（昭和12年11月）
▽日本協会設立（昭和13年2月）
▽オリンピック強化合宿（昭和13年3月）
▽戦前の事業（東西対抗ほか。昭和13年〜18年）
▽IHFへの復帰（昭和27年）
▽西独チームの来日（昭和31年）
▽七人制一本化（昭和38年）
▽国際舞台への進出（欧州・アジア）



昭和13年3月慶大日吉グランドで行われたオリンピック東京大会第1次候補選手強化合宿に参加した選手たち。

ある。

懐さのあまり紹介する。この写真に見おぼえの方もいるのではないだろうか。外山氏、現在京都にいる三宅氏、韓国の金光善、崔氏の顔も見える。

阿部、酒井、重田監督の顔も懐しい。この時は、外山氏には非常に御世話をかけた。

さて大会だが、何れもハンドボールの正式試合ははじめてのことルールといっても、今のように、よく理解され、研究され、徹底したものでなかっただけに、乱暴極まるものだった。「ジャクル」等の新用語の解釈等は、「あきらかに空間を獲得した球」等と、むつかしい翻訳が書いてあったのを思い出す。

試合の内容は記憶に薄いが、我がチームは青山師範に勝って、決勝で大塚クラブ（私は高等師範だったと思っていたがOBとの混成だったことを聞かされた）に二点差で敗れたのを私の思い出のアルバムに残っている賞状を見てわかった。

この原稿をたのまれたおかげで私はアルバムやら記録やら写真などをひっくりかえし乍ら、昔の懐しい思い出に耽けることができた。

さて協会も三十年の歴史を刻みようやく国際的協会にまで発展して来た。いよいよ躍進の時期だ。

昨年まで種々問題があったが、過去を捨て新しい年を迎え、三十周年を契機に一段の飛躍を期待しよう。（筆者は日本協会常務理事）

〝日本協会発足の頃〟

塩沢　幹

三十年前の二月二日。赤坂の「幸楽」で、陸連会長の平沼亮三さんから、新生・送球協会々長の平沼亮三さん（もちろん代理者）へボートが移譲された。式の進行には私が当った。北風が強く、寒い日であった。そのあと陸連の幹部と送球協会設立委員とが膝を交えて支那料理をつついたことを思い出す。陸連の誰かが、うまそうな品がでると自分の皿に盛り取って、こちら側にまわって来なかったことなど——食べ物のうらみか——印象深い。

そして幸楽のお女将が、お祝にと、皮の煙草入をくれたようにおもう。私はしばらく、それにチョコレートを入れて持ちあるいていた。

今のホテル・ニュージャパンのあたりが、その旧蹟である。二・二六で反乱軍がたてこもったりした思い出深い家がそれである。

文部省の体育研究所、今の東京教育大学体育学部の本館二階の学部長の東隣の狭い部屋で、大谷さんや佐々木寿さん、森さんなどにもときどき来てもらって、若い者たち数人で議論を斗わせながら創立準備をしたものである。

特に中園進氏、本間茂雄氏、陸上の三藤氏、酒井将氏の面々が私の記憶に残る。

そして陸連からボートを譲り受ける工作が順調に進んで創立にまでこぎつけたが、協会の名称がなかなか決まらず曲節を経て若干無理して送球とした。あまり愛される呼称ではなかったが。

創立前後は、この普及の方策として高等師範、青山師範、慶応大学に働きかけた。役員の関係している所だからである。

当時は大会ともなれば、ときには大会総務と審判と選手なども兼ねたものである。私など明治神宮体育大会の送球競技で全青山師範のキャプテン、審判長、競技役員長を兼ねたことさえあった。

少数の役員が手弁当で、七面六臂のエネルギッシュな活動をしたものである。それは一途にハンドボールの普及と将来のオリンピック種目になることを約束されているとの信条からこりかたまつたものである。

このごろの世評のような協会役員のみにくくうつる対人関係のゴタゴタとは凡そ遙かなるものであったとおもう。

それに、私は蹴球協会や体操連盟の理事もしていて、時間をさくのに大変だったが、他の役員も同様で、皆新しく誕生したスポーツ育成に、またちがつた情熱をたぎらせていたものである。

創立後の本格的事務所は、中園進氏が努力して松本学さんのご配慮で、今のお茶の水の山の上ホテル、当時は佐藤新興生活館の地下北側の一室に間借というか、居候して活動を開始した。

私は八年前体協に迎えられて事務局長として着任し、歓迎会をこの部室——既に山の上ホテルとなり地下の会議用の部屋として使われていた——で催うされて、その奇縁に、感慨の一潮であったことを思い起す。

この頃の協会は中園進氏を中心に阿部二郎君、外山君、的場君など青年将校組が加わって熱っぽい活動がはじめられていた。

小さくかたまらないで早稲田をはじめ立教など各大学、日体等に働きかけが行われて漸次普及の実があげられつつあった。

文部省の教授要目に加えられ、明治神宮体育大会種目にも加わり、先達の人々のご苦心が段々と着実にみのつて行った。

国際場裡に進出した二〇周年、ミュンヘンオリンピックに備える今日の三十周年、今こそ選手は実力の蓄積にはげみ、役員また創業の志しを承けて国際的にもアマチュアスポーツ団体の経営者として欠けることのないよう大いに精励すべきではなかろうか。（筆者は日本送球協会設立委員、現日本体育協会事務局長）

戦前の動き（プロローグ）

編集部

日本協会発足後の重点施策は、地方組織の助成発達であった。

すでに陸連委員会時代にその種まきはされており、北海道、東京大阪、兵庫、埼玉、神奈川、千葉岐阜、岡山、静岡、徳島、山梨、山形、熊本、鹿児島、広島、愛知

昭和14年、山口から九州にかけて大規模な巡回講習会が各地で行われた。写真は山口県下での模様。先頭で指導するのは徳永陸繁氏（現日本協会普及部長）

京都、朝鮮の各地方が昭和16年までに加盟申しこみをし、活動をはじめている（大日本体育会編「昭和17年度体育年報」による）

これらの地方は、順調に発展して現在に至っているが、注目されるのは、戦後もごく最近になって新加盟した徳島や山形が、この時点で名を連ねていることだ。最近の資料では山形は29年、徳島は41年に加盟したことになっている。せっかく戦前に芽生えながらこの間、同地方の活動がブランク（休止）というわけである。

戦前の唯一の加盟組織としては13年5月に発会した関東学生連盟がある。同連盟は全日本学生連盟をも名乗る二枚看板であった。

全日本中学連盟という組織は戦前は出来ずじまいである。

組織の確立にメドがつくと、次に積極策がとられたのは技術の伝達——講習会の開催であった。

昭和13年には徳島、愛知（名古屋）、岐阜、埼玉、北海道、静岡、京都、大阪、神戸、岡山、広島で開講され、昭和14年には山陰、山陽、九州方面で講習がつづけられた。（別掲写真参照＝愛媛・越智武氏提供）

こうした地味な努力はしだいに実を結び、岡山、大阪、兵庫、静岡などで県大会、県中学大会などが行われるまでになった。

中央での大会参加は、一般男子は東京の学生勢が中心であったが一般女子、中学は地方勢が多数を占めた。

協会事業も年度ごとに拡充され13年9月来日したヒットラー・ユーゲントと日体による初の国際試合を開いたほか、13年11月には国民精神作興体育大会に加わり、関東大会では紅白戦、関西大会では第1回東西対抗（＝後掲）を行った。

14年に入ると3月に傷兵慰問体育大会（関東学生選抜紅白戦）、4月に平沼会長還暦記念競技会。

15年は、6月に開かれた第1回東亜競技大会に、ハンドボールは日独対抗として在日ドイツ選抜軍と日体の対戦をもって参加した。

この試合の結果は神宮（関東大会）、橿原（関西大会）とも8−5のスコアで日体が連勝した。

さらに10月の第11回明治神宮体育大会には独立種目として初参加（注・それまでは陸上競技に包含されていた）。第3回全日本選手権を兼ねて女子部門も設け、中学男子部門は第1回全日本中学選手権と銘打たれた。

また、このシーズン書きおとしてならないのは早慶両大学の滞同朝鮮遠征（7月）であろう。

こうして順調な歩みをみせた球界に、16年、予算大縮少のあおりで明治神宮体育大会種目から除外という事態がおきた。

この決定は、オリンピック東京大会返上とともに、戦前の日本ハンドボール界の最大痛恨事といってよいだろう。

17年、気をとりなおすかのように11月、訪日ドイツ艦隊と国際試合（本誌30頁参照）を催すなどしたが、第2次大戦の戦火ははげしくなるばかりで、18年に入るや関東学生リーグも春季戦をもって休止、ハンドボールは、女子将励体育として細々活動を許されることになるといった状態になった。

めだった動きもないなかで18年12月神宮で開かれた枢軸国交歓大会球技会の全日本対在日ドイツ人選抜軍の一戦（11−11の引き分け）は、戦前の活動の最後のビッグエベントとして忘れてはなるまい。

なお、協会組織は、17年10月にすべての競技団体は大日本体育会に一括、「大日本体育会送球部会」ということにされた。（この項は馬場太郎、西敏郎、荒川清美、的場益雄各氏の話を編集部でまとめたものです）

戦前の動き（東西対抗）

馬場太郎

戦前の球界の看板試合に東西対抗がある。

単独チームの激斗は、後掲西敏部氏の寄稿でも判るように主として関東の大学勢によって、関東学生リーグ、関東選手権、全日本選手権などを舞台につづられたが、一流選手によるこの東西対抗戦は球界最高峰を自負する選手たちの誇り高い個人技を軸に、はなやかななかにも激しい攻防を示した。

昭和13年11月21日、南甲子園運動場で行われた第1回大会は、おりから開かれていた「国民精神作興体育大会関西大会第2日」の行事に組みこまれたものだった。

東軍は、13年秋の関東学生リーグ優勝校明治大が単独で代表となり、一方の西軍は大阪、神戸、岡山の社会人が中心であった。

第2回は14年11月19日、神宮競技場で行われ、両軍とも初の選抜チームを編成（表紙写真参照）した。

西軍は、後年在日ドイツ選抜軍などでその主力として活躍する神戸在住のシュミツト、ションボーン氏ら外人選手を加えた異色の陣容であった。

第3回は16年1月19日再び南甲子園運動場で行われたが、この試合はNHK大阪によって初のラジオ中継としてとりあげられた。

また、ハーフタイムに平沼亮三会長が「スポーツと新体制」という講演を行った。

その講演のなかで、当時の橋田文相の学生スポーツに関する意見に平沼会長が反駁した一節は内外から多くの注目を集めた。その内容は25年余をすぎた今日でも傾聴すべきものがあり、平沼初代会長の生前を偲びつつ、要旨を収録してみたい。

平沼会長講演抜すい『（前略）橋田文相の年頭に際して学生に対する指標として訓示中にあった学生は学生らしくスポーツをやれということは私もまったく同感であり、また学生スポーツが興行的であってはいけないということも無論その通りである。しかし娯楽的であってはいけないということはどうかと思う。学生スポーツにも広い意味での娯楽味が含まれて然るべきだと思う。学生だからとて体育運動競技をやらせる以上そこに多少の娯楽味がなければ乾燥無味なものとなり興味を持たなくなると思うのである。それから文相は学生の中から一人のオリンピック選手が出なくてもよい、学生の

レコードが一般人に劣つても恥でないといわれたがこれも学業に支障ない限りまた身体を害しない程度において学生が運動競技に立派な成績を挙げてオリンピック選手にもなり、また普通一般人以上の競技成績を挙げるならばこれは決して名誉でないことはないと思う。また学生に運動競技をやらせる以上は勝つという事が目的の大きな部分でもある。対校試合をやることは単に競技の上達を期するばかりでなく、これによつて団体精神とか犠牲的精神とか、愛校心というものの、涵養に如何に役立つか知れないと思う。学生は学生らしくすべきだからといつて極端にさういうことを禁じてしまつて単に体位の向上を計るということで体操のやうなものばかりやらせるならば精神的訓練の効果というものは殆んどなくなつてしまつて乾燥無味に陥つてしまい、同時に学生の心が運動競技から遠去かるようになると思う。

スポーツは、そんな味のないものでは決してないと思うのである……（後略）』

なお、この第3回に出場したチームは東軍は日体現役とその若手OB、西軍は前回同よう大阪周辺の社会人であった。

第4回は戦火がそろそろ激しくなった18年1月17日神宮競技場で行われた。

東軍は現協会理事長の荒川清美氏ら関東学生からの選抜、西軍は筆者が監督をつとめ、関東学生の若手OBが久々に加り、これまでにない布陣となって初勝利の希望を託したが、やはり、東軍のスピーディなチームプレーに一日の長があり結局、戦前行われた4回の東西対抗は東軍の4連勝に終わったのである。（筆者は日本協会副員長）

—戦前の東西対抗スコア—

▽第1回	東	13—2	西
▽第2回	東	16—5	西
▽第3回	東	13—0	西
▽第4回	東	10—3	西

戦前の動き（思い出の試合）

西　敏郎

日本ハンドボール協会創立三十周年記念誌に球史をひもどくとして戦前戦中の協会事業に就いて書く事になりましたが割当てられた枚数も少く協会の事業を年代順に書くのは他の方に御任せ致し二・三思い出に残る試合等書いてみたいと思います。協会の事業と云っても昭和十五年開催の東京オリンピックにハンドボールが新種目として正式に決定したので昭和十三年春関東学連が出来リーグ戦を行う事になったのです。確か第一回に優勝した文理大（教育大）は全員ラグビー部の者で明大もバスケット部の者でした。皆オリンピック出場目当の鞍替でした。純粋にハンドボール部を構成したのは日体、慶応で早稲田、法政は夫々に肥後君・林君を通じ部を作り、戸山ケ原或は法政の元住吉のグランドへ私達慶応の者が行って練習を指導したのです。最初はラグビーバスケットの大型選手に勝てなかった我々ハンドボール選手も日体選手の急速な進歩で日体が主導権を握り昭和十五年迄其の優位は続きました。昭和十五年開催予定の東京オリンピックは六月中止決定となり代りに東亜大会を行う事になりました。我々二十五名程がオリンピック候補として酒井氏の下に日吉で合宿して居りまして、そのまま東亜大会日本代表選手となる事になりましたが当時の慶応の主将だった林君と私とで協会に辞退を申入れリーグ戦の優勝校単独チームを代表にする様に話を付けました。結果は全勝同志の日体と慶応の決戦となり早大東伏見グランドで前半0—0後半終了寸前山田計君のシュート決まり1—0にて日体が代表に決りました。今でもあの山田君のゴール左下のシュートは目に浮びます。我々はあまり口惜しいので早稲田と滞同して朝鮮満洲遠征を七月から八月にかけて行いました。翌昭和十六年春のリーグ戦では宿敵日体を破り翌日早大戦が有るのに主将林君の家で翌朝迄選手が飲み明かし楽勝する筈だった早大に苦杯を喫し泣くに泣けない三者同率一位となってしまつたのです。今では一寸考へられない不祥事です。以後私が卒業する迄不敗を続けたわけですが、戦後になって慶応は戦前のような華々しい力を示さなくなってしまいましたが印象に残る試合としては日体大が名手浅野を擁して全盛を極めている時明日慶応との試合という晩十時頃日体大の合宿所を訪ね荒川監督に頼んで全員を起こさせ「明日の対慶大戦には全力を振ってやって呉れ慶大も全力を振って必ず勝っから」と申入れ前半7—1でリードされ後半7—0計8—7で優勝校日体大を最下位チーム慶大が破った試合は最後の得点者増田君また荒川君共々今尚時々話題になって居ります。苦しかった辛かった試合ほど何時迄も思い出として残るものです。（筆者は全日本学会長、日本協会副会長）

国際連盟復帰

外山准二

終戦後の我が国スポーツ界の復活は、当時占領軍最高司令官マッカーサー元師によって、好意的に推進された。彼は過去においてアメリカのオリンピック選手団団長として参加したことがある位のスポーツマンであり、スポーツ愛好者であったからだ。

そのため終戦後各競技団体は、それぞれの手づるとマッカーサー元師の助言によって各国際連盟復帰の手続をはじめ、水泳連盟が一番はじめに復帰が実現したように記憶している。

その結果、体協の評議員会の席上で、東体協会長（当時）より、水泳連盟が行った復帰手続を参考にして、未だ復帰していない競技団体も、早く復帰を実現するようにとの話があり、私達も早速書類作成にとりかかり、理事会の決定をまって、一九四八年（昭和二十三年）七月十五日附の第一回目の復帰願いの文書を、当時スェーデンにあった国際ハンドボール連盟（IHF）に対し送付した。戦前ベルリンにあったIHFは、当時スェーデンのストックホルムへ移っていた。書類はIHF名誉主事カール・F・ボルグ氏宛であった。

何の音沙汰がないので、一九四九年四月九日附書類を再提出した。この時は、当時のIOC委員であり、一九四二年から終戦の一九四五年まで日本ハンドボール協会々長であった永井松三氏が、ローマのIOC総会に出席されるを機として、永井氏に寄托したのであった。しかし、結果的には永井氏は帰路病にたおれ、ハワイで数ケ月療養されたが、帰国後も暫く面会謝絶の状態で、その成果は知る

すべもなかった。

第三回目は一九五〇年五月一日附書類が、コペンハーゲンのIOC総会に、病床にある永井IOC委員の代りにオブザーバーとして出席される東体協会長に寄託された。

五月十四日からIOC総会に出席のため五月二日に東会長の出席が決まるや、各競技団体はIOC総会に前後して開催される各国際競技連盟会長との懇談会に東会長から国際連盟復帰の書類を直接手渡していただくのがよかろうとのことで、私達も四月二十二日開催の理事会に、東会長の出席をもとめ、式場会長から、正式にお願い申上げ、提出書類の内容について打合せを行った。その後数回理事会で文案をねり、五月一日体協で開催された東会長壮行会の席上、式場会長より手交された。

この書類の内容は、前二回のものと殆んど同一であるが、特に左記のことを強調しておいた。

㈠ 日本では一九三六年版ルールを採用している。

㈡ 協会の設立以後の沿革、行事内容等の現況の説明。

㈢ 過去二回にわたって復帰の書類を提出したが、何ら返事がもらえなかった。

㈣ 現行のルール、指導書、アジア地区の普及状況、公認球、一九五二年ヘルシンキオリンピック大会に参加出来るのかどうか等について記載し、返事をくれるより書添えたものであった。

東会長は同年六月二日帰国され私達の書類は確かにボルグ氏に手交し、お願いして来たとのことであった。

遂に待望のボルグ氏より、一九五〇年六月九日附の正式書面がとどいた。

それによると

㈠ 日本のIHFへの復帰の件は一九五一年九月ウィーンで開かれるIHF総会で審議される。

㈡ 最近のルールブックを別便で送る。

㈢ 現在のIHF役員名簿並びに加盟国名簿（一八ケ国）をお知せする。

㈣ 現在アルゼンチン、トルコ、西独からも復帰願いが提出されている。

㈤ 一九五二年ヘルシンキオリンピックは前回のロンドン大会と同じ規模で行われるので参加出来ない。併し一九五二年の世界選手権大会の決勝戦をデモンストレーションゲームとして入れたい。

以上のような内容のものであり、国際情報を知ることの喜びと、復帰問題の見通しが得られ、早速にお骨折りいただいた東会長に報告し共に喜んでいただいた。

同年七月三十日にはボルグ氏より、ルールブック（一九四七年版）がとどけられた。

早速理事会で翻訳を決定し、出来れば新ルールを全面採用の通告を、九月のウィーンの総会までにしたかったが、結局間に合わなかった。しかし八月中に翻訳を完成し、九月二、三日東京駒沢、九、十日大阪藤井寺で全国指導者諸君約三〇〇名を二会場に集め、説明講習会を行い。我が国として九月十日以後の公式ゲームは一九四七年度ルールにより行うことを決定し、同時にIHFへ正式に通知した。

話はさかのぼるが、東会長がコペンハーゲンでボルグ氏と会った際に、日本では一九四七年度ルールが実施されているかどうかが復帰の一つのポイントになるとのことで、九月の総会を目標にしたが、次の総会まで保留されたわけだ。

一方六月二十八日に欧米社会保障制度視察団の一員として渡欧される川崎秀二氏（衆議院議員）に対し、式場会長より、ストックホルムでボルグ氏に会って、復帰の件について話し合いをお願いしたところ、同氏の承諾を得た。六月二十八日の出発で、書類の準備も間に合わなかったので、前回提出書類を骨子に作成し、羽田空港でお渡しをし、機中で読んでいただくようお願いした次第である。

米国を先にまわった同氏は、七月二十七日日本事務所で開催された日瑞スポーツ懇談会でIHFのボルグ氏に会い、我国ハンドボール界の現状を説明し、加盟金一〇〇スイスフラン（二五$）をお立替え頂いて納入した結果、昨年（一九五一年）のウィーン総会の経緯（一九四七年度ルールを採用し、且つ加盟金を支払うならば、復帰加盟を認めようとの留保条件）について、日本に対する疑点が氷解したので、ボルグ氏は直ちに加盟の手続をとって頂いた。この懇談会でこの話し合いがついたので、一同は日本ハンドボール協会のため特に乾杯をして祝ってくれたとのことであった。

その結果は直ちに我国に報導され、九月六日の新聞紙上には〝ハンドボール国際連盟へ復帰〟と一斉に発表された。

尚川崎代議士が帰国され、十月二十三日夜お忙しい同氏より、くわしく当時のお話を伺うことが出来た。

席上お立替へいただいた加盟金二五$（九、〇〇〇円）をボルグ氏の受領書（一九五一・八・二十八附）ひきかえにお支払いをした。

㈠ 一九五〇年九月ウィーン総会では、西独、ユーゴの加盟が決定し、日本、アルゼンチンはルール、加盟金の件で留保された。

㈡ 一九五一年十月パリ総会で、日本加盟の件が審議されよう。（この総会は一九五二年開催の世界選手権大会実施要領を決定するための臨時総会のようだ。）

㈢ 一九四七年度ルールの指導書は出来ていないが、基本的には同一なので一九三六年度のものを差上げる。（同指導書は十一月下旬に来日のスェーデンサッカーティームの監督リーベルグ氏のもので、同氏は昨年までエルグ氏に代つてIHFの名誉会計をしているとのことであり、同氏の来日を機として、一日駒沢で指導を受けることにした。これはサッカー協会の諒解も得て十二月三日実現された。）

以上のように、日本の復帰の件はいよいよすべり出し、時間の問題となり、川崎代議士の話し合いの成果は、前回の東体協会長の御努力と共に、特筆されてよかろう。

その結果一九五一年十一月七日附で、IHF会長バウマン、名誉主事ワグナー両氏連名の正式書面が到着した。それによると、

㈠、日本加盟の件は一九五一年十月二十六日―二十八日パリの総会で、満場一致で仮メンバーに加えることを決定した。正式加盟は次の総会で行はれよう。

㈡ IHFは日本の仮加盟を喜ぶと共に、次のザールブリユッケン

における年次総会に日本の代表者の出席を心から期待する。

㈢　パリ総会議事録、IHF役員名簿並びに加盟国一覧表を送ります。

以上の正式通告に接した。これにより私達はザールブリユッケン総会とその前に行はれる選手権大会視察のため役員派遣を決定し、式場会長、外山理事長二名の派遣を決定した。

ついで一九五二年三月十八日にはバウマン会長名で、

㈠　一九五二年六月十四日スイスマクリンゲンで理事会

㈡　同年六月八日—十五日スイスで行はれる世界選手権大会。

㈢　同年九月十九、二十日ザールブリユッケンで開催の年次総会

以上に対する正式招請状が、式場会長と、私宛に到着し、早速両名の渡欧準備に入った。と同時に、三日二十日附でドイツハンドボール連盟から、六日に渡欧の式場会長と私に対し、同連盟として歓迎する旨のダウメ会長の書類も刻着した。

その結果、式場会長と私は六月五日羽田を出発し、スイスの世界選手権大会を視察し、六月十四日のマクリンゲンのIHF理事会に私のみ出席し、総会に日本加盟の件を含む総会議題の確認が行はれた。

私共は、六月の世界選手権大会終了後、ドイツ国内のハンドボール事情を視察し、七月からのヘルシンキオリンピックに参加して九月下旬帰国した。

ザールブリユッケン総会に式場会長の出席を予定して私は一足先に帰国したが、式場会長もロンドンで所要のため、総会は欠席したが、九月二十日附バウマン会長、ワグナー名誉主事両氏サインの正式加盟通告の書類が総会議事録、メンバー一覧表と共に到着しここに一九四八年より準備した日本IHF加盟復帰が実現されたのであった。

以上正式加盟が実現されるまで骨子を主としてIHFと日本協会との往復文書を中心に書いて見たが、それぞれの時、いろいろな方々の言いつくせない御好意と、御尽力があり予定の枚数をはるかにこえてしまったが、私としては、意に満たないところが多いが、一応以上で私の責をおえたいと思う。

機会あれば、その時々のエピソート等についても、記憶のうすれない中に書いて見たいと思ってえる。（筆者は元日本協会理事長、東京都協会副会長）

西独チーム招待

的場益雄

国際試合において日本チームの実力を試してみたいということは、ハンドボール愛好者の夢であり、長い間の念願であった。しかし、世界選手権に出場するためには先だつものは金である。その遠征費が一人六十万円以上入用の当時では、到底望み薄の話であった。

そこで遠征に代るものとして外国チームを日本に招待することを検討した。小人数の実力向上をはかる前に国際的なよい試合を日本各地で観せることが先決であると判断したわけである。全国理事会と評議員会で慎重に計り、結局西独チームを招待することを決定したものの、その資金の調達は、並大底なことではなかった。また一面無暴な計画でもあった。すなわち一千数百万円の資金は、新聞社等の強力なバックアップがなければ実現しない。ハンドボールでは、残念ながら伝統も浅く、先輩も少ないから、サッカー・ラグビー等のように容易にスポンサーがついてくれない。「今にみていろ」と自分の心に云いきかせては必死に資金集めに足を棒にして会社を廻った。

結局資金面では、某新聞社の三〇〇万の融資（借金）をもとに各大会場の協力を理事各位の十五万円以上の広告料責任分担ということでスタートしてしまった。これが実現したのは一九五六年（昭和三十一）の九月である。

招待した西独チームは、世界最強のチームであった。すなわち一九五五年以降国際試合三一勝〇敗の成績を誇っていた。選手団は、ドイツの協会長、団長ファイク以下十八名であった。選手は、身長、平均一八四cm、体重八三kg、一〇〇米走力十一秒六というすばらしい体格と体力を持主であった。

試合は、東京、大阪の国際試合と横浜、名古屋、富山、八幡、宇部、甲府の六会場で行った。日本はこの八つの試合で残念ながら一度も西独チームから勝星をえることができなかった。当時は十一人制であったが、いわゆる本場の技術を目のあたり見ることができたことはハンドボール愛好者にとつて言葉で表わすことのできないほどの感激であった。また各会場何れも数万を越える観衆の盛会ぶりであった。ことに若い青少年に国際的なゲームを視てもらった、そのことが協会として何より収穫であった。

選手団に同行した思い出をたどってみよう。この選手団を迎えてから、はや十年の年月が流れた。まだ二三日前の出来事のような感じがする。青く空が透んだ日に長身の選手団が手をふつて飛行機のタラップから降りて来た。旧知の友の再来の様に思えた。てんでに大きなバッグを持って我々の前におめみえしたのであるから大変な人気であった。荷物があまり大きいので宿舎で尋ねたところモーニングまで持参したとのこと。日本からの手紙に高松宮殿下のことを書いていたので、「プリンスにおめにかかる」ためにわざわざ用意してきたとのことであった。その礼儀正しさに感心した。又終戦後すでに儀式など平服でも差支えないという日本の現状の有難さを痛感したものである。失敗はまだあった。日本国内の旅行で不用の荷物は宿舎に置いて行けばよいと思い、パスポートとモーニングを宿舎の金庫に保管するよう奨めた。ところが、顔色を変えて団長と監督が我々につめよつた。このことは自分が外国旅行に関する認識の浅かったこと。それに言葉が互に通じないため余分の誤解があったわけである。試合はなるべく全国各地で行うことを計画した。そのため試合日程がつかず苦労した。寝台券を一括確保することが当時として極めて困難であった。そこで国鉄の業務命令により特二を一台貸切った。そのため高山線（名古屋—富山間）にはじめて特二を乗入れたわけである。富山の旅館では畳の日本間と浴衣に選手は子供のようにはしやぎまわった。富山会場は、雨中の試合であったがバン傘をことのほか珍しがった。このような日本協会の役員とドイツ選手との心のふれあいはじよじように親しさを増した。しかし、真に融けあったのは奈良であった

と思う。奈良は試合会場ではなかったが、奈良の協会のはからいで天理の中山管長に心からの歓迎をうけた。選手団を迎えるため新調のお風呂が用意されていた。桧の香と同じように人間の真心をドイツ選手も十分吸みとったことと思う。夕食のスキヤキ会が又楽しかった。日本の民謡も又おどりも自然ととび出した。日本側は一人一人お次の番だよ…と余興が移ったが、ドイツ側は合唱が多かった。二部、三部と合唱がすぐ揃って出た。声量もあり、音ていもしつかりして素人離れのうまさであった。今は亡き中山管長も、かってドイツ留学中に覚えた歌を原語で歌いヤンヤのかっさいを浴びた。ドイツ選手と日本人との温い心の交流は、この時にはじめて強力になったと信じている。（筆者は日本協会常務理事）

七人制一本化

若崎　重富

秋の澄みきった青空に、ボールが空高く舞う。真夏の焼きつく炎天下に、滝のような汗を流しながらボールを追う。雨の日のぬかるみのグランドに、足を取られながら懸命に全力をふり絞って、シュートを打つ。広いグランドで、大きなパス、鋭いダッシュ、豪快なシュート、これが、十一人制ハンドボールの醍醐味であった。しかし、この競技の欠点は、中盤戦の少ないことであって、縦百十米、横六十五米のグランドの内で、実際に活用されて決め手となる所はゴールから三十米位の地点であった。したがって、競技場の中央約五十米位の場所は、殆んど、使用されない状態であった。いかにも、間の抜けた感じを与えていたようである。スポーツを愛好する人々の批判の目は、つねに、この点を指摘していたのである。

この批判には、やはり、国際連盟も苦慮していたと見えて、オフサイドラインを設けて、競技の単調化を防いだり、攻撃も防禦も六人以内と人数の制限をするなど、度々、ルールの改正を行なってきた。それに加えて、スポーツを好む北欧の人々が厳寒の冬季に、室内でハンドボールを行なうことを欲求したのは、当然であったと思う。こうして、室内ハンドボール（七人制ハンドボール）が誕生をしたのである。

日本では、一九五〇年頃から、大阪を中心とした関西地方で、ぼつぼつ行なわれだしていた。

一九五二年（昭和二十七年）、西日本選手権大会が大阪で開かれたのが室内ハンドボールの最初の公式戦となった。

その後、各地で講習会や研究会が開かれ次第に普及して、一九五七年（昭和二十九年）に、第一回全日本室内ハンドボール選手権大会が大阪で開催されたが、なんといっても、実際には、ヨーロッパの本場の競技を見た者は一人もないし、十一人制の競技者が、二ケ月足らずの間に、この競技に切り替えなければならないことから、技術面の転換をする余裕もなく競技をするものだから、その混乱は想像されると思う。ところが、見ている人にとっては、スピード感を身近かに感じ、スリルがあること、いままでの十一人制の課題であった中盤戦の空虚さも取り除かれたので、おもしろく、興味を引いた。



（写真は初の全日本総合室内男子決勝日体大—大阪ク戦。近代スポーツのあらゆる要素をふくんだ室内（7人制）ハンドボールの出現は大きな反響を呼んだ＝昭和29年12月、大阪府立体育会館）

ここに至って、一九五六年（昭和三十一年）の全国理事会で、十一人制廃止論・七人制採用の議論となり、とりあえず一九五七年（昭和三十二年）から女子と中学校には七人制を採用することに決定を見た。

この処置は適切なものとして歓迎された。従って、それ以後の大会は、同一会場でも、男子は十一人制を行ない。女子の競技は七人制と二本立てになった。同じ会場で男子が十一人制を行なっている隣りで、女子の七人制が行なわれていると、男子の競技場は観衆もまばらで、一向に盛り上りがない。それとは対照的に、女子の競技場の周囲には、黒山の観衆が詰めかけ競技中の、インターセプトの場面でどっと湧くかと思うと、最後のシュートを逸した瞬間には、大きなため息が競技場に流れてくる。このあたりから、十一人制の衰退が決定づけられた。スポーツは、それを行なう人が楽しみ、その人が満足すればよいのだが、しかし、大衆の関心と、興味を引くことが、そのスポーツの発展に大きな影響を与えることは歴史の示すところである。

七人制一本化への推進力となったのは、一九六一年（昭和三十六年）二月、西ドイツのドルトムントで開催された世界男子七人制ハンドボール選手権大会に、初めての海外遠征と、その翌年の一九六二年（昭和三十七年）六月にルーマニアのブカレストに於て開かれた世界女子七人制ハンドボール選手権大会に初参加であった。いずれも大会終了後、ヨーロッパ各国と親善試合を行なって、世界の情勢を日本に持ち帰った。

ここで再度、十一人制を全面的に廃止するか、依然七人制と二本立で行くかの岐路にたたされたのであるが、古い感傷にとらわれて十一人制を存続させることは、日本にとっては得策でないとの決断がなされた。ここにおいて、日本ハンドボール協会は、一九六三年（昭和三十八年）から十一人制を廃止し、七人制一本化を確立したのである。七人制を全面的に採用してから日はまだ浅い、一九六四年（昭和三十九年）二月に、男子七人制世界選手権大会に参加し、ノルウェーに一勝した。これは、公式戦で外国を破った最初であった。ここにおいて、ますます、七人制一本化の政策に自身を深め、将来の明るい希望を見い出すことができたのである。（筆者は日本協会常務理事）

国際舞台への進出（欧州）

編集部

競技団体の目的は大きく二つに分けられると思う。

競技の普及と、技術水準の向上である。

ハンドボール界の場合、最初の20年間は普及に明けくれたといっても過言になるまい。

27年に念願のIHF（国際ハンドボール連盟）復帰がなった日本協会は普及と併行して国際舞台への進出を積極的に企ることになり、ヨーロッパ一流チームの招へいと、世界選手権参加をその目標とした。

ヨーロッパチームの招へいは別掲特集（本誌30・31頁）のように31年西ドイツ、35年ルーマニアと軌道にのったが、世界選手権への出場は総額一千万円をこす予算が必要とあってなかなか実現されなかった。

しかし、31年に来日した西ドイツ協会との話し合いで、第5回世界男子11人制選手権の開かれる34年に西ドイツが日本チームを招待する話がまとまり、西ドイツを経て日本は同大会（ウィーンで開催）へ初参加が決まった。

世界選手権はもとより、ヨーロッパに遠征するのも初めてのこと、球界はこの朗報に湧き、特にプレイヤーを大きく刺激した。準備はとどこおりなく進み、34年2月日本協会は史上初の欧州遠征チーム役員5、選手15、研究視察員1を発表、その成果が大いに期待された。

ところが、4月になって西ドイツ協会から「日本チームの旅費（半額）を負担する約束が、自国の世界選手権参加などで履行できなくなった。転戦を予定したスイス、ユーゴなども日本チームの費用分担の協力を断わって来た」との理由で招待延期が申し入れられた。

日本協会では、選手権の二ヶ月前のこの情勢変化に、国内での経費の調達は難しいとみて、遠征を断念するという遺憾な結果になった。

遠征に胸おどらせた選手たちの落たんぶりはひどく〝まぼろしの欧州遠征軍〟などと担当記者の間でも同情が集った。発表された遠征メンバーは次のようなものであった。

▽団長　式場隆三郎（日本協会長）
▽副団長　出口林次郎（同副会長）
▽監督　高嶋冽（同理事長）▽コーチ松本重雄（東教大出）▽マネジャー　加藤祐策（東大出）▽研究視察員　徳永陸繁（日本協会審判委員長）
▽選手GK　北川勇喜（日体大出）今野邦彦（芝浦工大出）
▽バックス　井薫（中央大）高森孝一（芝浦工大出）、堀勤（日体大出）、斉藤一（同）、深江幸次郎（関学）、東嘉伸（日体大）
▽FW　近藤金博（芝浦工大出）高村武彦（関西大）、浅野崇（明治大）、竹野奉昭（日体大）、山田幸男（芝浦工大）、村中明郎（関学）、浅野克彦（日体大出）

この坐折から2年後、西ドイツで開かれる第4回世界男子7人制選手権への出場が確定し、36年2月17日勇躍ヨーロッパへ向け羽田をとび立った。協会創立後23年目に記した壮挙であった。

一行はフランス転戦後、世界選手権に臨み準々決勝リーグC組に出場

チェコ　38（23−5, 15−5）10　日本
ルーマニア　29（15−4, 14−7）11　日本

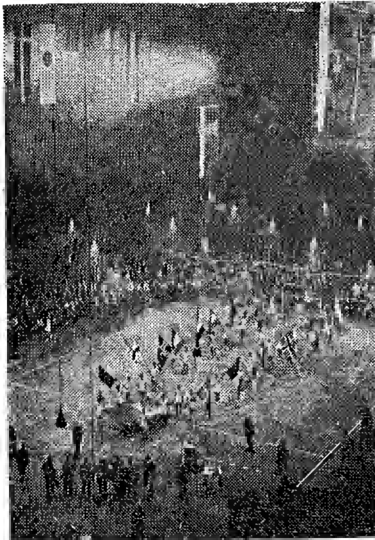
という成績で準決勝リーグ（ベストエイト）には進めなかった。

選手権後、西ドイツ、チェコ、フランス、イスラエルを廻り、初の遠征総成績は25戦13勝10敗2分で2敗したが悲観はしていない。

高嶋監督は「世界選手権初参加で2敗したが悲観はしていない。日本人の特徴を研究していけば今後は対等に戦える。欧州のナショナルチームはプロ化しているが底辺のチームは強くない」とその印象を語った。遠征メンバー次の通り、

▽団長　式場隆三郎（日本協会々長）▽監督　高嶋冽（同理事長）▽コーチ　松本重雄（教大出）▽マネジャー　中沢重夫（芝浦工大出）▽研究員　荒川清美（日体大出）▽渉外役員　境井秀三（東大出）▽選手ＧＫ　今野邦彦（大崎電気）福本弘（芝浦工大）
▽ＦＰ　近藤金博（芝浦工大出＝主将）、深江幸次郎（関学出＝副主将）、尾藤嘉郎（芝浦工大）、村上善英（同）、田口侑義（同）、山田幸男（同）、佐藤宏輔（同）、服部和記（芝浦工大出）、竹野奉昭（大崎電気）、宮原藤支男（同）、井上祐人（日体大）、高村武彦（関西大）

　戦前、戦後ともその立ちあがりにおいて男子にかなりの遅れをとった日本の女子界は、昭和32年から公式試合七人制一本化という英断が効を奏して、シーズンごとにレベルをあげ、実業団球界の発達などから国際的にもかなりのレベルにあると想像された。


第４回世界男子７人制選手権開会式（西ドイツ）

　与望をになって全日本女子が、第2回世界女子7人制選手権のために日本を発ったのは37年6月であった。

　選手15人は実業団のトップクラス4チームから選抜された最強の布陣。西ドイツを転戦後、大会地ルーマニアに入り第一次リーグB組に出場

ハンガリー　17（11－5、6－3）8　日本
デンマーク　17（7－4、5－3）7　日本

と2敗を喫し、789位決定リーグに出場

ポーランド　16（7－5、9－5）10　日本
西ドイツ　15（7－1、8－5）6　日本

となり、結局9位に終わった。


世界女子７人制選手権

　しかし、初の国際試合、それも遠征というハンディを考えれば、世界選手権の4敗をふくみ16戦7勝8敗1分の成績は上々といえ、次の機会での躍進を約束させた。遠征メンバー次の通り
▽団長　出口林次郎（日本協会副会長）▽監督　高嶋冽（同理事長）▽ヘッドコーチ　北川浩（日体大出）▽コーチ　宮原俊隆（大崎電気）▽マネジャー　塩川安賢（レナウン工業）▽研究員　亀岡成昌（愛知紡）
▽選手ＧＫ　山田帆浪（レナウン工業＝副主将）、篠崎益野（愛知紡）、古谷芳枝（大崎電気）
▽ＦＰ　沢田勝子（愛知紡＝主将）、磯部昌子（同）、青木悠子（同）、山崎鮭子（同）、塚原米子（同）、宇井敬子（大崎電気）、西村八千代（大洋デパート）、深津久仁子（大崎電気）、田村うた子（同）、黒川泰恵（同）、竹本千恵子（レナウン工業）、太田美紀子（同）

　全日本女子が帰国した5ヶ月後こんどは全日本学生選抜軍がスウェーデンで開かれる第1回世界学生選手権のため渡欧した。

　将来はユニバシアードの正式種目に加わろうという目的のこの大会は世界の若いハンドボールマンの交歓の場でもあった。準決勝リーグA組に参加した日本は

スウェーデン　26（13－3、13－12）15　日本
デンマーク　34（18－5、16－6）11　日本
スペイン　31（17－6、14－3）9　日本

の成績だった。一行の総成績は19戦6勝13敗。渡辺監督は「日本は学生で編成していたが、他国は2年前の卒業生まで加えてもよいという規則を活用して平均25才の技心ともに円熟したチームで臨んでいた。日本は攻撃力では劣らず、守りをどうして早く固めるかに課題をおいて時間をかければ遠からず世界のレベルに追いつくだろう」と話した。

　なお、日本は第1回以後この大会に出場していない。遠征メンバーは次の通り。
▽団長　棚橋義眸（全日本学生連盟会長）▽監督　渡辺一己（関学）

出）▽コーチ　勝繁夫（立教大出）▽選手GK　谷義信（芝浦工大＝主将）、奥本義昭（同志社大）▽FP　安達精太（立教）、中根敏男（同）、坂井弘元（中央）、浅野和郎（京大）、諏訪紀一（慶応）、藤原侑（日体大）、荘林康次（神戸大）、大高恒貴（甲南大）、村田陽之（関学）、市原則之（広島商科大）、田口敬蔵（法政）、森末和祐（関学）、与縄義昭（立教）

全日本男子2回目の世界選手権出場は39年2月であった。

38年から男子も7人制一本化を決め、一般、学生チームも急カーブを描いて上昇、トップレベルも引きあげられた。36年の経験もあり宿願のベストエイト入りが期待された。フランス転戦後チェコに入った日本は準決勝リーグD組に出場、第1戦でノルウェーを破り、世界選手権で初の1勝をあげる記念すべき試合とした。

日本 18（9－4、9－10）14 ノルウェー

得	【ノルウェー】		【日本】	得
0	ロルフ	GK	福本	0
0	アルヌレフ	FP	竹野	9
2	キール		東	1
2	エジル		宮原藤	0
4	トライクベ		田口	0
2	ペル		北村	5
2	クヌト		住広	3
1	カールジョグ			
1	アーリドル			
0	エリク			
14	（5）	7MT	（2）	18

勢いにのった第2戦以後の健斗が待たれたのだが、

ソビエト 40（23－6、17－4）10 日本

ルーマニア 36（16－7、20－5）12 日本

となり、またしても難関を突破することができなかった。しかし、緒戦の1勝は将来に大きな希望を与えるとともに竹野奉昭選手が準決勝リーグの最優秀選手に選ばれたのも明かるいニュースであった。

遠征の総成績は17戦9勝8敗、遠征チームのメンバーは次の通りだった。

▽団長　渡辺和美（東京都協会長）▽監督　高嶋洌（日本協会理事長）▽マネジャー　片瀬喜代次（日体大出）▽総務役員及報道担当鴛尾武治（共同通信運動部）▽コーチ兼選手（GK）今野邦彦（大崎電気）▽選手GK　福本弘（大崎電気）、尾形譲（立教）▽FP　東嘉伸（日体大出）、宮原藤支男（大崎電気）、竹野泰昭（同）、田口侑義（同）、北村尚英（同）、住広尚三（芝浦工大）、新繁樹（同）、井上素行（大崎電気）、宮原宏（同）、金田純男（同）、餅原正修（同）

明けて40年、女子が2回目の世界選手権出場をはたした。大会はまず10月にプラハでチェコと予選ラウンド（2試合）を行うことになり、羽田からチェコに直行した。結果は

第1戦　チェコ 17－9 日本

第2戦　チェコ 17－5 日本

と連敗、準決勝リーグ（本大会）への出場権を失ったのだが、大会直前になってソビエトが棄権、繰りあげ出場を要請されたオランダも辞退したため、チェコ戦にひきつづき滞欧中の日本が代りに出場するという幸運となった。

その結果、11月7日から西ドイツで開かれた準決勝リーグA組に参加し

西ドイツ 15（8－1、7－6）7 日本

デンマーク 10（5－4、5－5）9 日本

ユーゴ 9（5－3、4－2）5 日本

と借敗、ポーランドと7位決定戦を行い

日本 6（4－1、2－4）5 ポーランド

で第7位となった。ポーランド戦の勝利は、日本女子の世界選手権における初の一勝であった。一行はそのあと各地を転戦し総成績23戦17勝5敗1分。なかでも西ドイツ、フランスのナショナルチームを破ったことは特筆され、世界上位進出への大きな足がかりをつかんで帰国した。遠征メンバー次の通り。

▽団長兼監督　高嶋洌（日本協会理事長）▽コーチ　宮原俊隆（大崎電気）▽マネジャー　岩崎美栄子（全日本実業団連盟）▽選手GK　古谷芳枝（大崎電気）、川崎幸子（同）▽FP　宇井敬子（大崎電気＝主将）、笠原喜代子（同）、黒川泰恵（同）、早川清美（同）、鈴木功子（同）、久蓮松美智子（大洋デパート）、高山やよい（同）、永井昭子（大崎電気）、新保いく子（大洋デパート）、加藤井子（大崎電気）、伊藤せつ子（同）

ミュンヘン・オリンピック実施決定後、初の世界男子7人制選手権は42年1月スウェーデンで開かれ日本は3回目の出場。

B組に入った日本は

ハンガリー 30（14－12、16－13）25 日本

西ドイツ 38（17－12、21－15）27 日本

日本 21（11－7、10－9）16 ノルウェー

と、前回（39年）同ようノルウェーから1勝をあげたものの、善戦の域にとどまり、決勝トーナメントを目前にして敗退した。しかし若い選手を主力とした日本の攻撃は本場関係者の絶さんをあび、かってない成果と自信をもたらした。遠征総成績は17戦10勝7敗。

遠征メンバーは次のとおり。

▽団長　馬場太郎（日本協会副会長）▽監督　村田弘（日体大出）▽コーチ　勝繁夫（立教大出）、

稲石三二（日体大出）▽コーチ兼マネジャー　中沢重夫（芝浦工大出）▽選手GK尾形譲（立教大）、竹下洋一（中央大）▽FP　青木義男（大阪イーグルス＝主将）、江名英彦（立教大出）北井晴次（埼玉教員団）、吉金勇（常盤工業）、近藤信行（芝浦工大）、関根邦夫（同）、飯端寿昭（関学）、近藤克彦（芝浦工大）、山田透（同）、木野実（立教大）、北村文雄（同）、飯田誠行（同志社大）、大西武三（東京教大）

このようにして、日本は本場ヨーロッパにこれまで6回の選手を送りこんでいるが、遠征のたびに多大の成果を持ち帰り、日本の技術向上に足跡を残している。

すでに45年フランスで行われる第7回世界男子7人制選手権の出場申しこみが〆切られ、日本もミュンヘン・オリンピック出場をかけたこの大会へのエントリーを終えている。

これまでの世界選手権、あるいはヨーロッパ転戦での成績は、星のうえからみれば必しもよいとはいえない（男子78戦38勝38敗2分、女子39戦24勝13敗2分）。特に世界選手権での男子2勝6敗（世界学生を除く）、女子1勝9敗（予選2敗を含む）の成績は〝世界の壁〟の厚いことをはっきり示している。

しかし、来るべき第7回世界男子7人制、ミュンヘン・オリンピックには、必ずや日本は上位に進出し、これまでの遠征の経験を立派に活かしてくれるであろう。

苦斗の歴史は、栄光の日到来を予言するものにほかならないのである……。

国際舞台への進出（アジア）

編集部

別提のように、日本のヨーロッパへの進出はこれまで6回を数えられているが、それに比べて、同地域であるアジア諸国との交流は少い。

韓国に対しては遠征2回（日体大＝36年、全日本高校＝37年）。招待2回（学生選抜＝38年6月、高校選抜＝38年11月）。

中共に対しては遠征（40年）と招待（41年）が各1回あるだけである。（注・沖縄（琉球政府）球界との交流の歴史は、現在同協会は日本協会の加盟団体であり省略。イスラエルはアジア競技連盟（AGF）加盟国だがハンドボールの場合はヨーロッパ地区所属のため省略。同国とはこれまで遠征の途次に立ち寄った全日本男子が5戦4勝1敗）

このうち、韓国とは、古い結びつきがあるにもかかわらず、韓国の国内事情のため、再三の計画が延期または中止となっているのは惜しまれよう。

中共は、日本にとってはあなどりがたい存在で、積極的な交流が望まれているが、これまた中共側の国内事情のため遠征も、招待も難しくなっている。

昨冬開かれた日本協会技術委員会席上、43年または44年に日本で「日・韓・中三国対抗」を開いてはという意見が出されたというがオリンピックを控えてこれは名案だ。

ミュンヘンに心がとびすぎて、身近な国の充実ぶりを見落していては何にもならない。

台湾でも年少層を対象にハンドボールの芽が開かれはじめたと伝えられているが、近い将来、アジアハンドボール連盟が組織されてもよいのではなかろうか。

韓国、中共への遠征メンバーは次の通りである。

▼日体大韓国遠征（6戦6勝）▽団長栗本義彦（日本協会顧問・日体大学長）▽副団長馬場太郎（日本協会副会長）▽監督　荒川清美（日体大監督）▽審判員　若崎重富（日体大出）▽選手GK　島崎政治　島田秀四▽FP　青木義男（主将）蓮井潔石原達夫、沢田一夫、田上健一、北岡大覚、小林平八、北山隆、林昭次、栗山繁則、川上克己、河上久信、高木敏行

▼全日本高校選抜韓国遠征（6戦5勝1分）▽団長　菅是敬（全国高体連ハンドボール部長）▽監督徳永陸繁（同副部長）▽コーチ　稲石三二（日本協会理事）▽マネジャー清水正（全国高体連常務理事）▽役員　山田計（日本協会理事）▽選手GK　尾形譲（神代）、牧邦弘（中京商）▽FP　青沼正義（室蘭商）、大槻雅夫（石岡一）、渡辺正（清水商）、多田稔（兵庫工）、余語東洋民（新居浜工）、村田久（宇部工）八重柏和重（古川工）、坂口学（桐生）、氷見修（小杉）、小川安人（桜台）、木野実（寝屋川）、飯端寿昭（三国ヶ丘）、矢島芳弘（小倉工）、

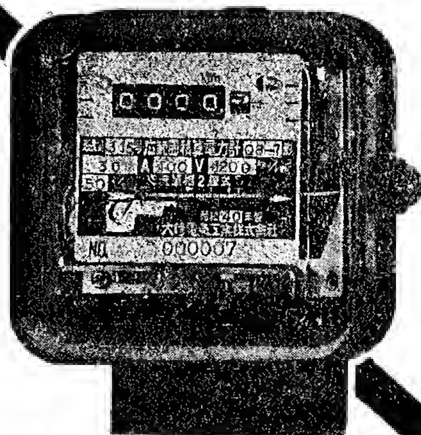
▼全日本男子中共遠征（9戦1勝8敗）▽団長　高嶋冽（日本協会理事長）▽監督　岡村昭二（東京教大出）▽コーチ　藤田信義（日体大出）▽マネジャー及報道担当河東田義郎（河北新報社）▽選手GK　福本弘（大崎電気）、島崎政治（大阪イーグルス）▽FP　竹野奉昭（大崎電気）、東嘉伸（大阪イーグルス）、宮原藤支男（大崎電気）、田口侑義（同）、北村尚英（同）、井上素行（同）、金田純男（同）、市原則之（同）、西村功（同）、青木義男（大阪イーグルス）、森田謙喜（芝浦工大出）

Osaki

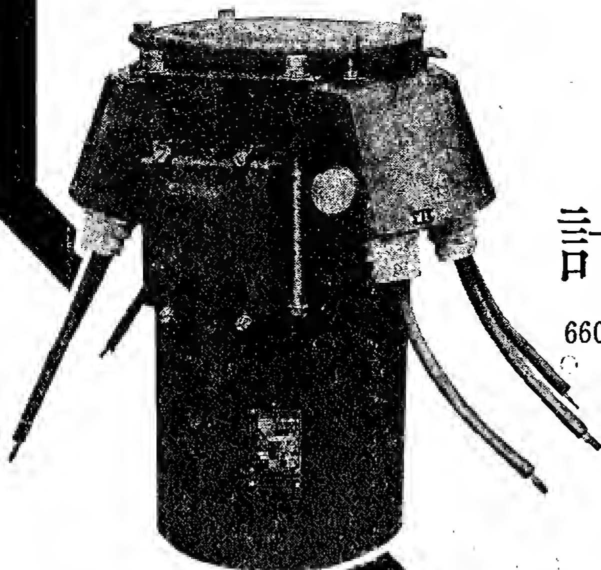
最高の確度と信頼度を持つ

電力量計

単相用	ＯＢ－７形
３相用	ＯＷ－７形
精密用	ＯＰ－３形



OB－7形広範囲単相積算電力計



計器用変成器

6600Ｖ用重予型PCT　PDN形

主要製品

電力量計・電流制限器
計器用変成器・電圧調整器
配電盤・分電盤・制御盤



大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場　東京都品川区東五反田２-２-７　電話東京（443）7171代表
蒲田工場　東京都大田区多摩川２－８－１　電話東京（732）6511代表
埼玉工場　埼玉県入間郡三芳村大字藤久保　電話 0492 －61－ 1205



日本協会30年の歴史をいろどる一つに外国チームの来訪がある。

美しい親善の花を咲かせ、国内レベル向上に大きな足跡を残してくれた来日チームの想い出をまとめてみよう。＝カット写真は昭和31年来日の西ドイツ（編集部）

ヒットラー・ユーゲント

昭和13年9月、訪日使節として、ドイツから来朝した〝ヒットラー・ユーゲント〟の団員の中にハンドボール選手が加っていたことから急に対戦の話が持ちあがり、政府筋からその年の2月発足したばかりの日本協会に連絡があり、斯界にとっては思いがけない〝大事業〟が舞いこむことになった。もちろん国際試合は史上初のことである。

当時の新聞から拾うと『来朝中のヒットラー・ユーゲントの一行は15日、日本送球協会に対して送球試合を行いたい旨申し出た。

協会側では偶然にも、ドイツの国技ともいうべき同競技の国際試合が挙行できるというので大いに喜んで、直に本年度学生リーグの優勝校・日体チームを推せん、16日午後3時半から明治神宮競技場で対戦せしめることとなった』（昭和13年16日付・朝日）

試合はヒットラー・ユーゲント側に本格的なハンドボール選手が少なく、日体のスピードにあふれた攻守が19―6で制するところとなった。記念すべき日独第1戦の出場メンバーを特に掲げておこう

【日本】		【ドイツ】
徳永	GK	レデッカー
菅	FB	ヴインタカー
陳	FB	フオルク
金	HB	シュビールマン
中島	HB	H・シュルツェ
李	HB	トロシヤー
和田	FW	シュレイ
馬場	FW	ハウト
崔	FW	ベッカー
南	FW	オルツ
文	FW	デイットマン
11	GT	12
10	FT	18

なお、ヒットラー・ユーゲントはこのあと名古屋に立ち寄り、愛知一中（現・旭丘高）とも対戦した記録がある。

訪日ドイツ艦隊

昭和17年、秋日本に寄港したドイツ艦隊はハンドボール、サッカーなどのチームを持ち、日本のチームと交歓を強く希望していた。

日本ハンドボール協会も、本場ドイツのプレイヤーに接することは願ってもないということで全日本学生選抜軍を編成して迎えることになった。

大会直前になってオット・ドイツ大使（当時）あて、本国の体育長官から艦隊チームをドイツ代表として認定し、公式国際試合に取り扱ってさしつかえない旨のメッセージがとどき、がぜん内外から注目をあびる対戦となった。

11月29日、神宮競技場。当日は『多数の在留独人を混へた観衆にうめられ、さながら日独両国民の一大交歓場の観を呈し……』（昭和17年11月30日付朝日）訪日艦隊員は小さな拍子木のような応援具を手にして約二千人がスタンドに陣どりにぎやかな声援をおくり、いっそう国際試合の雰囲気を盛りあげた。

試合は日本がパスワークを主体とした技、ドイツがタテへの突進から強烈なシュートをはなつという力で応戦、好試合となったが日本が後半28分に決勝の1点をあげ、熱戦にケリをつけた。

この試合を行ったことで、昭和13年春に頒布された競技規則の解釈がほぼ正確なことが知れたのは大きな収獲で、試合での勝利とともに、日本側関係者は大いに自信を得るところとなった。

西ドイツ選抜軍

第二次大戦後の昭和27年、日本は待望の国際ハンドボール連盟復帰がなり、まっさきにヨーロッパ一流チームの招へいが企画された。そして戦前からの友好と、ハンドボールの母国ということで西ドイツを招くことに関係者の意見が一致、昭和28年秋に実現を目ざしたが坐折。昭和31年9月待ちこがれるうちにファイク団長以下ケンパ、ダーリンガー、シエドリッヒ、ケスラー、H・ヴイル、ヴアンケ、GKジンガーら、その年の4月世界選手権(11人制)に優勝した名手たちが日本の土を踏んだ。

一行は初練習の時から関係者を驚嘆させるようなスケールの大きなプレーを見せ、軽々と片手でボールを操作するのにどぎもをぬかれた。

彼らの妙技は、実戦でさらに発揮され、特に中盤をロングパスで一気に通過し、ゴール前になだれこんではめまぐるしいばかりにパスをかわしてシュートの機をうかがう攻撃は圧巻であった。

西ドイツも日本と同よう戦火の被害にあっていたが、さすがに国技の復活は早く、IHF仮復帰（昭和26年）以後、国際公式試合に31連勝、この間昭和27、31年と2回連続世界男子11人制のタイトルを掌中にしていた。日本側もこの強敵にひるむことなく善戦した。

史上初の本格的ナショナルチームともいえる全日本は大阪（9月23日）東京（後楽園競輪場・9月30日）で対戦。16―27、12―28のスコアだった。

特筆すべきは、このシリーズ（8戦）の各会場がどこも満員の観衆を集めたことであろう。なかでも名古屋大会（9月18日・瑞穂競技場・対全東海）には3万8千の大観衆がつめかけ、同競技場でもかつてない動員記録となった。

このほかの各地も一万二千～三万の観衆を集め、最終戦の後楽園には2万のファンがスタンドを埋めスポーツ界の注目をあびた。

かくれたエピソードとしては、ドイツチームの主力A選手が来日中のあるミーティングに5分ほど遅れたためにその後の試合に出場を許されぬばかりか、ユニホームを着てグランドに立つことまで禁じられるという厳罰をうけたことである。

彼の巧技をもう一度見たいという日本側の要請にも来日首脳陣は首をたてにふらず『彼はもう一生ナショナルチームの一員とはなれないであろう』と告げた。

世界最強チームのみの持つ厳しさをまのあたりに見て、日本の関

係者も身をひきしめられる思いがし、荒川清美氏(現理事長)は「西ドイツが残した最高の教訓」と述べていたほどだった。なお、西ドイツにIHF会長バウマン氏（スイス）が同行した。

ルーマニア選抜軍

国際ハンドボール界の勢力図に、東欧勢が大きくはり出して来たのは昭和32～33年ごろからであった。

日本では、東京オリンピックにハンドボール実施が確定と伝えられたところでもあり、東欧勢の有力チームの招へいが積極的に企てられた。

与望をになってルーマニア選抜軍が来日したのは昭和35年6月。来日は当初6月10日と伝えられたが台風のため一行はホンコンで足止めとなり5日後の15日やっと羽田に着く騒ぎもあった。

ルーマニアハンドボール界の歴史はかなり古かったが、世界のトップクラスに加ったのは近年のこと。昭和34年の第5回男子世界選手権（11人制）に準優勝（優勝は東西ドイツ連合）し、近い将来必ず世界の王座に君臨するだろうとうわさされた。

一行はツードル団長以下19人。監督のクンスト氏は当時35才の若手ながら、ヨーロッパハンドボール界の新進指導者として注目を集めていた人。選手はブルガル、Gカベルブッシュの両ベテランを攻守の軸にナデア、ナト、コスタケ兄弟、新進GKレドルなどで、ほとんどが世界選手権出場者。


日本チームからおくられたハッピを着るルーマニアチーム

日本側は10戦とも単独チームが対戦するという思い切った策がとられたが、これは「現状では出来るだけ多くの選手に国際試合を経験させ、きたえることが望ましい」という協会方針によるものであった。

ルーマニアはさすがに強く、特に秀れた個人技を活かした突進力は目を見はらされるものがあり、西ドイツ（31年来日）同よう、片手でボールを握ってのパス、シュート。常に6人防禦、6人攻撃というスタミナなど、すべての面で日本側をしのいだ。

完敗の日本にあって大健闘したのが最終戦（7月3日、東京小石川）の全芝浦工大であった。

約一万のファンに見守られるなかで、全芝浦工大は終始互角にゲームを進め、後半20分16－16という激戦となった。ルーマニアはそれまでにない慎重な攻撃を見せ、勝敗の予断はまったく許せなかったのだが、タイムアップ1分40秒前エース・ブルガルの中央突破によるシュートが決勝点（17－16）となりルーマニアが辛勝した。

しかし、〝世界第2位〟を苦しめ抜いた全芝浦工大の健闘は、ハンドボールを東京オリンピックの有望種目として評価させるに充分な役割をはたした。

韓国学生選抜軍

日本と韓国の結びつきは古い。昭和12～16年ごろ日体に留学してハンドボールをマスターした韓国人学生が帰国して母国にその種まきしたことを考えれば、〝同じ起源〟ともいえる。

戦前には早慶満同、戦後には日体大（昭和36年10月）、全日本高校選抜軍（昭和37年8月）が訪韓して親善の実をあげているが、韓国チームの来日は初めてであった

しかも、このシリーズは日本における初の屋内（7人制）国際試合。

昭和38年6月5日来日した一行は韓団長以下19人。監督の洪淳泰（韓国ハンドボール協会理事長）コーチの崔東淳（慶熙大教授）の両氏は日体大OB。日本側関係者の中に知己も多くなつかしさあふれる交歓が各地で見られた。

一行は全東海学生選抜との対戦を皮切りに8戦を交えたが最終2戦が国体を控えた山口でのクラブチーム。ほかはいずれも学生の単独または選抜チームが相手だった。

韓国学生選抜はエース徐康錫の精かんなプレーがひときわ光ったほか、李正魯、金秀竜、金京植ら好選手を揃え、社会人チームの少ない韓国では「全韓国」といってもよい布陣だったがチームプレーでは日本側に一日の長が認められ思うように勝ち星はあがらなかった。


日体大対韓国学生

崔コーチは「韓国には学校体育館があまりないため、屋外で練習（試合も）することの方が多い」と話していたが、ボールに対する執着力とスタミナは日本をしのぐものがあり、特に第2戦（6月10日・東京体育館・対日体大）は攻守にすばらしいまとまりを見せ、前半の5点差を後半追いあげて結局引き分けるという好試合を見せた。

韓国高校選抜軍

韓国学生選抜軍（前掲）が来日した半年後（11月27日）、携錫興団長に率いられた高校選抜軍20人が来日した。

前年、全日本高校選抜軍が訪韓しており、第2回日韓高校ハンドボールというわけだが、韓国側の長足の進歩には目を見はらされるものがあった。

日本側は第1戦（11月29日・東京体育館）で明星高が勝っただけ。そのあと5連敗を契した。

各チームの主力である三年生がすでに第一線を退き、練習不足で対戦したことが敗因のいちばん大

外国チーム、日本での成績

▼シリーズ		
▽西ドイツ	（昭31．9）	8戦8勝
▽ルーマニア	（昭35．6）	10戦10勝
▽韓国学生	（昭38．6）	3勝4敗1分
▽韓国高校	（昭38．12）	5勝1敗
▽ステラクラブ	（昭39．6）	7勝3敗
▽中共	（昭41．9）	8勝1敗
▽西ドイツ	（昭42．9）	男 10勝3敗 女 6勝5敗
▼単発ゲーム		
▽H・ユーゲント	（昭13．9）	6―19 日体
▽訪日独艦隊	（昭17．11）	7―8 全日本学生
▽独艦選抜	（40．3）	7―38 全東京

きな理由といわれたが、それにしても韓国の精力的なプレーと、激しい動きは、完全に日本側を上廻った。韓国のこうした若い層の充実は、将来、アジアにおいて日本ハンドボール界の前に強敵として立ちはだかることを暗示したといえよう。個々の選手では柳在男、金相哲、洪成寿、GK崔大鎬らが目立ち、柳のスピードのあるテクニックはめだつものがあった。

なお、日韓高校戦は39、40年にも計画されたが韓国側の事情で中止。今夏に交流再開がうわさされているのは朗報だ。

フランス・ステラクラブ

毎シーズンのように来日が伝えられていたヨーロッパの名門〝ステラ〟が羽田に姿を見せたのは、39年6月だった。

ステラはフランス・サンモールに本拠をおく伝統のあるスポーツクラブで日本チームが訪欧の際再三お世話になったチーム。最初の計画では女子も滞同するハズで、日本協会では史上初の外国女子チームの来日とあって各地で13戦を決めたが、女子のメンバーの大半が体育教官で、来日のために休暇をとると授業などに支障をきたすからとフランス・スポーツ省が渡航を認めなかったためとりやめになった。

一行はザゲル監督兼選手など23人で、来日中止となった女子のメンバーのうちGKのアントロアニー嬢も加っていた。

西ドイツ、ルーマニアなどこれまでに来日したヨーロッパチームはいずれもナショナルチームで、その行動もかなりかた苦しいものが感じられたが、ステラはいわゆる親善試合旅行。夫人同伴の選手もいて試合のあいまに、日本の初夏を楽しむムードが感じられた。

しかし、主力のザゲル、コントバンダン、プチ デシャンらフランスのトッププレイヤーの試合ぶりはさすがに鋭いものがあり、特にコントの豪快さ、ザゲルの34才ともみえぬ攻防の動きは大いに注目された。

アントロアニー嬢も熊本大会（第7戦、対全九州）ではエキジビションの女子紅白戦に出場した。

なお、ステラクラブにIHF副会長プチモンゴベール氏（フランス）が同行した。



金閣寺で遊ぶフランスステラクラブ

独艦ドイッチェランド号チーム

世界一周航海中の西独海軍〝ドイッチェランド〟二号には、寄港さきに相手さえいれば試合を申しこむというハンドボール好きが乗り組んでいる。「日本には手強いチームがあるということを聞いて来た」（監督のラックシュビッツ少佐の話）そうで40年3月駒沢屋内球技場で社会人の〝全東京〟が日本側を代表して対戦。

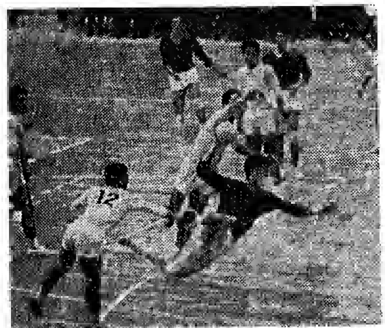
ハンドボールを国技とする西ドイツからの来訪とはいえ、練習量の不足はかくせず、試合ははじめから全東京のペース。日本で行われた国際試合の最多得点差（38—7）が記録された。

大敗した西ドイツではクラウト、ホフマンの両選手がスケールの大きいプレーを見せて〝親善〟に集ったファンの拍手をあびた。

中共ナショナル

中共はIHFに未加盟。しかし日中スポーツ交流の一環としてハンドボールも積極的な交歓を行うことになり、40年まず全日本が訪中、そして41年9月、中共ナショナルチームの招待を実現した。

中共のハンドボールの歴史は浅かったが、バスケットボール出身者を中心にして選手を養成、ルーマニア、ソビエト、東ドイツなど世界のトップクラスとしきりに交流した成果で、短時日に実力をあげた。前年の訪中で日本は9戦して1勝しかあげていない。



全日本対中共戦

来日した一行は劉夫洪団長以下16人。劉夫洪氏はかつて抗日戦の闘士。選手の職業は農民、労働者、学生など。試合場には必ず全員が〝毛主席語録〟を持参するなど、その行動は注視の的だった。

試合ぶりも〝国家的任務〟という感じが強く、日本側はこの中共の闘志にたじたじとなり、第1戦（9月17日・横浜文化体育館）で芝浦工大が勝った以外は8連敗、最後の全日本（10月3日・駒沢屋内球技場）も、中共の激しい当りと、平均身長一八〇・二センチという長身者ぞろいの攻撃に手を焼いて惜敗してしまった。全日本が編成されたのは昭和31年の西ドイツ戦以来10年ぶり。「ミュンヘンオリンピック第一次強化候補選手」（24人・8月30日発表）から選ばれたものであった。

中共は、エネルギッシュな攻防のほか、定評通り絶妙のハンドリングを見せスピードも豊か。東欧型のプレーに独自の戦法を加えたプレーは、アジアにおけるハンドボールのひとつの行きかたとして注目してよいものがあった。

個人的には左腕のエース朴憲章を筆頭に劉延江、楊霊藩、王洪橋朱炳亢、GK陳維政らが攻防両面でみごとなプレーを見せ、朴憲章のダイナミックな攻撃ぶりはこのシリーズの〝焦点〟となった。

なお、第3回日中交流は42年5月、日本が訪中して行われるハズであったが、中共の国内事情で延期されたままである。

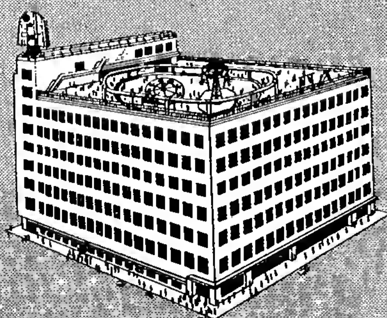
西ドイツナショナル

昭和31年につづいて2度目の西ドイツナショナルチームの来訪で、今回は女子を滞同したところに大きな意義があった。

女子の外国チームが来日したのは史上初めて。

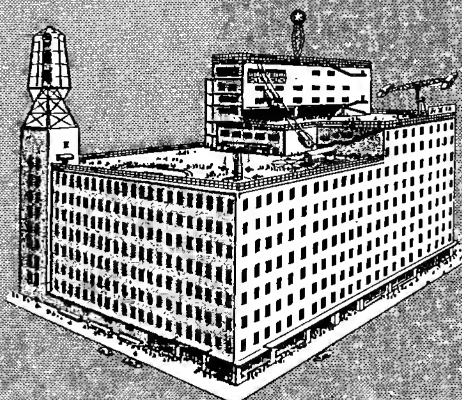
このチームの試合ぶりは、つい4ケ月前のことでもあり、読者の記憶に新しいと思う。ハンドボールの祖国にふさわしい洗練されたプレーは大きな示唆を残し、その後の国内大会で明らかに西ドイツの影響と思えるプレーが消化されているのは喜ばしい。

八代支店



ご家庭に
幸せをはこぶ
バラの包装紙

おくりものに
大洋の商品券
熊本八代両店共通



熊本本店



熊本市下通町1丁目3－10
大洋
TEL〈大代表〉2－1111

全国大会略史

（全日本総合
全日本選抜
全日本教職員）

日本ハンドボール協会が単独主催する全国大会は、現在「全日本総合選手権」「全日本選抜選手権」の二大エベントと「全日本教職員選手権」の三つである。

日本一のタイトルは、全プレイヤーの憧れであり、大会のたびに、悲喜こもごものエピソードを生んでいるが、各大会のたどった道をふりかえってみることにしよう。（編集部）

全日本選手権
全日本総合選手権

球界初の全日本選手権は、日本協会発足に先立つ昭和12年11月、東京体育研究所で第9回明治神宮体育大会陸上競技の一部として開かれている（本誌18頁、入江暢一氏の記事参照）

協会設立前にあわただしく選手権を実施したのは、昭和15年にオリンピック東京大会を控え、競技の普及とトッププレイヤーの発掘を一日も早く行わなければならないという事情があったからだろう。

出場チーム（大塚ク、日体専、青山師範、慶応）はいずれもサッカー、ラグビー、バスケットボールなどの選手を中心に編成、なかには水球、バレーボール、陸上、体操選手などの顔も見えた。

第2回大会は8ヶ月後（昭和13年7月）6チームを集めて行われ日体専が優勝、同校はそのあと第3回（昭15）、第4回（昭17）にも連勝。ハンドボール界における〝日体の位置〟を確立することになる。

全日本といっても東京以外から出場したのは第3回の神戸ク、静専ク(静岡)、茨城師範ＯＢ、大阪クの4チームにすぎず関東大会の域を出なかったのは当時としてはいたしかたのないことだったろう。

なお、女子は昭和15年からはじめられたが、男子とは逆に地方勢が主力。倉敷高女（岡山）が第3回では梅花高女（大阪）、第4回では津山高女（岡山）をそれぞれ決勝戦で破り2年連続優勝、戦前の女子界ナンバーワンの座を不動のものとしている。

さて、第二次大戦後は昭和24年度までまったく全日本選手権は開かれなかった。ようやく25年1月愛知県一宮市に男14、女3チームが参加して復活、地区予選などは経ずフリー参加で、競技の普及も主眼とされた。

競技面では、戦前に確固たる地位を築いた日体系が他をリード、復活後10年間のうち27年（第4回）にセントポールク・Ａ（東京）に王座をあけわたした以外は、すべて優勝を記録した。

34年以降はベスト・フォアの顔ぶれも毎年のように変動、各チーム、各地域の実力均こうという喜ばしい傾向を見せた。

34年（第11回）からは、いわゆる〝芝浦時代〟で芝浦工大(東京)が現役学生チームとして史上初の3連勝を飾った。37年（第14回）には大崎電気（当時・東京）が実業団として初めてタイトルを握った。

参加数も回を追うごとに増し、29年（第6回）に男子33と初の30台をマーク、36年（第13回）には38と伸びた。このため、日本協会では、大会の目的の一つであった〝地方における普及とトップチームの育成〟は一応の成果をあげたとして37年（第14回）からは、大会の質的充実を企ることになり、地区予選制採用に踏み切った。

男子の成長に引きかえ、女子は伸び悩み、37年（第4回）はついに休会、翌年再開したが低迷をつづけ32年（第9回）からの七人制全面化でどうやら安定した。

競技面ではＯＧ中心のクラブ優勢期（第1回～第6回）、高校現役躍進期（第7、8回）を経て、時流に乗った実業団のへとつながった。

実業団黄金期のパイオニアは愛知紡（愛知）で32年（第9回）から6連ぱという偉業をとげた。

実業団の天下は崩れそうもなく39年（第16回）はついにベストエイトを独占したほど。

なお、この大会は29年（第6回）以降、大会地は翌年の国体開催地という慣習ができている（注・33年のみ山口県下関市、34年の国体は東京）

全日本総合室内
全日本選抜

七人制＝室内ハンドボールのルールが制定されたのは一九三四年（昭9）。日本でも13年に紹介されているが、実際に競技されるようになったのは昭和27年ごろからである。

七人制の全国大会が開かれたのはさらに2年後の29年12月、大阪府立体育会館に男子28、女子7チームが集った。参加チームの七割は大阪、兵庫勢。余談になるが第2次大戦後、国内ハンドボール界でつねに新しい道へ先行していたのは関西球界であった。競技施設の充実や、関係者の熱意などの結集といえよう。

しかしながら、競技面においては、関東勢が最上位を占めこの室内選手権では、男子は第1回から現在にいたるまで、関東代表で優勝を独占している。

さて、大会は、前掲の全日本総合同よう、当初は自由参加。近代スポーツのあらゆる要素をふくんだこの新種目に対する一般の評価は高く、見るスポーツとしての支持も多かったのだが、すでに15年

以上の歴史を積んだ十一人制（フィールド）とのバランスをくずすまでには時日が必要だった。

協会内部にも十一人制よりも、今後は七人制を積極的に普及していくべきだという声も聞かれたがそれを全面に押し出すまでにはいたらなかった。

しかし、国際、国内ともにシーズンごとに七人制の本質が競技者側にも理解され32年女子が七人制一本化となって拍車がかけられた。

こうした背景をうけた大会だけに、はじめのうちは開催地（第1回大阪、第2回平塚、第3回大阪、第4回名古屋、第5回大阪、第6回東京）周辺のチームが大挙して参加し、全日本とは名ばかり、ブロック選手権といった感じの方が強かったものだが、回を重ねるうちに名実ともに室内の日本一を争うにふさわしい内容となり、夏の全日本総合と併せて、このタイトルを獲得することが有力チームの最高目標にまでなった。

38年、男子も七人制全面化を決めたため、一躍この大会の存在がクローズアップされた。

一般の評価もいっそうこの大会にかけられるようになり、スポーツジャーナリズムの関心も深められた。競技面における充実もめざましく初期においては、十一人制の戦法を七人制におきかえただけという単調なものであったが、35年ごろからは高度な〝室内技術〟が披露されるようになった。

38年（第10回）からは自由参加制を女子のみに限り、男子は地区予選制が採られた。さらに40年（第12回）から出場全チームを日本協会が推せんすることになり、大会名を「全日本選抜」と改めた。

これは、世界選手権出場、オリンピック（ミュンヘン）確定などを控えた球界が、トップレベルの強化を企る一策としてトップチームによる激突を考えたもので、予想通りの成果をあげて、現在にいたっている。その年の各全国大会の上位チームを結集しての選手権だけに、いまや、年間最大のタイトルといってもよい。

問題点として残されているのは選抜基準の上で総合、学生、実業団、教職員、国体（一般）の5大会を同格視していることだ。

5大会の上位者が全日本選抜への出場有資格者であることも徹底されていないし、チームによっては伝統的に夏の全日本総合を重んじる風潮を残している。日本協会の方針を早急に明らかにすべきであろう。

また、オリンピック強化へつなげるため高校選抜（全日本ジュニア）や外国クラブチームの招待出場を推進したらどうかという声が聞かれるのも検討されてよい時期だ。

全日本選手権優勝チーム

	〔男子〕	〔女子〕
①昭12	大塚ク	……
②昭13	日体専	……
③昭15	日体	倉敷高女
④昭17	日体倶	倉敷高女

全日本総合選手権優勝チーム

①昭25、1	日体桜	愛知ク
②昭25、11	スワロー松	全山梨
③昭26	スワロー	芙蓉ク
（以上全日本選手権と呼称）		
④昭27	セントポールクA	……
⑤昭28	全日体大	全静岡城北
⑥昭29	全日体大	全静岡城北
⑦昭30	西日本日体ＯＢ	水海道二高
⑧昭31	全日体大	半田高
⑨昭32	全日体大	愛知紡
⑩昭33	全日体大	愛知紡
⑪昭34	芝浦工大	愛知紡
⑫昭35	芝浦工大	愛知紡
⑬昭36	芝浦工大	愛知紡
⑭昭37	大崎電気	愛知紡
⑮昭38	立教大	大洋デパート
⑯昭39	大崎電気	大崎電気
⑰昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱昭41	全立教	大崎電気
⑲昭42	大崎電気	田村紡

全日本総合室内選手権優勝チーム

①昭29	日体大	春日丘ク
②昭31、3	日体大A	日体大
③昭31、12	全芝浦工大	日体大
④昭33	日体大	半田高
⑤昭34	全日体大	寝屋川ク
⑥昭35	全芝浦工大	熊本ク
⑦昭36、1	全日体大	熊本商大ク
⑧昭36、12	大崎電気	愛知紡
⑨昭37	全日体大	愛知紡
⑩昭38	全日体大	大崎電気
⑪昭39	全立教	田村紡

全日本選抜選手権優勝チーム

⑫昭40	芝浦工大	田村紡
⑬昭41	全立教	大崎電気
⑭昭42	芝浦工大	田村紡

全日本教職員選手権

教職員による競技普及の力の大きさは他言を要さぬが、ハンドボール界の場合は、つねに教職員チームのうち、いくつかが国内のトップチームとして学生、実業団、クラブに伍しているのが大きな特色である。

昨秋来日した西ドイツのナショナルプレイヤーH・デュエル選手は「教職員だけのハンドボールクラブ（チーム）があるなんて、すばらしいことだ」（注・彼は体育教官）と話していたが、たしかに日本の教職員チームは質量ともにすばらしい。

昭和33年に始ったこの大会の占める位置もかなり高いわけだが、その意義は単なる〝勝負〟ではなく、指導者でもある選手が正しく競技を理解する点におかれている。そのため、他の全日本選手権各大会に比べて地味な存在なのはやむを得まい。

運営も第1回以来、日本協会が直接あたっており、種別連盟が結成されるという話も聞かないが、大会の本旨からみて、あえてそうした組織をつくる必要もないであろう。

現在、登録、未登録あわせて全国で65の教職員チームがあるが、同一校内の教職員によって編成されているチームは実業団球界でも活躍できることになり2月の第8回実業団選手権では、さっそく岩手医大職員チームが出場を申しこんでいる。

この大会に女子の部が設けられるまでには時間がかかりそうだが、むしろそれまでに二、三度話のもちあがった「教育系大学大会」（仮称）開催問題が再燃されそうだ。なお、国体に教職員の部が加えられたのは38年から。

全日本教転員優勝チーム

①（昭33）	茨城教員ク
②	東京教員団
③	神戸ストーク
④	休会
⑤	大阪教員ク
⑥	大阪教員団
⑦	大阪イーグルス
⑧	大阪イーグルス
⑨	大阪イーグルス
⑩	大阪イーグルス

【注】この3大会のほか全日本学生、全日本高校、全日本実業団の各選手権があるが「学連・高体連・実連」の項（36、37頁）参照。

高体連・学連・実連

～その沿革と課題～

日本ハンドボール界には三つの組織がある。学連、高体連、実連である。これらの組織は、日本協会と共催して、それぞれの選手権を開くとともに、各分野の普及に大きな力を示している。

組織の円滑な運営と向上があればこそ、日本協会の発展が成される。

その沿革を御紹介するとともに現在かかえている課題を読者とともに考えてみよう。（編集部）

競技人口の八割を擁す

発展へひたむきな努力、情熱

全国高体連ハンドボール部

日本ハンドボール界の基盤となっているのが高体連だ。

特に地方協会のこれまでの発展に、高体連（高校界）の存在は忘れることが出来ない。

競技人口面では日本のハンドボール人口の八割強が高校生であることが示されているが（注・42年体協スポーツ人口調査）、その他あらゆる分野で、高校選手とその指導者（監督、コーチ、顧問の高校教諭）が大きな力となっている。

高体連ハンドボール部の発足は昭和24年。25年の8月大阪・藤井寺に全国32都道府県男女86校を集めて第1回全日本高校選手権を開いている。

それまでの高校界のビッグエベントは国体高校部門、高校東西対抗（22年度～26年度）、東西日本高校選手権の四つであったが、高体連発足と同時に他競技同よう炎天下につづる全日本高校選手権が最大・無二のエベントとなっている。

高体連独自の事業としては、これまでに、37年の全日本高校選抜軍の韓国遠征、38年の韓国高校選抜軍招待と二回にわたる「日韓交流」。41年の全日本高校選抜、男女の沖縄遠征が特筆される。また、10周年（35年）15周年（39年）に刊行した「記念誌」（A5判・各一二六頁）は労作で、球史をひもどく貴重な資料の一つである。

発足当時は全国で正式加盟・未加盟あわせて三百五十校（概算）といわれたが、10年目には四百三十九校、15年目には六百六十五校（いずれも男女計、4月現在の正式加盟数）と伸び、現在は男女千百校に急上昇している。

「中学指導要領」へ復活されれば近い将来二千校も夢ではないと関係者は語る。

高体連が短時日にこれほどの発展をとげたのは、指導者のなみなみならぬ熱意にほかならない。

教え子を育てる情熱と併行してハンドボール普及への尽力があったことは日本ハンドボール界30年の歩みのなかで、もっとも大きく書き出さなければいけないことかも知れない。そして高校界の前途はいっそう洋々としているのだ。

今後の課題としていちばんの問題になりそうなのは、教育の場と、オリンピックをめざす若い有望選手の養成場という二つのまったく離反した目的をどう調整していくかであろう。

教育の場こそ本来の目的であり、ナショナルプレイヤーの予備軍的感覚でみられるのはとんでもないことだというムードが支配的なのは当然だが、伝えられる〝ジュニア・ナショナルの強化〟などという声をどう受けとめるか、これは指導者個々の問題というより高体連ハンドボール部としても日本協会と充分意見を交わすべきことであろう。

高体連の象徴三つのK『力、技明朗な精神』を永遠のものとするため、高体連ハンドボール部は新しい局面を迎えているといってもよいのではなかろうか。

【現役員】部長・児玉九十（東京明星高校長）▽副部長・徳永陸繁（東京）山田計（大阪）小袋是郎（福岡）▽常任委員、19名＝氏名略▽日本協会派遣理事、山田計、清水正（山梨）

全日本高校選手権優勝校

【男子】

昭25	足利	（栃木）
昭26	桜台	（愛知）
昭27	桐生工	（群馬）
昭28	桜台	
昭29	桜台	
昭30	桜台	
昭31	桜台	
昭32	桜台	
昭33	清水商	（静岡）
昭34	中京商	（愛知）
昭35	中京商	
昭36	中京商	
昭37	桜台	
昭38	桜台	
昭39	明星	（東京）
昭40	桜台	
昭41	明星	
昭42	明星	

【女子】

昭25	操山	（岡山）
昭26	倉敷青陵	（岡山）
昭27	寝屋川	（大阪）
昭28	稲沢	（愛知）
昭29	寝屋川	
昭30	明善	（福岡）
昭31	寝屋川	
昭32	水海道二	（茨城）
昭33	寝屋川 熊本市立	（熊本）
昭34	熊本市立	
昭35	熊本市立	
昭36	半田	（愛知）
昭37	静岡城北	（静岡）
昭38	静岡城北	
昭39	栃木女	（栃木）
昭40	静岡城北	
昭41	秋田和洋	（秋田）
昭42	花巻南	（岩手）

多数の球界指導者を輩出

関東学連を母体に発足（昭和13年）

全日本学生連盟

日本協会に遅れること3ケ月。昭和13年5月慶応、日体、文理（現・東京教大）、早稲田、明治の5大学によって結成された関東学生送球連盟が同年秋に全日本学連も名乗り、関東学連の「二枚鑑札」で発足した。

関東以外の大学で活動していたチームは当時なく、関東諸校が各地で公開試合などを行うことによって盟友を増やしていこうという構想だった。

その狙いが軌道に乗りかけた時に戦火が激しくなり、学生ハンドボール界も〝休業〟状態になった。

第2次大戦後、関東学連がまず復活（昭和21年春）、同時期に関西でも数校が部活動をはじめ、関西学連結成機運が盛りあがった。

21年秋、第1回国体で「東西大学優勝校対抗（早大―大阪歯科医専）」「早大―関学定期戦」が行われるなど東西の交流が活溌となり、全日本学連誕生（正確には復活と云うべきかもしれないが…）の下地がととのえられた。そして23年秋「結成記念シリーズ」と銘打ち西宮で第1回東西学生王座決定戦、第1回学生選抜東西対抗、東西大学定期戦（第2回早大―関学、第1回慶応―京大、第1回明治―立命館）などを行い毎年の恒例行事にした。

全日本学連は順調に成長したが地方学連の整備・発足が遅れたため、最大の目標である全日本学生選手権の実現はかけ声ばかりで、33年ようやく第1回開催にこぎつけた（注・女子は昭和40年から）

32年から東西学生王座決定戦は全日本学生王座決定戟に改称され地方学連の秋季優勝校も王座への出資場格を得ることになり、東、西で予選（東日本学生選手権、西日本学生王座決定戦）を行うようになった。また東西対抗も34年から関東、関西学連に限られていた出場選手を地方学連にも広げ、名実ともに全国規模の三大会を主催・運営。現在では全国に7学連、男女98校をようし、シーズンごとに拡充の一途をたどり43年度は一挙に110校を越すものと予定されている。

また、学連出身者が日本協会のリーダー・シップを握り学連が球界の指導層の温床となっていることとは注目してよいものがある。

今後の課題としては専任役員の選出にともなう学連技術部、学連審判部（いずれも仮称）といったパートの確立があげられよう。

【現役員】会長・西敏郎（関東学連会長、慶大ＯＢ）▽理事長・安藤純光（日本協会常務理事、法大ＯＢ）▽日本協会派遣理事・安藤、久保義雄（関西学連理事長、同志社大ＯＢ）▽委員長・須賀通夫（関東学連委員長、日体大3年）

（注）副会長は各学連会長、理事は各学連理事長、委員は各学連委員長及び関東学連委員＝氏名略

学生界優勝記録

【男　子】

昭23	王座	文理大
昭24	〃	関学
昭25	〃	関学
昭26	〃	関学
昭27	〃	関学
昭28	〃	関学
昭26	〃	関学
昭30	〃	日体大
昭31	〃	芝浦工大
昭32	〃	芝浦工大
昭33	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	関学
昭34	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	芝浦工大
昭35	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	関学
昭36	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	芝浦工大
昭37	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	芝浦工大
昭38	ＩＣ	立教大
〃	王座	芝浦工大
昭39	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	芝浦工大
昭40	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	芝浦工大
昭41	ＩＣ	芝浦工大
〃	王座	立教大
昭42	ＩＣ	立教大
〃	王座	立教大

【女　子】

昭40	ＩＣ	日体大
昭41	ＩＣ	日体大
昭42	ＩＣ	日体大

※　ＩＣは全日本学生選手権を示す

競技年代拡張に貢献

タテの連係強化が急務

全日本実業団連盟

昭和34、35年ごろから全国各地で実業団チームの結成が活溌となり、38年、七人制全面化でいっそうの伸びを見せた。

全日本実業団選手権も35年から日本協会の手で運営・開催されており、連盟組織の確立は時間の問題とされていた。

40年2月大阪で、各チームの代表者による話しあいで設立を承認、ただちに創立準備委員会が組まれ、同年10月東京で連盟組織が固められると同時に、会長以下の役員が発表された。

短い期間でこのような組織づくりが成功したのは、前述のように各地の実業団がもくもくと精進をつづけていたことと、全日本実業団選手権がすでに開かれ、各チームの結束が容易であったことなどがあげられよう。

加盟チームもシーズンごとに増し、全日本実業団選手権への参加も男子は着実にふえている。

そして、何よりも、実業団の確立によって、これまでの競技者層の年代を上へ伸ばすことが出来たのは大きな収穫であった。

役員もいわゆるオーナー―実業団チームを持つ会社首脳陣―が多く組織としては先輩格の学連や高体連よりも〝かなり大人〟なところがあるが、かかえている課題も少くない。

ことに連盟（本部）とは名ばかりで、登録受けつけ所にすぎぬといった声もあるのは、いかに急ごしらえの組織とはいえ、もう考えなければならぬことだろう。

規約に明記されている東日本、中日本などの地域実連の結成に対しても積極的な策を打ったという話は聞かれない。

42年にせっかく発足した関東実連も規約からすれば、全日本実連と直接結びつくことは出来ないのだし、活溌な動きを見せる愛知、岐阜、三重、静岡などの実業団関係者も中日本というワクを重んじて東海実連をつくらず、すでに3年つづけられている東海実業団選手権は、東海協会主催である。

組織づくりには、基礎固めが不可欠であり、タテへのつながりを深めることは急務であろう。

【現役員】会長・古賀和佐雄（千代田印刷機製造社長）▽副会長・田村正衛（田村紡社長）、宗形年閑（宗形製作所長）、岡野正実（岡野バルブ社長）▽理事長、渡辺和美（大崎電気社長）▽日本協会派遣理事、数原洋二、古賀健一郎。

全日本実業団選手権優勝チーム

【男　子】

昭35―昭42	大崎電気（埼玉）

【女　子】

昭35	愛知紡（愛知）
昭37	愛知紡
昭38	愛知紡
昭39	レナウン（東京）
昭40	大崎電気（埼玉）
昭41	大洋デパート（熊本）
昭42	田村紡（三重）

日本ハンドボール協会創始期の思い出(2)

松本良三

本稿の原文は、筆者が昭和15年7月に送球競技普及宣伝の為に、早慶両ティームと共に朝鮮に浪した時に書いたものである。是れは「鮮満感激の旅」と題して、朝鮮に於ける送球の試合と、その後で、筆者が個人として満州を一巡し、奉天、新京、大連、旅順の名所、戦跡を訪ねた時に受けた感激を描いたものの前半で、特に送球に関係ある部分を圧縮したものである。原文は慶応の機関誌「三田評論」昭和15年10月第518号に載せてある。

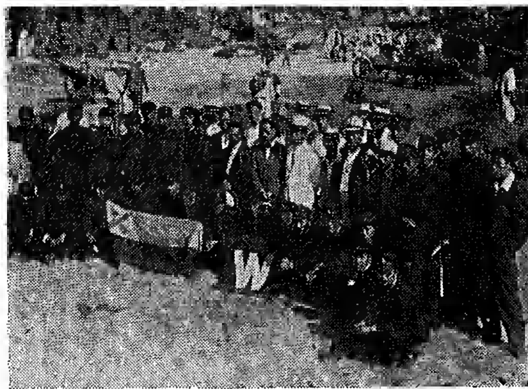
出発

早慶両ティームは、元山府体育協会並に元山毎日新聞の招聘により7月9日午前5時に神戸港から朝鮮遠征の途にのぼった。その目的は、講演、指導、試合による送球競技の普及であった。参加人員は30名で慶応よりは筆者以下15名、早稲田側よりも、酒井部長以下15名であった。船は朝鮮郵船の新京丸で2、600噸ばかりの貨客船で、他に乗客はほとんど無く、吾々の為の特別仕立のようなものであった。

船は内海諸島の間をぬい、翌日の2時頃、宇品に着いた。煙雨の中を厳島にもうでたが、山影淡く滴るが如く、それは高雅百社殿と和して、一帖の絵巻を為した。次の寄港は、殷盛な博多であった。太宰府に詣で、名物の饅頭、又町では水タキの美味に舌鼓をうち、やがて船は玄海灘に向った学生の元気はすばらしいもので、その食慾の旺盛なのに驚いた。

釜山を経て元山へ

台風警報が発せられたが、大したこともなく、13日午前6時に釜山に到着した。竜頭山神社に参拝、山上より全府を一眸の中におさめた。港面は広豁でさすがに釜山をして半島の関門たらしめるを肯かしむるものがあった。翌日は荒天で船は出なかったが、学生は上陸して松島海水浴場を訪れた。午後八時、未だ幾分時化気味であったが、船は釜山を出た。動揺はげしく、学生は喰べるものを喰べると、さっさと寝てしまった。



結局、予定より二日遅れて、16日の午前8時、元山に着いた。埠頭には、体協の役人、報道関係の人々、早慶の先輩など、多数が出迎えられた。記念撮影などで手間どって旅舎三吉野に落ちついたのは、10時頃であった。

さて、今度の遠征は、早稲田の選手の葭浜君が、その父君信夫氏に願い、氏が朝鮮郵船の重役であられた所から、船賃は殆んど只にして下さることとなり、是れに呼応して元山で活躍していた慶応の先輩の広瀬、村上、亀谷諸氏が立ち上って元山毎日の西田社長に提案したのが、ことの始まりであった。玆に掲げた写真は、元山埠頭に於ける早慶ティームと、お迎え下さった方々である。

午後は、酒井部長と共に関係方面へ挨拶に廻り、夜は丸芳会館に於ける歓迎会に臨んだ。会する者、約70名、宴酣にして早慶校歌、応援歌の応酬あり、純真にして豪華、真に此度の遠征にふさわしい序曲であった。

翌17日は市の外郭を為す松濤園海岸に女学生約400名を集め、送球に関する講演並に実演を行った。実演は学生にやってもらい、私は講演をした。ハンドボールは可成り以前から中等学校体操教授要目に制度されて居ることを述べ、そして球技に秀でている朝鮮の人々に解るように、送球は蹴球を手で行い、それに多分にバスケットボールの技術を入れたようなものであると述べた。相当の反響あり、指導者は熱心に之が普及を約した。午後は、朝鮮石油会社等を見学し、朝鮮の産業的重大性について、その一端を知ることが出来た。

咸興

十八日は全員四時半起床、咸興に向い、九時に到着。八校がコーチを期待

していた。咸興は前年に朝鮮代表として蹴球ティームを神宮大会に送った所で、府尹は熱心なスポーツマンであった。とても全部のコーチを引受けることは出来ないので此の中、最も熱心な咸興公立高等女学校のみを引受け、其他の諸校に対しては、試合前四十分許り早く競技場に集ってもらい、ラジオによって送球の概念を与え、更に試合中に適宜説明することにした。試合に先立て一女学校の教諭が府の役人に対し、自分の所にコーチを送らなかったことを難詰していた。その学校は、朝鮮の女子のみをいれる学校なので、此種のことが差別的に見られる恐れあり、是非コーチしてもらいたいというのであった。私に話があったので、林、肥後両主将に頼んで試合後に、コーチしてもらうことにした。

4時半、朝鮮に於ける第一回早慶戦の火蓋は切られた。両軍は灼くが如き炎熱下に攻防の秘術を尽し、一進一退、最後まで気合のこもった試合を展開した。結果は八対七で慶応の勝利に帰した。ラジオを通して慶応の勝利を宣する私の声はいつになく震えていた。しかし此の試合で、センター西は強度のツキ指を為し、慶応ティームの将来に暗翳を投げた。丁重なお見送りを後に、元山駅に帰着したのは、11時半で、一同寝に着いたのは彼れ是れ1時であった。

元　山

明くれば19日、いよいよ元山での一戦である。3時より泉小学校で、中、小学校の教諭にコーチを行い、其後で試合は五時から開始された。早稲田としては地元のことであり、是が非でも勝たねばならず、慶応としては過去十数回の早慶戦に無敗の記録を何で茲に汚すべきであろう。果せる哉、試合は荒々しいものとなり、それは闘志の結晶というよりも、むしろ蕪雑な乱闘と化し、送球としては決して模範的なものではなかった。しかし、その気力、気根の点に於ては吾人の嘗て見ざる追撃戦であった。6対5、試合は早稲田のものとなった。折から降り出した雨の中で行われた閉会式に、選手は土血に塗れ、四辺、凄愴の気に満ちた。

私は人々と挨拶など交し、少し後れて、宿に帰った。慶応の選手は疲れ切った体を土間に下し、先輩から贈られた夏蜜柑を喰べていたが、私が入って来るのを見ると異口同音に、「先生済みませんでした。」というのであった。

やがて先輩と別れの宴が催された。選手も元気を取りもどし、大いに食い、大いに歌った。先輩の温情に尽きぬ名残りを後にして11時40分、吾々は次の試合地である平壌に向った。車中、昼の疲れで一人眠り、二人寝み、起きていたのは林主将と私だけであった。そして其日の戦績を顧み、此度の遠征の最大痛手たるキーパー中村の不参のことや、前主将で、名審判として知られた外山が来られなかったことなど語り合った。轟々たる鉄路の響き以外は何物も聞えない盛夏と雖も薄ら寒い。夜気深沈として身に迫った。

平　壌

20日午後5時半、平壌に到着、駅から程遠からぬ朝日旅館に投じた。21日の午前10時より大同工業専門学校々庭で試合開始、平壌は、はじめ最も期待された所であったが、電報の間違いで期日に変更を来し、一般観覧者は無かったが、観に来た専門家は試合後、絶讃の辞を吝まなかった。選手は幾分疲れていたが、前試合のような乱暴をせず、模範試合として立派なものであった。近代球技の美点を総合し、是れを極度に実現化した理想的スポーツとしての送球の特徴は充分に発揮された。

此日の慶応の林は、すばらしいものであった。彼は球をとると、いつもの跛足を生かし、幾度か敵陣に攻め入るのであったが、味方の後衛つづかず、その中に早稲田方に完全にマークされてしまうのであった。彼は、数年の後、大平洋の前線で海軍中尉として戦死したのである。恐らく其折も、自ら陣頭に立って、祖国の為に栄光の死をとげた事であろう。

試合は五対四で、早稲田の勝であった。林、須藤他に早稲田の一人は求めに応じて疲れた体を上需尋常高等小学校でコーチした。平壌では、送球は既に相当の地盤があり、あまり熱心なので、数少いボールの中から二個を府に呈上した。

午後は若松体協専務と、府の役人安氏との案内で府内見物に出かけた。悠久せまらざる大同江の流れ、その岸壁にそびえ立つ数千年来の建造物、其他朝鮮芸術の粋を表わす文化的遺産など、古都平壌には観るべきものが多多あった。

京　城

22日午前10時10分平壌を後に南下した、汽車が著しく後れ、京城に著いたのは、7時30分であった。朝鮮新聞の斡旋で大東館に落ちついた。なんでも、京城では一ケ月にも及ぶ長雨で、競技場の条件が、頗る悪く、恐らく試合は不可能であろうとのことであった。翌朝、関係者合議の結果、試合は取止めと決定した。

午後は、早慶一同府内見物に出かけた。世界に知らるる「緑の都」京城の自然美は、李朝最盛時の王宮を中心として繰り広げられた人工美と和して、我々の眼をみはらしめるのであった。

解　散

翌24日午前中、林主将、橋本マネジャーと共に凡ての清算をすました。そして一、二の病人も全快したので早慶両軍、廊下に整列し、惜別の辞を交わし、茲に目出度く一行は解散した。早慶相より相競う所に何物かを創造する。実に、二旬に近く行を共にして何等の摩擦なく、所期の目的を達し得たのは、流石に両大学の伝統と学生の高き教養の然らしむるところであった。

遠征の成果

此度の挙が、聊かなりとも、送球の普及、民族の向上に資する所があれば、我々の喜びとする所である。又、此度の遠征が、学生諸君に著しく教育的のものであったことは疑わない。若き学徒が、視野を広め、ものの本質をとらえる認識を深め、極めて自然な朝鮮の人々の親切に接し、政治をこえた人類愛を感ぜしめるに充分であった。又私としても此度ほど「百聞は一見に如かず」ということの真意を味ったことはない。

連載

日本ハンドボール界の課題（7）

～三十周年を迎えた球界に望む～

地方協会理事長特集（上）

リレー寄稿形式で連載の「日本ハンドボール界の課題」を今回は愛知・長崎両県の会長にまず寄稿していただきさらに沖縄をふくむ47地方協会理事長の特別寄稿を今回と次号の2回分にわけてまとめました。30周年記念を飛躍台にしよう、というこれは地方球界のたくましい声の集大成といってもよいでしょう。

中央と地方の連絡を密に

愛知県会長　小杉仁造

日本のスポーツのなかで「ハンドボール」という言葉は必ずしも伝統とか歴史を意味しない。

それが新春二月二日を以て日本ハンドボール協会創立三十周年を迎えることは誠に意義深いことであります。

しかしながら国内ハンドボール界の足跡を振り顧えると、その組織、運営、技術的問題と幾多の変遷と苦難の過程をたどってきたと思う。

こうした曲折の中に来たり過ぎたハンドボール協会創立三十周年を迎えたことは、これまで同スポーツ育成指導に当られた全国の関係各位にとっては実に感無量というべきでしょう。

ついては今日の日本ハンドボール界の現状を展望すると、技術的な面は別として、組織的運営その他で中央と地方協会との緊密な連絡がややもすると意志疎通のきらいがあるのではないかと思われるのであります。例えば競技そのものの実技指導においても、何れかというと都市中心とか、強力チームの存在する地域においては協会としては相当の力を傾倒するが、そうした条件に恵まれない地方においては余り力を労しないという面もあるのではないだろうか。若しこうした弊害によって全国的にハンドボールの興隆が阻害されているとすれば同スポーツ界の前途に誠に憂慮すべきことだと思うのであります。

いずれにしてもメキシコに次ぐミュンヘンのオリンピックではハンドボールが正種目に決まっているように、日本ハンドボール協会としては早急にチームの指導育成に力を入れるべきではないだろうか。もとよりこの為には中央、地方を問わず埋れた人材を集めて強化指導に乗り出すとか、とにかくこれまでの一切のゆきがかりを白紙に返し、文字通り関係者の総力をこれに結集して、日本ハンドボール界の繁栄を願いたいと思う次第です。

各地に親善模範試合を

長崎県元副会長　中部長次郎

この度めでたく当協会創立三十周年を迎えるに当り、心からお祝いの言葉を申し上げます。一口に三十年とは云え、戦中、戦後の世相の波を乗りこえ今日の発展をもたらしたことは、協会先輩諸氏の御理解ある努力のたまものと感謝申し上げる次第でございます。

スポーツの精神は、勝つことより親しく楽しむことが第一であると思います。現在の我が国スポーツ界にあって、多くは世界水準に達し親しまれておりますが、当ハンドボールはまだまだ一般大衆のものとは申せません。特に地方都市にあっては其の感が深いのであります。幸いに今年は中学校教育課程として多く若年層に普及させる見通しは明るいとのことで、大いに期待をもつものであります。が、又これを機会に全国地方都市に於ても親善・模範試合を数多く実施して頂きたい。それが何よりのPRとなり一般に親しまれ、やがては優秀選手の抬頭ともなり、大いなる希望につながるのではないでしょうか。

当協会として三十年のキャリアは実に尊いものであります。これをますます発展させるためには、より多くの人に健全なるスポーツとして認識させることが最も大切であると信じます。長崎県にあっては、昭和四十四年に国体開催の運びとなり、昨秋より県民一丸となってその成果を目指しておりますが、この機会に県民のスポーツ・ハンドボールとして、より広くPRいたし度い所存であります。

秋田・由利　弘

本年は国際的にも国内的にもスポーツファンにとっての話題はメキシコ・オリンピックの開催が中心となることと思われるこのときにあたり、日本ハンドボール協会が次期ミュンヘンのオリンピック出場を目標に各種対策を立て実行していることに期待すると同時に私共地方協会もそれぞれの立場から協力してゆきたいものである。今迄各位から申しのべられて来た問題を一日も早く解決するためにはオリンピックで良い成績をあげるのが一番の早道である。

強くなれば社会の関心を得ることが出来るし各問題も解決される。卓球、体操、レスリング、ニチボーのバレー、そして東京オリンピック後のサッカー、皆勝つことにより発展して来た。社会は常に新しい魅力を求めている、スポーツも自然に陶汰され新陳代謝はあるものである。ミュンヘン出場を契機として全国にハンドボールブームを起し、関係者が嬉しい悲鳴をあげなければならない状態も決して夢ではない。ヨーロッパ各国に勝つ研究を早く実行していただきたいものである。

山形・保坂　浩

ミュンヘン・オリンピックを目指し、みんなスポーツマンらしくベストをつくそう。真剣な努力は、きっとミュンヘン大会の力と

なるだろう。かりにもしも失敗しても、真剣な努力は、五年後でなく百年、二百年ののちの世代が評価してくれるだろう。

〃世紀の祭典〃といわれたオリンピック東京大会の置きみやげをわれわれ自身への〃教訓〃をかみしめよう。

(一) 根性論、体力論、スポーツ行政批判など意見があるが、振興の重点をどこに置くべきなのだろうか。

(二) いまいわれている底辺論は〃選手育成〃だけを念頭においたもので真のスポーツのあり方に反する。国民の福祉のためにスポーツの底辺を広げるべきものと思う。

真の三十周年記念は、ミュンヘン・オリンピックが終えて初めて訪れるものだ。

福島・熊田　栄一

三十年を迎えた日本のハンドボール、十一人制より七人制主体に切り替えられてここ数年の間に驚くべき普及発展をみたが、これも創始当時の関係者による基礎づくりを始めとし今日まで関係された数多くの諸先輩、指導者のなみなみならぬ辛苦と努力によるものと深く敬意を表したい。そしてこのように短時日で長足の進歩をみたハンドボールに関係する地方協会の一員として、七二年ミュヘン・オリンピックに対し日本協会は総力を結集し、対処してほしい。次に中央と地方のパイプをもっと太いものにし現登録チーム数一割増による底辺の拡大拡充と中学校指導要領の問題を進めていってほしい。又競技規則、審判についてもブロック、学連等で解釈が種々相違しており統一のため年度始めに講習会なり研修会の開催を望みたい。最後にクラブチームの大会開催を競技人口拡大と関連し考えてほしいものです。

茨城・磯部　浩

一、ハンドボール精神の養成

われわれは、ハンドボールを、こよなく愛している。遠くアテネの青年達は、運動競技と音楽によって、カロカガチャ（完美なるもの）への憧れを秘めて、肉体と精神・個人と社会との調和をもとめ、さらに、衝動や本能と意志の対立を行動的に止揚し、それを人格にまで及ぼそうと努力したといわれる。

碧空をよぎるボールを追って躍動する青年達の姿は歓喜の極みである。それは、私利私欲を忘れ、雑念・愛憎を超越し、己の任務に徹して、ひたすら全身全霊を打込んで修業する求道者の姿に似ている。

ハンドボールを通じての心と心の接触は、やがて彼我の対立を超克し、自他共栄の理想を求めて人生における不変の友情を創り出してゆく。これは練習に青春の熱血をそそぎ、勝負のきびしさに徹した者のみが達し得られる純粋無雑の悦びである。

老子に「跛者不立（つまだつ者は立たず）跨者不行（またぐ者はゆかず）」という教訓があるが、一歩一歩、あせらずに確実にハンドボールを行う意義を考え、その内包する理想を体現してゆきたい。

群馬・町田　歳雄

1、協会の役職にある指導者層が夫々のポストに全力を尽くすと同時に相和し相敬し一致団結して協会発展の為、又球界隆盛の為努力すべきである。執行面に於ては理事長のもと中央部がよく相互理解のもとに種々の施策の実現に向ってつき進むと共に、地方にあっては各都県責任者がその他区の普及発表に尽力する事が肝要である。本部と地方がよりよき協力によって種々の問題解決も容易になるであろう。

2、評議員会について

評議員会を構成する評議員の内規は各支部の会長ということになっていたようだが現在もそうなっているのであろうか。若し然りとすればその内規は破棄すべきだ。

各都道府県の責任に於て評議員を選出すればよいのである。

今までの状況では評議員会の出席者も少いであろうから本部協会の意向も施策も地方に流れず結局不徹底に終る結果になってくる。地方を代表する一人一人の意見もきいてこれを尊重していくことも本部協会としては大切なことであろう。

神奈川・若崎　重富

一、各地方ごとに、専用グランドを持つこと。

二、審判技術の向上を計ること。普及・技術の向上はともに審判技術の如何に関係深い。

三、国際試合の開催の在り方を検討する。

国際試合は、各県名地区代表チームが対戦してきたが、将来は一般大衆に、よい試合を見せていかなければいけないのではないか。オリンピック以後の日本人のスポーツに対する目は高度な感覚を持って来た。その期待に添うような試合を行なうべきではないか。

山梨・清水　正

ハンドボール協会が発足して、はや三十年、その間色々の出来ごとがあったが今日の発展を見たことは誠にご同慶にたえないと同時に先人のご努力に対し深甚なる感謝の意を表するとともに今後にかせられた使命の重大さを痛感するものである。

・今後の協会の発展に対し望みたいことはたくさんあるが中でも数度にわたる海外遠征によりレベルアップした頂点のチームと、一般底辺のチームとのひずみが余りにも深く今後の普及、発展に対しても余りにもアンバランスであり、早急にその解決を迫まられているのではないかと思う。そのためにはトップレベルのチームと、一般チームとの二本立ての指導方針を確立し、それぞれの立場を良く理解し育てて行く必要があると思う。このためには組織の中においても国際的なもの、国内的なものに分けての指導育成が望ましく、かつその中にも一貫した指導体制を確立する必要があると思う。

このようにしてこそ、はじめてハンドボール競技の今後のより発展が望めると確信する次第である

三重・中根　武彦

三十周年、本当におめでとう。我々が今このように仕事・活躍できるのも先輩諸氏の苦しかった三十年の努力があればこそと感謝の

念でいっぱいです。さて数年間を顧りみると、底辺拡大そしてハンドボール協会予算いよいよ……万突破の言葉を機関誌等で拝見した。

この二つの言葉は互にむすびつくものではないだろうか。恥しいが本県協会の帳簿をみると、登録チーム一般六・大学四・高校十七の計二十七チームとなっているが、日本協会へ県分担金一万円・登録金を納入すると県協会に残る金額が、何んと一万数千円の少額しか残らない。この予算で年間約五試合（ブロック大会は別）を運営していくのだが、日本協会の運営以上に苦しい運営としているのが地方協会ではないだろうか。このような現状は日本協会では問題にならないもんだいかも知れないが我々登録チームの少くない地方協会にとっては重大な考えていただきたい大問題である。底辺拡大の為に指導者養成講習会・練習会等どのように計画すればよいのだろうか。私はこの小さい重大問題を声を大にして言いたい。現在日本協会分担金は各県登録チーム数の多少にかかわらず一万円となっているが、これを登録チーム数によって分担金を決め登録の少くない県を助けることができないものか。現状のままだと我々と同じような協会は何時までたっても進歩しない。又それとともに登録金が高い為（機関紙代が一緒の為かも知れぬ）登録チームが増加しないのではないだろうか。本県高校の登録金が三千円以上（県協会へ）納めている種目は他になくこれをみてもハンドボールの登録金の高いことがわかる。登録金によって登録チーム（特に高校及びクラブチーム）も増加することは目にみえていると確信する。まだ書きたいことはたくさんあるがそれはまた次の機会とし日本協会へ望むこととして

一、登録チームの小ない県を重視しいろいろの面で援助してほしい。

二、分担金については登録数によって三段階位にしてはどうか。

三、日本協会と地方協会を今以上に密接にしてほしい。

四、ルールブックを判りやすくする（言葉がひねくってある為解釈しにくい。素人が読んで判るようにもっと簡単に）

石川・天野耕兵衛

願い (1)

ミュヘンオリンピックに、
日本のハンドボールチームを。
今こそ世界に目を、
学閥やさ細な利害による、みにくい反目は、日本からふっとばせ。
ハンドボール競技の発展のために心を一つに。
指導的立場にあるものの自戒を望むや切。
ハンドボール競技を愛するが故に。

願い (2)

日本の未来をになう、すべての子どもたちに、
ハンドボール競技を

奈良・森田　正英

本年は日本ハンドボール協会の三十周年記念であるが、私個人としても教職についてから頃度三十年で公私共ほんとうに意義ある年である。私は日本協会創設の頃の事は知らないが奈良県協会は二十年目を迎えようとしているのでその事から考え感無量である。私が一奈良県協会の創立から今日迄歩んで来た道を考えると日本全体として歩まれた先人の苦労と希望、将来への願望が身にしみてわかる様な気がする。戦後は物なく金なく全く困り果てた時代であった。あまり費用がかからず、運動量の多い種目としてハンドボールを初めた。大阪、兵庫の先人から色々教えていただき、弱いながらも試合にも出していただきその事が又勉強でもあった。ゴールも奈良県下には一つも無かったがぼつぼつ見られる様になり今では何処の運動場でも見られる様になった。「無から有を生ず」とはこの事かと楽しみにしている。スポーツ全体から見ればハンドボール一種目は小さい事かも知れぬ、然し小さい事でも希望を持って居る者から見れば有意義な事であり楽しい事である。

現在国体、選手権等の全国大会にも毎年出場出来る様になりチーム員と共に張切って居るが、又一方二十年前及びそれ以後から初めた人達の中から子供もハンドボールをやる人が出て来た、女の人が子供をつれて見に来る様になった。この姿を見て奈良県のハンドボールもいよいよ地についた感じがする。故に私は先輩に感謝しつつ将来の為に現在の我々は頑張らねばならないと思う。

スポーツは試合があるから発展もする。試合は争いであり闘争である。私は今日本のハンドボール界は壮年期を迎えようとしていると思う。時々問題の起っているのもその為ではないかと思う。即ち最初はプレイヤーがハンドボール界の総てであった。然し今では子供も青年も親も又もう年寄りさえも居る様になった。これだけ大きくなって居るのである。世界的にも認められる様になった。協会運営も多方面的にやらねばならぬ、自分のチームを心の奥底に秘めての考え方だけでは駄目である。又協会役員に期待するところも同じである。今ではこの期待する側の方にこそ責任があると思う。チーム試合につらなる仕事はしやすい、直接関係のない仕事に努力してくれる人の気持を考え、その立場に立って大きくハンドボール界の事を考えつつお互が努力したいものである。

私はハンドボールに関係して三十年ボールを持つ事以外に出来た人間関係に深く感謝している。若い人達がハンドボールによって得た美点即ち体力と気魄とチームマナーと人間関係をうまく人生観と職場に生かしてくれているのを数多く知って居る、壮年期を迎えた日本ハンドボール協会がスポーツ界の為に、日本の為に活躍してくれるのはこれからである。今迄は教養課程でありこれからが活躍課程である。大いにチーム力を発揮してほしいものである。その為にお互が協力したいものである。

和歌山・岩西　宏純

日本ハンドボール界も三十週年を迎え慶賀に存じます、しかし他スポーツ界の今日の発展からすれば大いに私達関係者の発奮が必要とされる現状にあると存じます。最近組織の改正がなされたのも大きな問題を内蔵しているからであろうし、マンネリ化傾向の現れとも考えられます。組織が大きくなり財源が多くなるにつれポストを

ねらう本能的いさかいが生じ、他からは色目で見られる面白くない結果が出てくるのも当然のことです。それだけに上に立つ人の苦労と人物が要求されると存じます。今後の課題は多いと思いますが望みたいことは、国際試合等も必要なことと思うが先づ国内を固める必要がある、特に弱小県では組織の拡充と財源の確保に四苦八苦であり、発展の壁が中学校教材、全国加盟金の過重と指導者の不足等々であることは中央でも十分認識いただいている問題であり今更の感がありますが、それだけにいかに国内を固めるかに重点施策を望みたい。

PRにより発展させることも必要であろうがPRするに恥しくない地固めが先決と思われます。

岡山・辻　一義

三十周年を迎えお目出度うございます。

三十周年の間には色々な本当に言葉では表現出来ない、或は私達には全く知らない色々な苦労、努力があったろうと、しみじみ思います。

やっと全部道府県が顔をそろえる事が出来ましたのも、そのような努力の賜と感謝にたえません。この時期に、この様に全部の顔が出そろったからこそ、より強く各県協会の努力に感じさせられるのです。地味な、ねばり強い努力こそ日本ハンドボール協会の発展をささえた大きな力と確信します。

どうかより一層協力して、せっかく、もり上りつつある力を押えないよう、足を引っぱらないよう、手をとって歩いて行きたいと思います。

鳥取・高木　敏行

鳥取県に協会が発足して五年の歳月を迎えようとしている今日、いまさらのようにそのあとをふりかえってみるに何をのこしてきたか自分なりにこの機会に大いに反省しこれからの道を考えてみたいものです。協会の大きさこそ違い所詮同じ釜のめしを食っている我々、年数年代の違いこそあれ、今日まで協会をここまでにされた先輩諸氏の努力苦しみは察してもあまりあるものがあります。

ここでこの機会に我々一同ハンドボール関係者はもう一度初心にかえり本当に頭を冷やして考えてみたいものです。そしてこの三十周年という大きな「ふし」を無にすることなく次のふしに向って一段と前進していただきたい。五年目を迎えるにあたった我々が一番苦しんだことはやはりなんといっても中学校の指導要領になかったことでしょう。一日も早く中学校に帰ることを望みその日の為にも地方の教育系大学にも指導普及の力を注いでいただきたい。つい先般幸いにも小生は日本体育協会の主催するトレーナー講習に参加させてもらう機会を得てハンドボール競技のビックゲームを観戦させてもらうことが出来ました。率直に感想を述べることを許してもらいたい、あれがビックゲームであろうか？試合のもり上り、観衆の数、PR内容、二年後にせまっている世界選手権、五年後のオリンピックを心配するのは自分だけであろうか、中央の大会にしてみれば普通かもしれない、ビックゲームをあらゆる機会をつかんで上京し観戦したものの心中はいかほどであったか、今年から行なわれた中央指導者講習会、この充実と共に審判員トレーナーの養成これらも全国から中央に集めて年に一度の勉強はさせてやってほしいものです。

最後に全国定例評議員会等の持ち方、大会にじようじて行うような消極的方法でなくして全員が一同に会して大いに将来のハンドボールを話し合う機会は出来ないものでしょうか。

山口・藤田　信義

〝日本ハンドボール協会遂に30周年を迎える〟先ず始めに戦前開始期、戦後普及期を通じ、黙々と技術の向上、普及等に献心的な努力を払われた各関係者に衷心より、感謝と敬意を表します。「30周年を迎えた日本協会に望む」という題なので、愛好者の一人として私なりの希望をのべます。

オリンピック対策に万全を期せ

30周年を迎え永年待望のミュンヘン、オリンピック大会に正式種目になった今日、本大会出場権の獲得に万全を期する必要がある。韓国強し、中共強し、もしもアジア予選に敗れることあらば、それこそ一大事である。メキシコ予選に敗れたバスケットボールと、韓国と熱戦、遂に代表権を獲得したサッカーを比べてみても明らかである。とにかく、外国チームに勝てる〝力をもった強力ナショナルチームの育成こそ、普及の第一歩ではなかろうか〝トッレベルの強化が底辺拡大につながることを銘記すべし〟

ハンドボール人口をふやそう

日本体協のスポーツ人口調査によれば、ハンドボールは22位（男女）、バスケットボールの1／12、サッカーの⅓である。急速な発展途上にあるハンドボールも22位とはなさけない。30周年を迎えた今日、各関係者の一大発奮を望む。

中学校指導要領復活に全力を注げ

復活如何が普及の前途にかかっているといっても過言ではなかろう。一丸となって復活に全力を注げ。

ハンドボールを学生時代のスポーツに終らせるな

学生時代のみで、社会に出て楽しむハンドボールもできない人がいかに多い事か、クラブチームの育成、実業団（特に地方の）チーム普及育成の為、特に配慮を切望する。

協会の充実と財準確保対策を図れ

43号で述べられた杉山氏に同感〝金もある協会〟にする為の対策を望む。

愛媛・越智　武

ハンドボール競技界にも三十年の月日が流れ、ここに全国都道府県に協会ができ、今や一九七二年のオリンピックの実施種目として決定を見、これに参加すること、勝利への邁進を考えるべき時でしよう、この際全国の協会が一致してこれに当るべきだ。

だがかえりみるに協会当初を思い出すのも現在かくある状態に何かと参考になるでしょう。

一、昭和十三、四年日本協会より派遣され関西方面を主にハンドボール競技の大々的普及講習会を実施する。

当時現日本体育大学チームが関

東リーグ、全日本選手権を持っておった関係でそのチームが派遣さる。

京都・大阪・神戸・岡山・広島を昭和十三年に、鳥取・島根・山口・福岡・熊本を十四年に実施して関西方向の地盤に大いに貢献した事は現在を見ても解る事である。

一、関西普及の源は豊中中学からと云って過言でないでしょう。

昭和十三、四年の関西方面の講習会実現

日本ハンドボール協会副会長馬場太郎氏の寝食の忘れての世話であった。丁度現大阪協会の山田計君は徳島、東京の徳永君は福岡、小生は愛媛であり、上京、帰郷の際には必ず豊中の鳩小屋に宿泊し、よく豊中の生徒とハンドボールを共に楽しんだものである。鳩小屋とは豊中の体育研究室の通称であった。東京の技術が直輸入されていたわけである。

第二次世界大戦後一番先に声をあげたのが第一回国体の西宮にての実施、又第一回全日本高校大会は大阪藤井寺で行いその意気は全国に響いたのである。

今や時代の移り変りにより、その時々を見出される事と思いますが協会発足当初はチーム数にしても少なく、全国の協会数も少ない時代で声をかければすぐ結束されていたのである。だが三十年を迎えた本日、日本ハンドボール界も結束してすべてに当り大きな目的のために邁進すべきでしょう。

ここに小生の協会発足当時を記し増々団結を望むものである。

香川・辻　要

ハンドボール界も11人制を廃し7人制を採用、年を経るにしたがって着々と躍進の一途を辿っていることは私達ハンドボールに些かでも携わっている者にとって誠に慶賀にたえません。

井の中の蛙大海を知らずでありますが一、二苦言を呈して、祝辞と致します。

人間（ハンドボール界）も齢三十ともなれば一大転換機にあり努力ある所に自ずと道が開かれ、体力の限界を知り、剛より柔に、指導的な立場、コーチ監督業に精励すべきで、人の和を中心として、人格識見等精神的面に力を入れ、自己を鍛えあげていくことがマイナースポーツを脱皮してメジャースポーツへと進み行くただ一つの途ではなかろうか。

高知・熊沢　徹郎

ハンドボール協会三十周年を迎えるにあたり心よりお慶び申し上げます。地方の協会で会計の仕事をするようになりはや数年が過ぎてしまいましたがいつもながらの貧乏財源で頭を悩ましています。まず収入を増すには登録チームを増加することにありその事は又直接日本ハンドボール界の発展につながるものでもあります。幸にもここ数年除々ではありますがチーム数も増えそのチーム数の増加分から得た収入を県協会としては今までにない例えば審判講習会或は技術向上につながる他県への出張補助等に少額ではあるが廻すことが出来るようになりました。考えてみますと今迄は四国ブロックの国体、高校選手権等の審判員派遣についても補助すらも出せないありさまで県の協会役員の苦労は大変なものでした。県内大会となるとさらに手弁当的内容で事実この方は現在にいたるもそれがあたかも慣例かのごとく続いているようなわけです。今のような乏しい予算のもとであまえられるのも理事長川崎氏はじめ役員の献身的な奉仕特にいつも会場を提供して下さる鶴岡氏（前理事長現高体連部長）あってのことだとこの機会に改めて感謝します。県協会の赤字では補助してくれる所もなく日本ハンドボール協会に送る登録基本金一万円をしばらくながめ送金した事もあり三十九年の時でしたか春の総会に日本ハンドボール協会から脱退しようと冗談とも本気ともつかない意見さえ聞かれた事もありました。しかし結局はハンドボールの虫の集り、前向きの方向に底辺拡大をめざし土地の新聞社に働きかけ県下中学選手権大会を開くようにもっていったのは大成功でした。中学校にハンドボールの教材がない関係か参加チーム数は少ないが今年で四年目を迎え又これを機会にチーム数も増えるけはいがみられるようになりました。

このような乏しい予算のもとで情熱だけは負けずにハンドボール協会の発展に努力してきました。日本代表チームによる海外での好試合を機関誌等で拝見し耳にした時自分自身がプレーをしたような錯覚をおぼえるのも無理はありません。ささやかな地方の協会もあって又日本ハンドボール協会ありです。我々の育てた若人から一人でも二人でもこれからのハンドボール界を背負って行くものが出ることも考えられます。この際日本ハンドボール協会にお願いするのはいささか前置がながくなりましたが乏しい財源の地方協会にせめて登録料分と言っては失礼ですが中央の最高の技術が還元されるような対策を今以上に考慮していただけばと思います。

大分・疋田　忠

近年とくに我がハンドボール界は目指ましい向上発展を見せ、全国都道府県全部が加盟という普及に対し私を始めハンドボール愛好者達と共に大いに喜びたい。しかし本年はミュンヘン・オリンピックを目標に日本協会は勿論、各地方協会でもその心構にて邁進すべき年であろう。いや一大飛躍の年ともいえよう。

先日の機関誌に目標をミュンヘンにおけば、少しくらいのことはどうなってもよいではないかとの内容のように思われるが？

ハンドボール界30年を経過するうちには多少の迂余曲折があった事でしょう。しかしごく最近ではハンドボール界全体が不詳事の如く一般の者より思われ、誠に残念に思っています。その当事者が要職についている現状は、地方協会の一員として許し難き憤りを思えるのは私一人であろうか、理事等が若干変更したところでなにもならないように思えるし、又私は当時者の退陣を強く望みたい。本当の意味での再出発をはかってもらいたい。

地方協会の一員としては、岡山の辻氏、高知の鶴岡氏の論説の如く我々は我々なりに精一杯の努力をし、生徒達や卒業生達と共にゲームを楽しんでいる現状を充分に認識していただき適切なる指導助言を願いたいものである。最後に日頃より痛切に感じている事項について列記しよう。

一、中学校の体育指導要領にハンドボールの復活を強く望む。

二、審判技術(競技規則の解釈等)の向上を計ってもらいたい。

三、クラブチームの育成を本気に考えてもらいたい。(国体参加だけが育成の意義ではないか、実業団チームとの対戦は避けてもらいたい。高校・教員・実業団等は全日本的選手権等があるので国体では一般チーム(クラブチーム)72チーム(男・女)出場でしてはどうだろう。

四、ミュンヘン・オリンピックを目標に具体的な委員会を設置してもらいたい。

沖縄・平仲　孝栄

沖縄ハンドボール協会が結成され沖縄で公式にハンドボール競技の試合がもたれてから三ケ年、ようやく軌道に乗るようになった。その間日本ハンドボール協会や全国高体連ハンドボール部の御協力御援助に対して衷心より感謝申し上げます。日本本土より遠く離れすべての面で取り残されがちで不肖私達ハンドボール関係者もハンドボール競技を本土並みにもっていくために努力もしてきましたし、また今後も努力致します。沖縄協会が日本ハンドボール協会に望みたいことは唯一つ、それは日本協会が新体制のもとにもっと組織を強化し、和をもってハンドボール競技向上に取組みハンドボール競技の歴史的(沖縄は歴史が浅い)地理的条件などを勘案してもっともっと各地方に審判技術や競技力向上に力を注いでもらいたいと思います。沖縄から簡単に理事会や各種講習会或は研修会に参加することは時間的経済的に許されません。中央というより地方の育成によってもっと底辺を拡げることが良い方法ではないでしょうか。私達もハンドボール競技発展のため全精力を出して頑張ってはいますが、何しろいろいろの面で制限をされて考えていることが充分できないのが地方の現状ではないかと存じます。そこに日本協会が温い手をさしのべて思いやりのあるところを見せてもらえば私達としても勇気百倍仕事にファイトが出て参ります。私達も今後沖縄ハンドボール界のため一生懸命努力致しますので私達の意を汲取って下さって遥るか南の沖縄のハンドボールに対しても意を注いで下さるようお願い申し上げます。

静岡・片瀬喜代次

一、日本ハンドボールリーグの開催種々の難問題があると思うが、日本協会、実業団、学生連盟等がどうしたら開催できるかを、じっくり話し合って、男子の開催が現在のところ不可能ならば、女子だけでも、一日でも早い時期に開催すべきである。運営方法は種々と考えられるが、必ず成功する。

二、全国評議員、全国理事会の機構ならびに運営方法を改善すべきである。

三、次年度の年間事業計画は、前年度の十二月末までには発表すべきである。

四、全国理事会、常務理事会等の議事録の通達があまりにも遅すぎる。

次に発行される機関誌に必ず掲載して、多くの人達により早く知らせる必要があると思う。

大阪・山田　計

日本ハンドボール協会も昭和十三年二月二日創立して三十年、普及発展し急速の進歩をなしている。これも各地方協会役員を初め中高校の指導にあたられた方が主体になって努力した事は周知の事と思う。しかし他協会に比べまだまだ反省すべき点改善すべき点が多くあるのも事実である。

組織面の強化

先づ協会の最高議決機関である評議員会である、年に二回の会であるのに出席者が四分の一もないのは何んとした事だろう各評議員の方達は多忙の事はわかっているが評議員に成った以上何んとかして出席し執行部の尻をたたいて、よりよい議決をしてもらい度いものである。ある他協会の最高議決機関の会で全国役員をはじめ役職にある全ての者が出席して、執行部に対し徹底的に問い正し、執行部の役員も明快に答弁している場面を見て気持よく感じたハンドボール協会も早い機会にこの様になりたいと思った。又本部協会は運営面と技術面を明確にし人員の確保を望むと共にさらに各部門に分れている執行部の横の連絡を充分にしないと何かちぐはぐな面が出ているのではないだろうか、又各地方協会との連絡を密にし地方協会あっての本部協会であり役員である事を充分認識してもらいたい。特に全日本総合、国民体育大会等協会の最高試合がブロック予選を経ないと出場出来ない事を考え、本部協会はよりよい運営を打ち出すべきではないだろうか。

五輪への強化

一九七二年ドイツミュンヘンで開かれる、オリンピックにハンドボールが種目の一つとして開催される事になり長年の希望がかなえられ喜こんで居る者であるが協会は組織面並に技術面に於て早急に対策を行うべきである。今迄底辺の拡充に重点を置いて来たが今後はトップレベルも重点の中に入れ強化を計るべきである。その為には技術部を中心に審判部普及部の協力を得、選手強化を行い、選手選考にあたっても一部門で行わず各部各層の選考委員を作り最高の選手選考を行ってもらいたい。

今迄海外遠征が行なわれたが選考された選手の中には経済面の為遠征に参加出来なかった者もあり、此の様な事を協会は充分考え選考し派遣する様勉めなければならない。以上二、三の事項を述べたがやはり役員になった者は一致協力し目標に進むべきで、自己の利己的な事を主張せず立派な協会を作る為協力する様希望する。

熊本・藤田　八郎

多年の努力がようやく実をむすんで、世界のハンドボール界に伍してゆける地位を確保できる様になったことは非常に喜ばしい事であります。

ここに三十周年を迎え、われわれはここに努力一致してわが国のハンドボール界がさらに向上し、育成していかなければならない、その為に次の三点に全力をあげて努力すべきだと思います。

1、ミュンヘンオリンピックの対策。選手強化・ナショナルチームの編成

2、底辺拡大の対策クラブチームの育成、地方協会の普及指導

3、中学校の普及対策今後の中学校指導について。

ＩＨＦ、日本の「世界女子」(43年11月) 参加を承認

日本協会は1月16日、国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）から「日本の第4回世界女子7人制ハンドボール選手権の出場を承諾する」という特別電報を受けとった。

日本協会は翌17日の常務理事会でこの問題を協議、ＩＨＦの厚意に感謝するとともにＩＨＦからの詳報を待ってただちに参加への具体的な準備を進めることとなった。同選手権は今年11月モスクワ、レニングラードなどで開かれる。

手続き遅れ一時は絶望

鈴木会長ら引責辞任に飛火

日本協会は12月9日午後2時から体協四〇一会議室で緊急全国理事会を開き、席上、荒川理事長から渉外担当常務理事のミスから、来年11月ソビエトのレニングラードで開かれる第4回世界女子7人制選手権に出場することが難しくなった、という報告があった。

荒川理事長による経過説明次のとおり。

一、第4回世界女子7人制選手権に出場することは昭和42年2月の定例評議員会、全国理事会で決議された。

一、同大会への参加申し込み〆切は国際ハンドボール連盟(ＩＨＦ)の42年6月24日付連絡によると42年7月31日だった。

一、渉外担当理事は42年7月10日付で発送の準備をしながら出し忘れていた。(なお、事務局員は、差し出しの依頼を担当者からは受けていず、ファイルに書類は入っていたままだった。)

一、申し込みが行われていないことに気がついたのは、渡辺和美副会長が訪欧旅行の途次、スイスに立ちよりバウマンＩＨＦ会長と会見した際である。渡辺副会長はＩＨＦに再調査を依頼したが、10月24日付でＩＨＦから申し込み書未着の確報が日本協会あて打電された。

一、日本協会は真相調査を進めると同時に、申しこみ書の発送を行ったが、11月14日付でＩＨＦから〝出場権復活拒否〟が通達されて来た。

なお、荒川理事長以下常務理事は、12月10日の全国評議員会を前に鈴木会長あてに辞表を呈出したが、別掲の通り鈴木会長、境井渉外担当常務理事のみ辞任となった。

会長代行に保坂副会長

全国評議員会で決める

日本協会は12月10日午前10時から体協四〇一会議室で臨時評議員会を開き、昭和43年11月ソビエトのレニングラードで開かれる予定の第4回世界女子7人制選手権への参加手続き（申しこみ書発送）がおくれ、ＩＨＦから出場を一たん拒否された問題について検討した結果、渉外担当・境井秀三常務理事の辞任を認めた、さらにそのあと鈴木達雄会長も責任をとって辞意を表明した。

評議員会はつとめて慰留したが結局、鈴木会長の辞任も認め、とりあえず43年2月の定例評議員会までは保坂周助副会長（神奈川協会長、東京教大出）を会長代行とし、西、小杉、馬場、児玉、渡辺の五副会長がそれを補佐することになった。

鈴木氏は評議員会後、記者団と会い『世界選手権に事務上のミスで参加できそうもなくなったことは、この大会をめざして練習し節制して来た選手に対して何とわびてよいかわからない。

会議では理事長以下常務理事、理事全員が責任をとって辞任するという意見も出たが、それでは協会の運営が混乱するので、最高責任者である私と、直接の責任者である渉外担当だけにして欲しいと頼んで評議員の人たちに納得してもらった。

もちろん私たちがやめて済むという問題ではないが私としては筋を通したかった。

これを反省の材料として、荒川理事長以下全員が協会の再建にあたって欲しい』と述べた。

辞任した鈴木会長（レナウン工業、同商事担課役）は42年2月、第4代会長の座に推されたばかりだった。

4冠狙う田村紡が焦点（女子）

～全日本実業団選手権近く～

男子は大崎の8連勝濃し

第8回全日本実業団選手権は、男子は2月10日から14日まで大阪市立中央体育館に36チーム、女子は2月7日から11日まで熊本市体育館に5チームが参加して開かれる。組み合せの抽せんは12月16日東京で行われ別表のように決まった。有力チームを展望してみよう

なお、男女別開催ははじめて。

○……○

【男子トーナメント】今年も本命・大崎電気にどこがせまるかが興味の的だ。大崎は全日本総合、国体に優勝。全日本級選手を揃えて、要所を逃さぬ試合運びは抜群である。第1回以来、この大会で無敗（36戦全勝）をつづけており8年連続優勝は八分通り固いといってよいだろう。

大崎を追うグループは日東電工（大阪）、自衛隊勝田（茨城）、タヨシ産業（愛知）、宗形製作所（大阪）、常盤工業（岐阜）、三景（東京）、日本鋼管福山（広島）、本田技研（三重）、富士製鉄名古屋（愛知、旧東海製鉄）、日進商会（神奈川）、住友化学菊本（愛媛）らである。

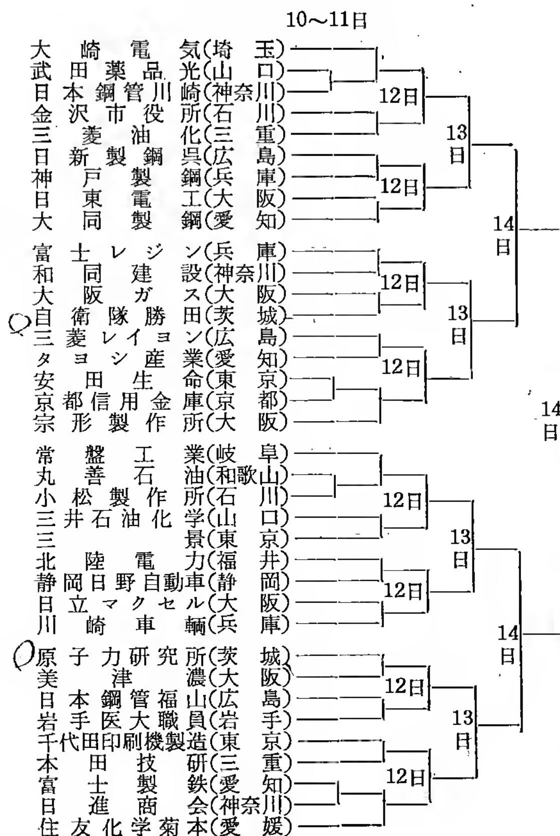
このうち、結局、準決勝に勝ち残るのは宗形製作所又は自衛隊勝田、三景又は常盤工業、住友化学菊本とみたい。どこが残っても大崎にかなり食い下がれそうだ。特に三景、宗形、住友化学には善戦以上のものを望めよう。

大会のたびに参加チームが増え実業団球界も数のうえでは学生界をしのぐようになった。残る課題は質的向上だ。その意味で過去7年、一方的な試合内容が多かった1・2回戦段階のレベルアップを大いに期待したい。

【女子リーグ戦】田村紡の四冠なるかが一つの焦点。昨年までのいわゆる四強に、今年グッと実力をあげた三菱鉛筆と5チーム参加の総当りリーグ戦。いずれも激戦は必至であろうが、本命はすでに三冠を得ている田村紡と見るのが順当なところ。これに地元の利を生かした大洋デパート、進境著しく選抜で二位になり、今大会でも一つの大きな〝台風の眼〟と考えられている三菱鉛筆、ややチーム力が下り坂とは云え、実力十分の大崎電気、ここのとこ元気がないが選手の育ってきている愛知紡がどのようにからむか、一試合、一試合が接戦となり、おろそかに出来る試合は一つもないという激戦が予想される。試合を大事にしたチームに栄冠がもたらされよう。

全国試合初採用の25分ハーフも5日間に総当りリーグ戦という女子にとって、ハードスケジュールの中では大きな意味をもってこよう。田村紡の四冠なるか、それをどこが阻むか興味はつきない。

男子トーナメント



女子リーグ

▽第1日（2月7日）
- 大崎電気（埼玉）―― 愛知紡（愛知）
- 田村紡（三重）―― 三菱鉛筆（神奈川）

▽第2日（2月8日）
- 大崎電気 ―― 大洋デパート（熊本）
- 愛知紡 ―― 三菱鉛筆

▽第3日（2月9日）
- 大洋デパート ―― 三菱鉛筆
- 田村紡 ―― 愛知紡

▽第4日（2月11日）
- 大崎電気 ―― 三菱鉛筆
- 田村紡 ―― 大洋デパート

▽第5日（2月11日）
- 大洋デパート ―― 愛知紡
- 田村紡 ―― 大崎電気

芝浦工大、全立教らおさえ優勝（2年ぶり2回目）

～第14回全日本選抜、連日の激戦～

女子は田村紡が3大タイトル獲得

第14回全日本選抜選手権は12月13日から17日までの5日間、東京体育館に今シーズンの全国大会上位チーム男8、女7が参加して開かれた。

予想通り準決勝リーグから各試合とも波乱にとんだ展開となり、特に男子はA組で全日本総合優勝の大崎電気（埼玉）が芝浦工大（東京）に、B組で2連勝を狙う全立大（東京）が東京教育大（東京）に敗れる番狂せがおこった。

決勝リーグに入ってからも混戦はつづき、第4日（16日）を終って4チームが1勝1敗の同率で並ぶというまれに見る激戦となったが、結局、芝浦工大と全立教が2勝1敗の同成績となり大会規定により総得失点差で、芝浦工大が全立教を上廻り2年ぶり2回目の優勝を飾った。

一方、女子は全日本総合、国体優勝の田村紡（三重）が、日体大（東京）の健斗にあって苦しんだ以外は、各試合とも地力を発揮して快勝、2年ぶり3回目の優勝を飾るとともに、今シーズン三つめの全国タイトルを獲得、四冠王（あと2月の全日本実業団）の偉業達成へさらに歩を進めた。新進・三菱鉛筆が健斗よく2位となり、ついに全国最上位に進出したのも大いに注目されてよいだろう。なお女子の優勝は7年連続実業団チームに握られた。

男子準決勝リーグ

大崎電気（埼玉）17（8－2、9－2）4 全神奈川（神奈川）

国体で顔合せの両チームにとっては相手を知り、大崎は池田、安達をマークする堅いデフェンスで神奈川に得点機を与えず、神奈川杉山のジャンプシュートで16分1点差としたが以後チャンスらしいものも見られず一方大崎は井上のカットプレーから連続5点をあげ前半にて勝負を決した。後半になって大崎の攻撃はポスト、ロング、サイドと多彩な攻めで神奈川の出足を完全に止めた。神奈川は僅かに安達の右中央のシュートと米沢の7MTで2点を返したのみ。総合、国体の覇者にはとうていおよばなかった。（岡前）

全立教大（東京）23（11－6、12－6）12 岐阜教員（岐阜）

全立教は3分東のゲットに始まり15分までに連続5ゴールを決めた。一方の岐阜教員は石樽、高島、尾藤が各々2点を返したが、野田のサイドから同様なシュートに3点続けてゴールされるデフェンスの甘さで点差をあけられた。全立教は後半に入ったベテラン江名が防禦のリード、攻めては余裕あるボールさばきを見せて木野、東、北村、野田に好チャンスを与えるゲームメーカーとして老練さを見せ次々と得点した。岐阜教員も石樽が決り出したが他の者のシュートが多く結局前後半6点ずつをあげながらデフェンスの乱れから大量点を許したことは一考を要する。（岡前）

芝浦工大（東京）29（14－8、15－6）14 大阪イーグルス（大阪）

5分まで2－2と均衡を保っていたが、その後は芝工大のペース速攻を中心として、着々得点を重ねた。イーグルスは井上、青木に力がなく、芝工大山村の好守もあり、益々点差を拡げた（佐野）

東京教大（東京）23（10－13、13－6）19 埼玉教員（埼玉）

期待通りの熱戦。埼玉は前半20分7－7から北井、高田の活躍でペースを握り前半3点差をつけた。

しかし、後半になるとスタミナ不足からスピードが鈍りはじめ、そのスキに東教大は後半5分12－16の劣勢から一気に6点を奪って逆転、押し切った。（杉山）

東教大 22（10－4、12－7）11 岐阜教員

東教大は平岡のあざやかなジャンプシュートで先取点をあげ、岐阜教も杉本の巧妙なステップシュートでゴールし好スタート。しかし、教育大は川島負傷欠場の後に出場した浅野のポストプレーから端を発し余裕あるプレーに変り、13分までに5点連続ゴールしてそのまま前半を終る。後半は平岡、浅野、岐阜・杉本が共に4点、5点を交互に決めるなど観衆を喜ばせるゲーム展開で個人技は見られたが両チーム共にセットオフェンスからの得点が少なくもっとチームプレーに徹してボールのはなし方を考えればラフプレーもなく好ゲームが見られたものと惜しまれる。（岡前）

全神奈川 19（8－6、11－10）16 大阪イーグルス

神奈川は安達、池田を軸とした立教型のオフェンス。それに対して大阪はクイック攻撃を見せ得点力を持ちながら走りが伴わず散発

年次優勝チーム

	男子	女子
①	日体大	春日丘ク（大阪）
②	日体大	日体大
③	全芝浦工大	日体大
④	日体大	半田高（愛知）
⑤	全日体大	寝屋川ク（大阪）
⑥	全芝浦工大	熊本ク
⑦	全日体大	熊本商大ク
⑧	大崎電気	愛知紡
⑨	全日体大	愛知紡
⑩	全日体大	大崎電気
⑪	全立教	田村紡
⑫	芝浦工大	田村紡
⑬	全立教	大崎電気
⑭	芝浦工大	田村紡

V

的となる。井上、青木のシュートにも以前の威力が見られず、逆に速攻に結びつけられてリードを許した。神奈川は自己のペースをよく守り、池田のフェイントもよく切れて大阪バックスの動きが大きくなるとゆさぶり、防御陣の乱れに乗じてミドルシュート、ポストプレーと次々に得点をあげた。しかし大阪も後半になってベテランの東、井上、青木がよく頑張って反撃、20分には17－15と2点差まで追ったが遂に息切れしてしまいそのまま終った。神奈川の勝因は攻撃の巾が広く多彩な攻めとGK大柴の好守があったからと云えよう。（岡前）

全立大 26（19－11, 7－6）17 埼玉教員

全立大はスタートから快調にとばし、圧倒的な大差をつけ、前半を終了した。後半全立大はシュートに決定力が見られず、また埼玉も一時はやや点をつめたが、かえって、シュートミスも多くなり、敗れた。（藤本）

芝浦工大 20（8－6, 12－11）17 大崎電気

【大崎】

	氏名	得
GK	福本	0
GK	下里	0
FP	北村	1
FP	金田	1
FP	井上	3
FP	近藤	6
FP	西村	4
FP	竹野	2
FP	片山	0
FP	加藤	0

【芝浦】

	氏名	得
GK	山村	0
GK	杉山	0
FP	竹内	0
FP	明石	4
FP	近森	5
FP	小林	0
FP	秦	2
FP	山田	4
FP	高鍬	4
FP	村上	1
FP	白神	0

20（3）7MT（2）17

○……優勝争いにひびく一戦は芝工大が大崎の調子の整わぬところをついて前半20分6－2と開き意外の立ちあがりになった。

しかし、大崎はそのあと竹野、井上の活躍で追いあげ勝負を後半へ持ちこした。

○……後半、気分をとりなおした芝工大は1分、4分山田のゲットで10－7とし、20分には16－10と開きそのままで終るかに見えた。

ところが、芝工大のパスワークの乱れをついて大崎は21分から24分までに近藤が連続5ゴールする活躍で一挙に16－17とせまっておびやかした。しかし芝工大も明石と近森が加点、辛くも逃げこんだ。大崎はひところの緩急の使いわけにさえが見られずスタミナ不足も目立った。（杉山）

芝工大 14（5－6, 9－4）10 全神奈川

神奈川はサイド攻撃と大きく逆サイドにボールをまわしながらのポストプレーが成功して常にリードを保つ。芝工大も近森をマークされては得点が半減する。しかしシュートモーションから山田、明石へのパスで追いあげたが、全く神奈川のペースで試合が運ばれてそのまま前半を終る。後半12分明石が近森のパスを大きく走って受けスピード豊かなロングシュートを決めて同点にするや、やっと自己のペースをとりもどしてポストプレー、山田のサイド攻撃、近森のロングと動きも攻守共によくなりチームワークとねばりのある神奈川の追撃を振り切った。神奈川の最後まで善戦したねばりと大柴の好守は賞賛されよう。（岡前）

埼玉教員 23（12－5, 11－7）12 岐阜教員

埼玉教員は中央から高田のジャンプシュートで先取点、その後北井、結城、高田のコンビプレーが随所にみられて加点、見事な試合運びを見せた。一方岐阜教員は杉本の1人舞台であった。石樽が動きも、シュートコントロールも乱して最悪の出来、得点源が1人にしぼられては仕方なくわずかに高島、犬飼が決めた程度で終始防御に全力を集中するはめとなってはオフェンスに普段の力を発揮することがなく終った。埼玉の北井と結城のあざやかなコンビでのポストプレーは見ごたえがありGK高橋の好守も見のがせないプレーであった。（岡前）

大崎電気 16（10－11, 6－5）16 大阪イーグルス

イーグルスの遅攻に大崎はズルズルと引きこまれ、日頃の元気なく、前半一点リードされ、おわった。後半両チームとも決定力を欠き、10分をすぎてから、大崎が得点を重ねリードを奪ったが、イーグルスも27分すぎから連続得点をあげ、引き分けた。（佐野）

東京教大 14（7－7, 7－4）11 全立教

【教大】

	氏名	得
GK	上野	0
GK	水藤	0
FP	住森	0
FP	小山	0
FP	大西	1
FP	平岡	4
FP	畑	3
FP	稲垣	0
FP	森田	0
FP	浅野	0
FP	斎藤	6

（主審 松井）

【全立】

	氏名	得
GK	尾形	0
GK	川口	0
FP	木野	0
FP	東	0
FP	戸田	3
FP	野田	4
FP	北村	1
FP	小野口	3
FP	倉前	0
FP	江名	0
FP	橋本	0

11（1）7MT（1）14

○……東京教大はこの大会に備え特別合宿を行ったという。低迷を脱し、久しぶりに全国最上位へ返り咲いた気力が意欲を燃えあがらせたに違いない。優勝を果すには全立教を倒さねばならぬ。そんな闘志がはっきりうかがわれた。

一方の全立教は、対東教大戦をそう重く見ていなかったのではないか。

○……事実、記者も前半タイで終った時には、全立教の地力が後半に発揮されるであろうと予想したし、後半5分7－10とリードされながらじわじわと点を返し、14分11－12と1点差にした時にはここで〝逆転〟と見た。ところが17分、18分と2回のチャンスをスランプ気味の木野が落した。一方の東教大も12点目をあげた11分以後、10分間ノーゴールである。

○……どちらが先に調子を整えるか。残り10分間が勝負になったわけだが、東教大は21分平岡で13－11、23分斎藤で14－11と優位。こうなるとさすがの全立教もあわてはじめ、やることなすことがアンバランス。得意のチームプレーをどこかに置き忘れたようであった。

○……結局、勝負は東教大の快勝であった。

攻めては平岡、大西がマークされているスキを巧者・斎藤が実によく動いて得点。特に後半にあげた4点は大殊勲だ。守ってもGK上野が快心の出来を示した。

○……全立教は、いつになく野田北村が乱調のうえ、前半4－4のあとと、後半7－9のあとの二本の7MTを失敗したのも大きな誤算であろう。

〝会心の出来〟と〝誤算〟。それを試合前の心がまえの差だとするのは、あまりにも記者のこじつけがすぎるであろうか。（杉山）

男子準決勝リーグ結果

A組 ①芝浦工大3勝、②大崎電気1勝1敗1分（以上決勝リーグへ）、③全神奈川1勝2敗、④大阪イーグルス2敗1分

B組 ①東京教大3勝、②全立大2勝1敗（以上決勝リーグへ）、③埼玉教員1勝2敗、④岐阜教員3敗

女子準決勝リーグ

大崎電気 13（5－0, 8－2）2 東京重機（東京）

重機はGK高野が良く防いだが攻撃に決め手がなく、大崎の鈴木早川を軸にしたプレーにほんろうされ、大差で敗れた。（岡村）

三菱鉛筆 9（3—0 6—2）2 日体大（東京）

登り坂の三菱鉛筆に日体大がどのような試合ぶりを見せるかが焦点であったが、蓮見、江川、落合らの動きの前に大差をつけられ、後半15分過ぎてからの北口の得点で僅かに対抗したにすぎなかった。（藤本）

愛知紡（愛知）22（13—4 9—5）9 東女体大（東京）

立ちあがり五十嵐の連続ゴールで先制した愛知紡は、その後もスピードのあるタテへの突進と左右のゆさぶりを巧く使いわけて12分には10—1と開き、あっさり勝負を決めた。

進境を伝えられる東女体大だがディフェンス力があまりにも弱い。（杉山）

田村紡 11（9—3 2—4）7 三菱鉛筆

得	【三菱】		【田村紡】	得
0	吉田	GK	渡辺美	0
0	本庄	GK	坂上	0
0	三井田	FP	種村	3
0	鈴木	FP	渡辺好	1
0	佐々木房	FP	水谷	1
1	落合	FP	小林	3
0	佐々木洋	FP	清水	1
0	江川	FP	長谷川	2
0	遠藤	（主審 徳永）	甲村	0
6	蓮見		吉開	0
0	阿部		渡辺信	0
7	（1）	7MT	（3）	11

○…優勝にひびく大事な一戦。

田村紡は立ち上り1分の種村の得点にはじまり、3本の7MTを含め、12分までに5—0と開き大勢を決したかに見えた。しかし三菱も大差にもかかわらず、蓮見に球を集め、少しずつ点を返し、前半9—3でおわった。

○……後半田村紡はまず5分に得点し更に差を開いた。この間、三菱も蓮見、鈴木らがシュートしたがいずれも実らず、10分近くになり、やっと蓮見が連続得点を挙げ、10—5にした。その後両チームとも決定力がなく、15分をすぎてから、田村紡が1点追加して、11—5とした。18分すぎてから、蓮見の連続シュートで11—7としたが、すでに遅かった。三菱にとって惜しまれるのは試合開始早々の失点でこれがなければ、もっと盛り上りのある試合になったであろう。（佐野）

愛知紡績 7（3—3 4—4）7 東京重機

愛知紡が先手をとり重機が追いつくという形で前半を終る。後半も同様な経過をとり、13分はじめて、重機が7—6とリードしたが17分愛知紡は五十嵐のシュートによって、7—7に追いつき、引き分けた。（岡村）

大崎電気 16（8—1 8—1）2 東女体大

大崎の一方的な試合。東女体大はなんとか粘ろうとするが、固い大崎のディフェンスをくずすことも出来ない。前半7本、後半8本のシュートを放っただけだった。

大崎は7MT3本を含む6点をあげた加藤の成長と木幡、山崎の安定が目についた。（杉山）

東京重機 10（7—2 3—5）7 東女体大

東女体大は前半の劣勢を後半よく頑張り、点差をつめたが、今一歩の所が足らない。重機の使っていた2—4防禦に対し、サイドからの攻撃をかけなかったのはうなずけない。（岡村）

田村紡績 7（3—2 4—4）6 日体大

日体大は対三菱戦とはうって変わり、生き生きとしたプレーで田村紡を慌てさせた。田村紡はミスが多く、シーソーゲームが続いたが、後半19分長谷川のシュートで、やっと逃げきった。日体大では、4点をあげた北口の左腕が賞されよう。両チームともサイド攻撃に研究の必要があろう。（岡村）

大崎電気 12（7—2 5—4）6 愛知紡

得	【愛知】		【大崎】	得
0	尾崎	GK	川崎	0
0	山下	GK	山田	0
0	小林	FP	加藤	0
1	前田	FP	早川	1
4	五十嵐	FP	鈴木	6
1	小野	FP	小林	1
0	関口	FP	栗林	0
0	黒木	（主審 岡前）	木幡	2
0	藤池		山崎	2
0	近藤		神藤	0
			久保田	0
6	（0）	7MT	（1）	12

○……カムバック目ざす愛知紡に今大会最初の難敵だったが、前半はまったくよいところがなく、大崎の鈴木一人にかきまわされ5点の負担をおわされた。後半も開始早々連続3点を奪われ10—2とされては、その後の反撃も焼石に水だった。大崎の先制が効を奏した一戦だが愛知紡に元気がなく内容的には物足りぬ試合に終った。（杉山）

女子準決勝リーグ結果

A組 ①田村紡2勝、②三菱鉛筆1勝1敗（以上決勝リーグへ）、③日体大2敗

B組 ①大崎電気3勝、②愛知紡1勝1敗1分、得失点差＋7（以上決勝リーグへ）、③東京重機1勝1敗1分、得失点差－8、④東女体大3敗

準決勝リーグをふりかえり、決勝リーグへ進出したチームを見ると、まず予想された通りの顔ぶれがそろった。しかし、これらのチームも全く平穏に決勝リーグへ進出したチームは一つもなく、引分あるいは一敗、そうでなくても苦戦の末出場したチームがすべてである。

特に男子では、本命と見られた全立教が東教大に敗れるという番狂わせがあり、女子でも、楽に決勝リーグに進出すると思われた田村紡が苦しむといった場面もあり実力の接近が感じられた。

芝浦今シーズン初タイトルを握る

男子決勝リーグ

全立教 17（8－8／9－8）16 芝浦工大

得	【立教】		【芝浦】	得
0	尾形	GK	山村	0
2	木野	FP	竹内	2
3	東	FP	明石	0
0	戸田	FP	近森	8
4	野田	FP	小林	0
4	北村	FP	秦	2
2	小野口	FP	山田	3
0	倉前	FP	高鍛	1
2	江名	FP	村上	0
17	（2）	7MT	（2）	16

（主審 岡村）

立大、芝工大の顔合せは、ここ数年来関東学生リーグをはじめ全日本総合など、日本でのハンドボール試合のメインエベントとされている。はたして今回の選抜大会でも決勝リーグ第一日で顔を合せることとなった。芝工大は近森を中心に、全立大は木野を中心にしたそれぞれ特徴を持った攻防については、あまりにもみんなに知られているが、お互に知りつくした秘術も、その日のコンディションやちょっとした歯車の回転に影響されたり、各駒が、どのように調子よく動くか、いかにうまくコントロールされているかなど見る者に実にデリケートな面が大きな問題となっている。この試合全立大のボールで開始、芝工大の近森が前半15分までに速攻、めまぐるしいほど速いボールまわしから6点をあげた。全立大は4点、しかも木野はリードマンの役こそすれ、野田、北村、小野口、東と夫々が、セットの動きの中でポイントをあげている。前半終了時、8－8の対スコアである。即ち芝工大は前半の中半より終了までの15分間に2点、全立大は最初のペース通り、ポストプレーを中心にした、カットイン、ミドルシュトと多彩な攻撃で4点をあげている。

後半、芝工大は近森がすぐ決めてリードを奪ったが、5分頃よりOB江名を入れた立大のセットの動きがやや激しくなり、江名、木野、野田と連続ポイントをあげ、全立大リードを奪う。しかし、10分間の沈黙を破って近森が決め、芝工大・近森対、全立大のセットの如き様相で、近森の力にあまりにも頼りすぎている芝工大の戦力が、全員の意気の合った動きで向う全立大の戦力に及ばなかった。いずれにしても、迫力のあるスピーディな現在の日本を代表する好ゲームであった。（佐野）

大崎電気 17（8－3／9－7）10 東京教大

得	【大崎】		【教大】	得
0	福本	GK	上野	0
0	北村	FP	川島	0
3	金田	FP	大西	3
3	井上	FP	平岡	2
5	近藤	FP	畑	1
0	西村	FP	稲堀	1
5	竹野	FP	浅野	2
1	片山	FP	斎藤	1
		FP	小山	0
		FP	森田	0
17	（0）	7MT	（0）	10

（主審 岡前）

○…前日、全立教を破ってがぜんクローズアップされた東京教大は、3分速攻から斎藤が先制点をあげ、この日も快調かにみえた。

ところが、そのあとバッタリと攻撃のスピードが鈍り、やたらに中央を突くだけで変化がない。

こうなると大崎はベテラン揃いだ。相手の凡調のスキをついて10分金田のゲットでタイとし15分にはFTから竹野が直接きめて2－1。16分7MT（近藤）で3－1と開いてからは、速攻、ポストプレーでやつぎばやに得点、24分には7－1と差をあけた。

○…後半、教大は懸命に反撃したが、大崎も要所は逃さず、予想に反して、一方的な試合に終わった。

それにしても、上げ潮へ乗ったかにみえた東京教大が、優勝を意識してのあまり、終始自らのペースをつかめず、単調な攻守のくりかえしで、貴重な60分間を費してしまったことは、せめて、優勝することの難しさ、厳しさを教えてくれたといってよい。（杉山）

全立教 17（9－7／8－5）12 大崎電気

得	【立教】		【大崎】	得
0	尾形	GK	福本	0
4	木野	FP	北村	1
1	東	FP	金田	1
3	江名	FP	井上	2
3	野田	FP	近藤	5
3	北村	FP	竹野	0
3	小野口	FP	片山	3
0	戸田	FP	高橋	0
17	（0）	7MT	（1）	12

（主審 佐野）

今年度夏の全日本総合で大崎電気の作戦と気力に、若さをばくろして、なすことすべて裏目と出て大敗した立大は、この大会で必勝を機して、体育館という条件などもうまく適合し、ゲームも冷静に進めた、大崎は近藤、竹野、井上、北村、金田と超ベテラン、GK福本、対立大は木野を中心に、OB江名、GK尾形を入れて対戦した。

大崎はゴール前でよく動くローリング戦法、立大は大きくボールを廻すセットで両チーム共、ポストプレーを中心であったが、立大はペースを守って着々と得点、大崎は前半の15分までに7点をあげた。だがそのあと、立大のうまい防御に合い、ロング、ポスト共に成功せず、後半の10分近くまでの二十五分間全くポイントできなかった。全立大は後半に入っても野田、北村、小野口、江名などが、着々とポイントをあげ、大崎も頑張ったが、後半全くなすことなく、立大ペースとなり完敗した。

立大OB陣のリード、学生の木野を中心とした全員の乱れぬ動きの勝利であり、大崎は、セットにもう一つ動きの工夫と、ロングシューター竹野に次ぐ者の養成が必要であるという。ゲームを通しての反省を得た。（佐野）



全立教—大崎電気戦

芝浦工大 20（9－5／11－6）11 東京教大

得	【芝浦】		【教大】	得
0	山村	GK	上野	0
1	竹内	FP	川島	4
5	明石	FP	大西	2
5	近森	FP	平岡	2
0	小林	FP	畑	3
6	秦	FP	浅野	0
2	山田	FP	小山	0
1	高鍬	FP	稲垣	0
0	村上	FP	斎藤	0
		FP	森田	0
20	（4）	7MT	（2）	11

（主審 岡前）

芝浦が優勝するためには、9点

以上の得点をあげるか、9点以下であったならば、2点差をつけるかであり、教育大が勝ち、優勝するためには、8点差以上あけねばならないということで、芝浦が勝てば芝浦の優勝、教育大が勝てば全立大の優勝の可能性が強いという状態で、この試合は開始した。

観衆、記者席がヤキモキしているのをふり払うように、芝工大は快調に速攻を中心として得点を重ねた。前半は明石、山田、秦らの得点がめだち、近森が良くアシストをしていた。一方教育大は、大西がチャンスにボールを持ちすぎチャンスをつぶしていた。前半は9—5で終る。後半開始後は芝浦の動きがさえ、教育大は何らなすことなく、易々と防御を破られ、荒い反則をし、7MTをとられ、傷口を大きくしていった。後半23分をすぎるまで、教大は3分に畑があげた1点のみで、全くの無得点。この間に芝浦は10点をあげ19—6と勝利を全く不動のものにした。このあと教育大は5得点をあげ、やっと二ケタになった。この間芝工大は1点。トップレベルにある両チームなのだから、こう調子の波が激しいのは一考を要しよう。海外遠征、強行日程などの劣悪な条件の下でも、十分実力を出しきれるような選手が必要なのだから。（藤本）


芝工大対東教大戦

中沢・芝工大監督の話　今シーズンはもうひとつチーム力が安定しなかったが、この大会では全員よくやったと思う。最終日を前に四者同率という激戦になったが、優勝をかけた教大戦で相手の得点源平岡をつぶしたのが成功した。

芝浦工大 20—17 大崎電気
東京教大 14—11 全立教
（以上2試合は準決勝リーグの記録を適用）

男子決勝リーグ成績

	芝浦	立教	大崎	教大	勝	負	得	失	差
①芝浦工大	……	●	(○)	○	2	1	56	45	11
②全立教	○	……	○	(●)	2	1	45	42	3
③大崎電気	(●)	●	……	○	1	2	46	47	−1
④東教大	●	(○)	●	……	1	2	35	48	−13

注（ ）内は準決勝リーグの勝負

三菱鉛筆、2位に躍進

女子決勝リーグ

田村紡 8 (4—1, 4—3) 4 愛知紡

得	【田村】		【愛知】	得
0	渡辺美	GK	尾崎	0
0	坂上	GK		
0	種村	FP	小林	1
3	渡辺好	FP	前田	0
0	水谷	FP	五十嵐	1
2	小林	FP	小野	0
2	清水	FP	関口	2
1	長谷川	FP	黒木	0
0	甲村	FP	藤池	0
8	(0)	7MT	(2)	4

（主審 柳井）

田村紡は相変らず目まぐるしいほどのパスワークであざやかな攻撃を展開したが決定力を欠き苦しんだ。愛知紡のデフェンスがよく動きポストへの連絡パスをうまく防ぎつまらせてラインクロースを多くさせ得点機をつぶしを戦法は見事であった。後半になって田村紡はトップ関口の動きが大きいのを見るやゆさぶって渡辺(好)がミドルシュートを決めポストの動きを自由にした。もし愛知紡も全員中央に集っての防御作戦でポストをつぶし反撃に転じ関口が7M、小林がステップシュートを相次いで得点。ゲームを盛り上げたが前半の差がそのまま田村紡の勝利となる。愛知紡はもっと多彩な攻撃を研究して連続攻撃する方法を一考する必要があると思われる。(岡前)

三菱鉛筆 5 (2—3, 3—2) 5 大崎電気
引き分け

得	【三菱】		【大崎】	得
0	吉田	GK	川崎	0
0	三井田	FP	加藤	1
2	鈴木	FP	早川	1
0	佐々木房	FP	鈴木	1
2	落合	FP	小林	1
0	佐々木洋	FP	栗林	0
0	江川	FP	木幡	1
1	逓見	FP	山崎	0
0	遠藤	FP	神藤	0
5	(0)	7MT	(0)	5

（主審 田中）

良く知りつくした相手、しかも三菱は登り調子のチーム、大崎は三菱を苦手としている。先手は三菱が落合の得点でとり、大崎もすぐ追いつく、また落合がつき離すという経過で、前半はシーソーゲームの形をとった。しかし内容的には、両チームとも決定力にかけ、シュートを生みだそうとする動きにかけ、シュート数はかなりあったが、得点にはならなかった。終了直前、早川のシュートで

3－2とリードした前半を終了。

後半大崎が先行し、4－2と開いたが、三菱のサイドからの攻撃が鈴木の2点となり実を結び、5－5で、ノータイムを迎えた。この時三菱側にフリスローが与えられ、これを蓮見が打ったが惜しくもバーに当り、引き分けにおわった。（藤本）

三菱鉛筆 13（7－3 / 6－2）5 愛知紡

得	【三菱】		【愛知】	得
0	吉田	GK	尾崎	0
0	三井田	FP	小林	1
2	鈴木	FP	前田	1
0	佐々木房	FP	五十嵐	1
2	落合	FP	小野	1
6	江川	FP	関口	1
3	蓮見	FP	黒木	0
0	佐々木洋	FP		
13	（0）	7MT	（0）	5

（主審 徳永）


三菱鉛筆対愛知紡戦

三菱は脚力に勝る。三井田、落合を中心としてボールをまわしながら最後は蓮見がシュートする戦法は愛知紡も知っていながらそれを防ぐことが出来ない。長身蓮見のシュート力とポストへのパスは見事である。それにしても愛知紡のデフェンスは無気力でポスト及びサイドからのシュートを簡単にさせる甘さはせめられてよい。三菱はGK吉田の好守と波に乗った攻撃には余裕と自信が見られ攻守走のバランスがとれたチームに変っている。一方愛知紡は攻撃に於ても連続性を欠き、小林のシュート力の減退とメンバー不足の苦しさがゲーム上にあらわれて敗戦をよぎなくされている感じがする。今後の奮起に期待したい。（岡前）

田村紡 6（3－3 / 3－2）4 大崎電気

得	【田村】		【大崎】	得
0	渡辺美	GK	川崎	0
2	種村	FP	加藤	2
0	渡辺好	FP	早川	1
0	水谷	FP	鈴木	0
2	小林	FP	小林	1
0	清水	FP	栗林	0
2	長谷川	FP	木幡	0
		FP	山崎	0
6	（0）	7MT	（0）	4

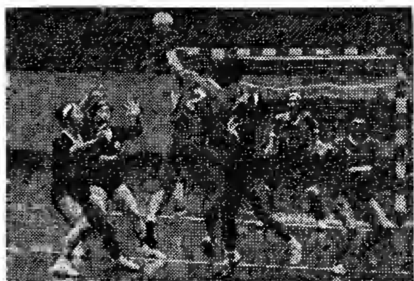
（主審 岡村）

大崎の一線防禦に対し、田村紡は横の動きが多く、しかもエリアぎりぎりのところを動いているため、シュートに結びつかず、まずい攻めを行なっていた。

一方大崎は2分の加藤を皮切りに加藤、小林と速攻を中心にした攻撃で、6分すぎには3－0と開いた。田村紡は10分小林の初得点から、やや精彩をとりもどし、17分、19分30秒の種村の得点でやっとタイに追いつき、前半を終了した。

後半も、大崎は田村紡の2－4、1－5（場合によっては3－3ともみえる）と変化する防禦法に対し、ポスト・サイドとも攻撃が生きず、加藤に打たせても、キーパーにとめられ、攻撃の緒口がつかめなかった。田村紡は後半になっても、横動きが多く、鋭い縦の動きが見られなかったが2分30秒、11分30秒の長谷川の得点で優位にたち、15分をすぎてからの早川の得点で、一点差に迫られたが、小林のだめ押し点で逃げきった。

両チーム共決勝戦を意識したためか、かたくなり、日頃の6分の力も出せなかったのではないだろか。田村紡はこれで全日本総合、国体と合せ、三冠王を獲得した。（岡村）


田村紡対大崎電気戦

鈴木・田村紡監督の話 この大会はチームコンディションが下り坂で、選手には優勝を意識せず思い切りぶつかっていけといっておいた。実業団選手権（2月、熊本）でも勝って、なんとか四冠王を達成させたいと思う。

大崎電気 12－6 愛知紡
田村紡 11－7 三菱鉛筆
（以上2試合は準決勝リーグの記録適用）

住友化学と大洋は辞退

第14回全日本選抜選手権に推せんされた男子の住友化学菊本（愛媛・全日本実業団2位）と、女子の大洋デパート（熊本・国体2位）はそれぞれ勤務の都合で出場を辞退。このため日本協会は男子は補欠ランク1位の岐阜教員をくりあげ出場させ、女子は欠員として7チームで大会を進めた。

女子決勝リーグ成績

	田村	三菱	大崎	愛知	勝	負	分	得	失	差
①田村紡	……	(○)	○	○	3	0	0	25	15	10
②三菱鉛筆	(●)	……	△	○	1	1	1	25	21	4
③大崎電気	●	△	……	(○)	1	1	1	21	17	4
④愛知紡	●	●	(●)	……	0	3	0	15	33	－18

（注）内は準決勝リーグの勝負。2位と3位は得点の多少で決定。

球史に残る江名（全立大）の一投
女子 意義ある三菱鉛筆の躍進

総評 荒川清美

選考基準にしたがって決定されたチームは、男子においては学生3、実業団、教員各2、クラブ1と順当なる選抜であったが、住友化学菊本（愛媛・実業団2位）の棄権によって教員3、実業団、クラブ各1と社会人分野のバランスが崩れたのは惜しいことであった。

棄権チームがあった場合、その補充は同一分野から出したらという意見もあるが、今回の教員と実業団の入れ替えは現状からみて止むを得ないことと思う。

しかし、出場チームの所属地区を東西に分けてみると結果におい

ては西地区より大阪イーグルスだけの出場となってしまい、淋しさを深からしめたことも確かである。

女子は、現在のレベルから実業団6、学生2の配分は妥当であった。しかし、底辺の狭さというか学生界の弱さの現われか、必しも歓迎してよい傾向ではない。

しかも、2年つづけて大洋デパート（熊本）が姿を見せなかったことはかえすがえすも残念である。

選抜の栄誉をうけたチームが連続出場辞退したのは、開催時期、開催地などに一考を要するものか。それとも大会そのものに欠陥があるのか。今後の課題として残されよう。

さて、競技面では、準決勝リーグにおける成績は、男子では教員ならびにクラブは各々シーズンを終え、体調不充分のために思う存分の成果をあげ得なかったことは気の毒であった。

体調万全ならば、おそらく善戦の域を一歩も二歩も出て、いっそう大会を盛りあげたであろうことは大阪イーグルスの対大崎戦、埼玉教員の対東京教大戦、全神奈川の対芝工大戦で如実に実証されたものである。

決勝リーグにあっては、大会はじまって以来というより、史上まれにみる混戦となり、肝胆相照らすゲーム展開をみせて、いずれに軍配があがるか、最終戦までまったく予想のつかない事態となった。

それは、東京教大の対全立教戦の一勝が大きく作用したもので、東京教大の名門の名に恥じぬ力闘は今大会最高殊勲として賞讃すべきであろう。

大会前、優勝候補の唯一にあげられた全立教は、かくして伏兵・東京教大に敗れた一戦がひびき芝浦工大対東京教大の結果によって、全立教、芝浦工大両者同率から得失点差優位の芝浦工大二年ぶりの優勝が決まったわけだが、一試合一試合、強いては一点一点が微妙に優勝争いにひびくという興奮は近来にない大会ムードの高まりを示し、白熱したプレーの応しゅうとなったのは喜ぶべきであった。なかでも印象づけられたプレーは、全立教・江名選手が対大崎電気戦のハーフタイム寸前、自陣からわずかなスキをついて30メートルに及ぶロングシュートを決めたものであった。

この一投は、大会随一の美技として歴史的一投ともいうべきものでたゆまざる努力がもたらしめた快技であったことを肝に命じるべきであろう。

一方、女子の上位戦は常連化した実業団チームによって争われ結局、攻守に安定した田村紡（三重）が全日本総合、国体につぐ三つ目のタイトルを掌中にして幕を閉じた。

いつもながら田村紡の気力充実した攻守はみごとであったが、チームコンディションは最高とは云えず、そこをつき得なかった他チームの力に若干の不満を感じ得ぬでもない。しかしながら、それが田村紡の優勝の権威や格を毫も割り引くものではないことは多言を要すまい。

特筆すべきは三菱鉛筆（神奈川）の二位確保である。

進境を伝えられながら、今ひとつ上位の壁を破れなかった同チームが堂々躍進したことは、固定化しつつある上位の序列を再び混戦模様にしたばかりか、日本女子界のトップ層をいっそう厚いものとすることになった。なお一段の精進を期待しておこう。

打倒実業団をめざした日体大、東京体大の学生勢は、やはり善戦の域を出なかった。しかし、その差を詰めはじめてることは今後への期待を高めるに充分であった。

最後に、大会全般の印象としていささかラフ・プレーが多く、それを審判が見逃していたことを注意しておきたい。正しい競技の理解とクリーンプレーが、レベルの向上につながることをプレイヤーも審判も自覚しなおすべきである。（日本協会理事長）

日本など28ケ国が申しこみ

第7回世界男子7人制に（昭和45年）

一九七二年のミュンヘン・オリンピックハンドボールに重要な役割を果すのではないかと伝えられる第7回世界男子7人制選手権は一九七〇年（昭45）フランスで行われるが、IHF（国際ハンドボール連盟）では、このほど、その参加申しこみを〆切り、その国名を別表のように発表した。

それによると、この大会に出場を申しこんだ国は28ケ国（注IHF正式加盟国は43）で、前回を6ケ回上廻り、史上最高の数字となった。

なお、近着のIHF広報70号によると、フランスでの本大会は16ケ国で行なわれるため、一九六八年から一九六九年にかけて、予選が行なわれる予定。予選の詳細については近いうちに決定があるもようだが、慣例によって前回優勝国のチェコと開催国のフランスは予選を経ず直接、本大会に進むものと思われ、結局26ケ国のうち12ケ国が予選でふるいおとされることになる。

日本は前回はアジア地区代表として予選を行わず本大会（スウェーデン）に出場したが、IHFが今回もアジア地区の独立を認めるかどうかは判らない。

日　本
ベルギー
ブルガリア
デンマーク
西ドイツ
東ドイツ
フィンランド
フランス
アイスランド
イスラエル
ユーゴスラビア
カナダ
ルクセンブルグ
モロッコ
ノルウェー
オーストリア
ポーランド
ポルトガル
ルーマニア
スウェーデン
スイス
ソビエト
スペイン
チェコ
チュニジア
ハンガリー
オランダ
アメリカ

世界女子、予選の組合せ決まる

国際ハンドボール連盟は来年11月16日から24日までソビエトのレニングラードで開かれる第4回世界女子7人制選手権大会の予選組み合せを次のように発表した。

▽ユーゴ対オランダ
▽ノルウェー対チェコ
▽ポーランド対デンマーク
▽スウェーデン対ルーマニア
▽東ドイツ対ブルガリア

予選は2回戦方式で1月から3月までの間に各地で行われる。

この5組の予選勝者のほか、9月の抽せん（オスロー）で不戦勝の幸運をつかんだ西ドイツが本大会への出場権を得る。

なお、前回優勝国のハンガリーと、開催国のソビエトは予選を経ず本大会出場が決っている。

予選からどこが出場することになるかは全く予断を許さないが、ユーゴ、チェコ、ルーマニア、ポーランド、東ドイツが残ると見るのが順当なところであろう。

なお、本誌47頁にもあるように日本はIHFから特に認められ、直接本大会に参加できるようになった。

ヨーロッパ杯幕開く

ヨーロッパ各国の選手権チームによる、第9回ヨーロッパカップトーナメントはソビエトを除く22ケ国の代表が参加して昨年末に幕を開けた。

1回戦6試合の結果ホンブト・ブダペスト（ハンガリー）、デイナモ・ベルリン（東ドイツ）、ミトロフ・ソフイヤ（ブルガリア）、パルチザン・ブエロバー（ユーゴ）、バロンマノ・グラノラース（スペイン）、スラスク・ウロクロウ（ポーランド）の6ケ国が勝ち残り、シードされた10ケ国とともに後掲の組み合せで2回戦を行なうことになった。

2回戦の第1戦は1月5日フランスで、前回優勝のグンメルスバッハ（西ドイツ）対ステード・マルセイユ（フランス）の顔合せで争われ18—8でグンメルスバッハが快勝、2連勝と幸先よいスタートを切った。このほかの組み合せは次の通りである。

▽フレデンスボーグ（ノルウェー）—ハポエル・ペターチ・チクバ（イスラエル）
▽デイナモ・ベルリン（東ドイツ）—ラピッド・ウィーン（オーストリア）
▽ステァウア・ブカレスト（ルーマニア）—フブデュデランゲ（ルクセンブルグ）
▽UK・51・ヘルシンキ（フィンランド）—ミトロフ・ソフィア（ブルガリア）
▽バロンマノ・グラノラース（スペイン）—SCリスボン（ポルトガル）
▽SC・ブダペスト（ハンガリー）—デュクラ・プラーグ（チェコ）
▽スラスク・ウロクロウ（ポーランド）—パルチザン・ブエロバー（ユーゴ）

なお、決勝戦は4月上旬に行われる予定。

女子は近く準々決勝

一方、第8回を迎えた女子ヨーロッパ・カッパはすでにベスト・エイトが決まり、次の組み合せで、近く準々決勝が始められることになっているが、昨秋来日したロイター、GKホイヤーらを主力とした西ドイツのETV・ハンブルグが、前回優勝のシャルジリカ・カウナス（ソビエト）にどのような試合をするか注目される。

▽ラピッド・ブカレスト（ルーマニア）—アドミラ・ウィーン（オーストリア）
▽シャルジリカ・カウナス（ソビエト）—ETV・ハンブルグ（西ドイツ）
▽エムポール・ロスク（東ドイツ）—SZ・オロムウス（チェコ）
▽スイフト・ロエルモン（オランダ）—SKS・クラコウ（ポーランド）



自衛隊にハンドボールが芽ばえて、まもなく10年近くになろうとしている。地味ではあるが、堅実なその歩みは自衛隊勝田（茨城）といったトップチームの誕生に実っている。

最近では大学チームが自衛隊内で合宿を張ったり、日本協会関係者による講習会の開催などが積極的に行われ、一段の飛躍が期待されている。

昨年くれ、海上自衛隊舞鶴教育隊で開かれたハンドボール指導員講習会に講師としておもむいた京都協会・小西博喜氏からその時の模様が次のように伝えられて来たので御紹介しよう。

○……………○

▽……この講習会は昨年12月7、8の両日舞鶴教育隊で、当地方隊（12地区）に勤務している体育指導教官ならびに隊員40名を対象に行なわれました。

現在、舞鶴教育隊においては、ゴールポストも三対（つい）設置され、すでにハンドボールのクラブ活動も菊永三曹の担当によって毎日一時間の練習を行い、日没の早い時は夜光塗料をぬったボールを、使うほどの熱のいれかたです。

教育隊における体育実技として指定されている種目はハンドボールのほかサーキット、バレーボール、水泳、サッカー、バスケットボール、ラグビーなどですが、この教育隊ではハンドボール、サーキット、水泳、サッカー、ラグビーの5種目が実施されています。

すでに舞鶴教育隊でハンドボール実技を受けた人は六百人を数え六ケ月の入隊期間後全国五地区の海上自衛隊に配属されているそうです。

▽……現在ハンドボールの授業は25時間が配当されています。今回そのハンドボールを標準競技とするという海上自衛隊の本部からの指令があったために、特に重点種目として行っていきたいという体育室長・二等海尉塩屋教官の方針と要望に応えて講習会の開催になったものです。

この指導員のかたは将来海上自衛隊のチームづくり（各十二地区の隊において）をするという任務があり、特にルールの理解と、練習法、審判法等を含めた内容を座学と実技に互って指導しました。

来春には各十二地区より青年チームと壮年チームの2チームを編成しまた体育幹部チームも編成し大会開催の計画が出来ました。

司令（旧大佐）も出来るだけ発展していくよう海上自衛隊に於ても努力して行きたいということで塩屋教官も舞鶴教育隊がリーダーシップをとって全国海上自衛隊のハンドボール大会を開きたいという希望を述べておられました。

▽……指導員の方の年令は大体20才～50才位までの年令層です

七日　午後　座学（ルール説明　審判法）
八日　午前　実技練習法
　　　午後　ゲーム審判法

二日とも寒い日で海岸べりの風も強い日でしたが皆熱心に一生懸命のプレーで年輩の方は審判練習にあたられ盛り上った講習会でとなり、いちおう、ゲームの管理もお願い出来るほどになりました。

記憶の新しいうちに、もういちど実際に練習する機会があれば、いっそう完全な指導を与えることができるという感じです。なお、講習会には小西のほか福井喜昭氏（京都市役所）が補助員として参加しました。【小西博喜】＝カット写真は講習会に参加した人たち。

熊本（9日）、大阪（11日）東京（18日）で開催
規則改・修正中央講習会

日本協会は、43年度の大巾な競技規則改正と修正にともなう伝達講習会を次の日程で行うことになり発表した。

日本協会では、参加者は旧競技規則書と審判手帳をかならず持参して欲しいといっている。

▽2月9日午前10時から、熊本市体育館

▽2月11日午前10時から大阪市立中央体育館

▽2月18日午前10時から岸記念会体育会館（体協）地下三階講堂

▽講師　熊本＝安藤純光（日本協会審判部長）佐野和夫、小袋是郎、藤田八郎

大阪＝安藤、佐野、山田計、増岡茂義

東京＝安藤、佐野、岡前義春、藤本強

田村紡を推せん
日本スポーツ賞部門賞

日本協会は読売新聞社制定の第17回日本スポーツ賞ハンドボール部門賞に女子実業団・田村紡チーム（三重）を推せんした。

田村紡の受賞は昭和40年（第15回）につづき2度目。

各地の記録（寄稿歓迎）

大阪イーグルス、西日本制す

第7回西日本一般男子選手権は昨年11月25、26日山口・下松市民体育館に7府県11チームが参加して開かれた。

決勝は教員界ナンバー・ワンの大阪イーグルスと中国選手権優勝の菊松会（広島）の争いとなったが、多彩な攻撃を見せた大阪イーグルスが大量40点をあげて快勝、4年連続優勝を飾った。

▽1回戦（3試合）

佐世保ク（長崎）19（10－6、9－5）11 出光徳山（山口）

スワロー兵庫 22（10－7、12－12）19 三菱レ大竹（広島）

菊松会（広島）30（15－4、15－11）15 京都信用金庫

▽準々決勝

大阪イーグルス 29（17－11、12－9）20 佐世保ク

スワロー兵庫 25（12－11、13－12）23 山口教員団

大分教員団 20（6－7、14－12）19 徳山ク（山口）

菊松会 18（9－8、9－9）17 武田薬品光（山口）

▽同準決勝

菊松会 21（9－12、9－6；1－1、2－1）20 大分教育団

大阪イーグルス 33（13－7、20－12）19 スワロー兵庫

▽決勝

大阪イーグルス 40（21－14、19－9）23 菊松会

西南学院大が4連勝

第17回九州大学体育大会ハンドボール競技は12月4、5の両日福岡九電体育館に10大学が参加して開かれ、西南学院大が新進九州産業大、九大などをおさえて4年連続優勝した。

▽1回戦（2試合）

熊本商大 16－9 福岡教育大

福岡工大 16－11 鹿児島大

▽準々決勝

西南学院大 14－6 熊本商大

九州産大 21－7 長崎大

福岡大 14－13 宮崎大

九州大 12－8 福岡工大

▽準決勝

西南学院 16（7－6、9－2）8 九州産大

九州大 14（7－6、7－5）11 福岡大

▽決勝

西南学院 14（8－5、6－3）8 九州大

女子は中京女大

第8回愛知学生選手権は12月8、9、10日の3日間名古屋・愛知県体育館に男子10校、20チーム女子2校が参加して、トーナメントで行われた。

その結果、男子は中京大が8連勝、女子は中京女大が初優勝した。

▽男子準々決勝

中京大A 24－5 中部工大

中京大B 24－6 名城大B

名　大A 21－14 中京大C

名城大A 17－16 南山大

▽同準決勝

中京大A 25（13－5、12－3）8 中京大B

名　大A 16（8－8、8－6）14 名城大A

▽同決勝

中京大A 26（13－3、13－5）8 名　大A

▽女子決勝

中京女大 8（6－2、2－5）7 中京大

清商ク、城北ク健在

▼静岡県総合選手権（11月・草薙）

▽男子準々決勝

二俣高 11－5 沼津工

気賀ク 15－5 天野回漕店

清水商 40－9 春野高

清商ク 15－9 浜南ク

▽同準決勝

清商ク 14－11 清水商

二俣高 14－11 気賀ク

▽同決勝

清水ク 14（8－1、6－3）4 二俣高

▽女子準決勝

全吉原高 10－5 沼津女商

▽同決勝

城北ク 8－7 清女高ク

城北ク 8（5－2、0－3；1－0、2－0）5 全吉原高

塩山クが制勝

▼山梨県総合選手権（12月・塩山）

▽男子準々決勝

塩山商 24－5 山梨教員ク

O塩山B商 11－10 甲府南高

明誠ク 15－13 甲府工

塩山ク 18－13 園芸高

▽同準決勝

塩山商 11－5 明誠ク

塩山ク 19－17 O塩山B商

▽同決勝

塩山ク 13（5－5、8－4）9 塩山商

神埼農が連勝飾る

▼佐賀県高校大会（＝男子のみ）

▽1次戦

神埼農 55－0 嬉野

佐賀東 11－5 清和

▽2次戦

神崎農 18－1 清和

佐賀東 29－5 嬉野

▽決勝戦

神埼農 14（8－3、6－5）8 佐賀東

▼山梨県高校新人大会（11月・塩

山商）

▽男子決勝

塩山商 10（4−2、6−1）3 甲府工

▽女子決勝

山梨 7（2−2、5−1）3 塩山商

常盤工業、貫録示す

▼岐阜県総合選手権（11月・岐阜）

▽男子準々決勝

加納高 14−5 岐阜大

常盤工業 18−3 岐阜西工

全岐大 21−8 不破高

岐阜西工ク 18−7 益田高

▽同準決勝

常盤工業 17−3 加納高

岐阜西工ク 19−18 全岐大

▽同決勝

常盤工業 21（7−8、14−4）12 岐阜西工ク

▽女子準々決勝

本巣高 4−2 鶯谷高

益田高 11−2 養老女高

加納高 9−1 大垣北高

巣友会 6−3 鶯谷OG

▽同準決勝

益田高 6−3 本巣高

加納高 7−2 巣友会

▽同決勝

加納高 5（0−3、4−1、0−0、1−0）4 益田高

（注）この大会は作年まで種目別選手権として行われていたものを新たに一本化したもの

羽水（男）若狭（女）が躍進

▼福井県高校新人大会（11月・羽水高）

▽男子準決勝

羽水 5−4 福井商

若狭 12−7 敦賀工

▽同決勝

羽水 10（4−5、6−3）8 若狭

▽女子準決勝

高志 4−3 福井商

若狭 4−2 羽水

▽同決勝

若狭 7（4−2、3−2）4 高志

和商ク、住金を破る

▼和歌山県秋季選手権（11月・粉河高）

▽男子準々決勝

住友金属 24−4 和歌山工専

丸善石油 18−12 和歌山大

那賀高 11−9 和歌山商

和商ク 18−4 那賀ク

▽同準決勝

住友金属 9−8 那賀高

和商ク 20−11 丸善石油

▽同決勝

和商ク 25（9−4、16−6）10 住友金属

▽女子決勝リーグ

貴和高 4−3 和歌山商

和歌山商 7−3 御坊

御坊 4−2 貴和高

【順位】①和歌山商得点率○・五八②貴和高○・四六③御坊○・四三＝いずれも1勝1敗

麻生高、自衛隊破り優勝

▼第17回茨城県総合選手権（11月・勝田市、石岡市）

▽男子準々決勝

麻生高A 12−4 石岡一高A

茨苑ク 26−8 竜ヶ崎一高

茨城大 16−5 水海道一高

自衛隊A 25−5 石岡一高B

▽同準決勝

自衛隊A 34−11 茨城大

麻生高A 21−20 茨苑ク

▽同決勝

麻生高A 14（8−4、6−8）12 自衛隊A

▽女子準々決勝

水海道二高 22−4 石岡二高A

八郷高A 14−3 磯原高A

石岡二高B 21−7 笠間高

麻生高B 22−10 水戸二OG

▽同準決勝

八郷高A 5−4 水海道二高

府生高B 18−1 石岡二高B

▽同決勝

麻生高B 15（5−2、10−3）5 八郷高A

▽中学男子決勝

千代田A 36−21 波崎A

▽同女子決勝

結城A 13−3 新治A

麻生、新人戦でも快勝

▼茨城県高校新人大会（12月・竜ヶ崎一高）

▽男子準々決勝

麻生 8−7 石岡一

鉾田一 7−4 真壁

竜ヶ崎一 8−7 水戸工

笠間 16−11 波崎

▽同準決勝

麻生 17−0 鉾田一

竜ヶ崎一 10−3 笠間

▽同決勝

麻生 18（9−0、9−1）1 竜ヶ崎一

▽女子準々決勝

石岡二 5−4 笠間

鉾田二 11−3 結城二

水海道二 14−6 常北

水戸二 10−8 磯原

▽同準決勝

水海道二 9−4 鉾田二

石岡二 8−5 水戸二

▽同決勝

水海道二 6（3−1、3−3）4 石岡二

▽中学男子新人決勝リーグ順位①千代田②波崎二③桜丘

▽同女子新人決勝リーグ順位①波崎二②桜丘③麻生一

栃木女高、勝つ

▼第15回栃木県総合選手権（12月国学院栃木高）

▽男子準々決勝

宇都宮工OB 14−11 石橋高

球友会 22−12 足利高

K・A・O・ 13−8 海上自衛隊

国学院栃木高 12−10 足利工

▽同準決勝

球友会 12−5 K・A・O・

国学院栃木高 13−6 宇都宮工OB

▽同決勝

国学院栃木高 14（4−3、10−4）7 球友会

▽女子準決勝

国学院 16−7 足利女高

栃木女高 5−3 小山城南

▽同決勝

栃木女高 17（9−1、8−1）2 国学院

秋の大学定期戦

▼第7回早慶明（11月・早大）

慶大 14（6−5、8−8）13 明大

早大 24（8−6、16−6）12 慶大

早大 17（4−10、13−5）15 明大

【順位】①早大②慶大③明大＝早大の優勝は2年ぶり5度目

読者の立ち場から
機関誌に望む

読者の立ち場から機関誌への注文ということだが、卒直に言って機関誌は、ようやく最近になって「読める」ようになったといってよい。それまでの機関誌が無意味だというわけではない。読者―つまりファン、関係者―がいちばん読みたい、知りたいというニュースやコメントがあまりにも少なかったのだ。実業団の選手がいったい何故たなどという記事がいったい何故必要なのか、私はずいぶん疑問に思ったし、つまらぬ雑報が大きなスペースをとっていたことも再三ではなかった。そうした記事が読者にうけないことを賢明な編集スタッフが気づかぬわけはないと創刊以来の機関志支持者である私は期待していたわけなのだが、それがやっと改めはじめられたのは嬉しいことだ。アマチュアスポーツ団体の機関誌というものの使命はなかなか難しく、何をもって最高とするかは私にも判らない。しかし、ハンドボール界に限っていえば本部協会の姿勢のインフォメーションと技術的な論文がその中心となるべきではないかと思う。機関誌は「軟」より「硬」の内容であるべきだ。ここ一、二年におこったハンドボール界のトラブルによって、地方球界の中央執行部などに対する不信が強いということを機関誌で私は読ませていただいた。それを立て直すには本部協会役員が機関誌を百パーセントに活用して大小を問わず、一切の決議を地方に知らしめる他はないと思う。ガラス張りの政治のガラスの役を機関誌はつとめるのだ。

次に、オリンピクという大目標を前にチームやプレイヤーはいかなる方向（技術的な）へ進むべきか岐路に立たされていると思う。その意味で世界のあらゆる国のハンドボールテキストの翻訳は大いに役立つと思う。また国内の有名コーチのリポートの掲載も待望したい。

ところで機関誌の好在を知らぬOBが意外に多い。これは残念だ第一もったいない。読者がふえればきっと定価も下がるだろう。我々にとってはこの上ないことだ。我々も大いにPRするつもりだが本部でももっと積極的に宣伝なさったらどうか。だいぶ苦言ばかりを述べたがお許し願いたい。なんのかんのと云いなら「ハンドボール」「ハンドボール」「ハンドボール」で埋まった雑誌の発行を喜び、毎月首を長くして待っている連中ばかりなのだから……。

（植田修司・関東学連理事）

本誌創刊50号にあたって……

編集者の立ち場から
機関誌を考える

本誌も50号を迎えた。ここまで来られたのは球界あげての御支援と、読者各位の御理解によるものである。

今や、体協加盟の競技団体のほとんどは立派な機関誌を持ち、各競技の健全な発達に大きな力となっている。この「ハンドボール」もそうした先輩誌に負けぬよう歴代の編集スタッフは努力を重ねて来た。しかし、卒直にいって我々としては、この機関誌の持つ使命と現実に大きなへだたりがあることを痛感している。

その最大の理由は、あまりにも「こうした」「こうなった」「こうだった」というような出来ごとの報告とふりかえりが多いことである。もちろんそうした記事も、読者各位からそれなりに支持されてはいるし、重要性も判ってはいるが、少くとも、現時点における編集スタッフは前向きの姿勢と理論によって全ページを埋めつくしたいと思っている。つまり「こうしよう」「こうすべきだ」「こうしている」という記事を中心に機関誌を歩ませたいのである。

協会の運営についても、技術の発展についても、審判の向上についてもあらゆることにその理念を貫き通したい。機関誌を開くと、明日のことが判るといった内容が我々の目指すものなのだ。

これまでにも、多くのかたがたにそうした狙いの原稿を依頼し、卓越した各位の理論に接することができた。これからは、もっともっとそうした場をふやしたい。

全国の多くの読者のかたがたは機関誌は編集委員が書き、つくり送っているものと思っていられるようだが、そうではないのだ。機関誌はあなたのものなのだ。我々、編集スタッフは単なる「原稿整理員」にすぎない。ところが現実は、読者各位からの寄稿が少いため、かなりのページを編集スタッフの〝持ちより原稿〟で埋めている。どうか、あなたの球界への意見や、技術研究をためらわず編集部までお送り願いたい。

夢は大きくもつにこしたことはない。日本のハンドボール界が世界に雄飛し、それとともに日本の技術研究、日本球界の動向を知るため、本誌が世界からひっぱりだこになる日が必ずくることを信じつつ、今後の機関誌をより一層充実したものにしてゆきたい。

編集後記

○…今回は30周年特集号として、多くの方々の手を借り、今後への課題と30周年の回顧を行ないました。残念ながら、原稿をお願いしたすべての方に原稿をいただけた訳ではないのでその点非常に心残りです。

○…ミュンヘンまでもう4年ないのです。今年の冬には、ミュンヘンへの第一関門である世界選手権の予選がはじまります。一九七二年にミュンヘンに行くためには、まず一九七〇年の世界選手権で八位入賞しておくことが必要です。その一九七〇年の世界選手権に出場するための予選が今年はじまるのです。

三十周年を祝ったところで、改めて、ハンドボール界が一丸となって、選手強化にそれぞれの持ち場で全力を傾注しなければなりません。もう遅いのです。一日も早くスタートを切り、追いつかねばなりません。

ミュンヘンはハンドボールをやっているものみんなの一つの目標なのです。誰かがやるだろう、トップレベルにまかしておけでは、だめなのです。全員がやらなければ代表チームを送ることすらできなくなります。すぐにそれぞれの持場で活動をはじめましょう。全員の気持を一つにして（TF）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第五十号
昭和四十年六月[illegible] 第三種郵便物認可
昭和四十三年一月二十五日印刷 昭和四十三年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 鈴木達雄
定価百五十円